

THE UFO RESEARCHER

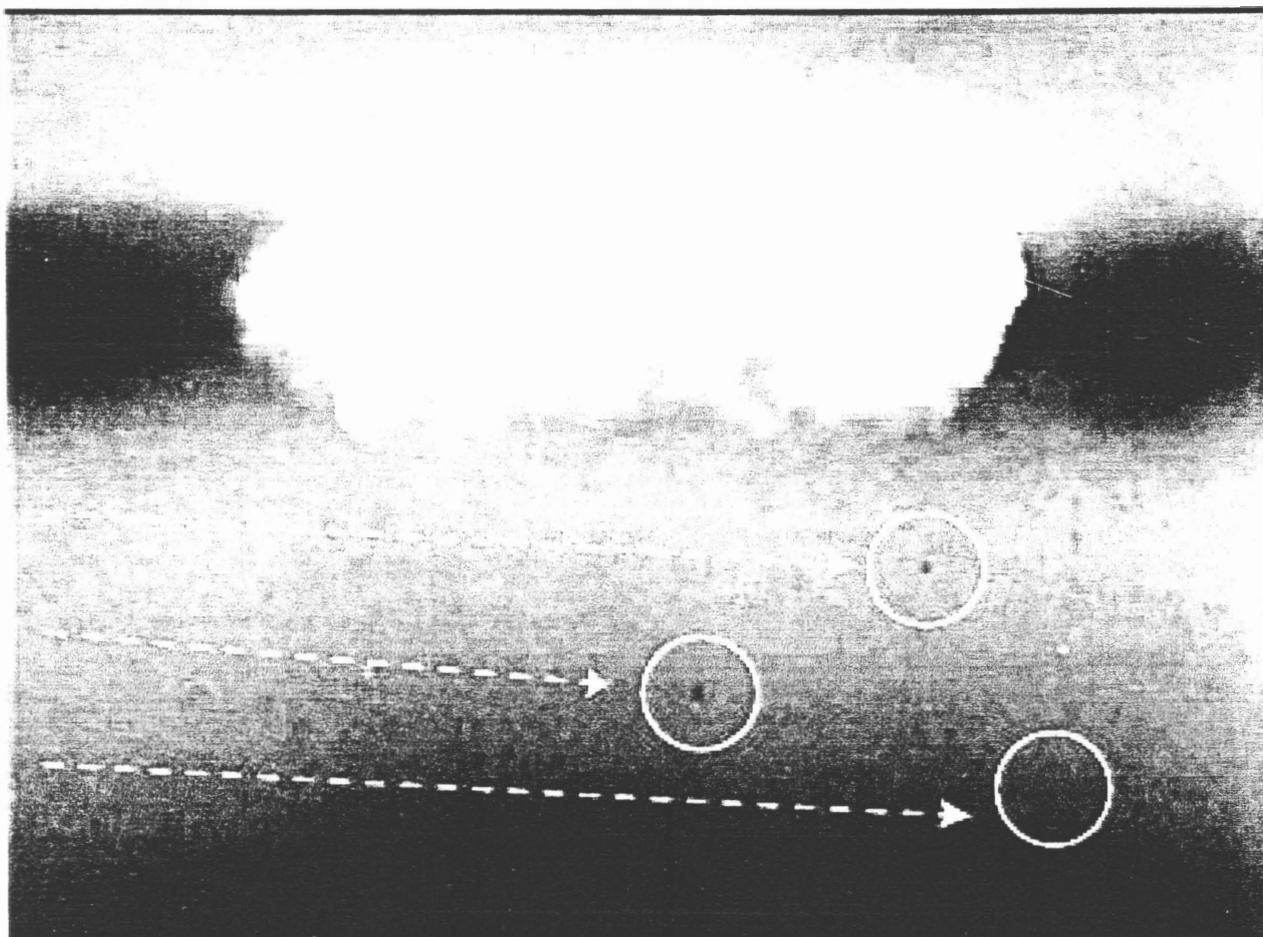
Sky People Association-west Japan

VOL. 16 NO. 1 2006

Kiyoshi Amamiya

193-5, Byodobo-cho, Tenri-city Nara-pref. 632-0077 JAPAN

(通巻50号記念号)



核爆弾が炸裂し、立ち上るキノコ雲を背景にして、黒い円形の飛行物体が3個、
三角形に編隊を組み、乱れることなく整然と横切ってゆくシーン。

【心交社ビデオ・最新コマンドシリーズ「核兵器その1 原子爆弾—悪魔の使者」より】

核とUFO 問題資料集成 I

1958年12月22日午後3時

ポーランドのムシナで撮影されたUFO

オレンジ色に輝いて見えた物体が、撮影されると灰色のシルエット状になった



22 December 1958, 15:00, Krynica-Muszyna, Poland. Dr. Stanislaw Kowalczewski and his wife snapped one photo of this object just as it came through the clouds. The photo was taken from the clinic window. Though brilliant or brightly reflective to see, it photographed dark.

写真提供: ロベルタ・コンスタンチン・リジャニキエビツチ Robert K. Lesniakiewicz (Jordanow, Poland)

THE UFO RESEARCHER

Magazine of SPACE & UFO FACTS

Editor: Kiyoshi Amamiya

Managing Editor: Yuki Amamiya

Associate Editor: Osamu Sato

Taira Fuzi

Fumi Kohara

Mari Saito

Illust. Associate: Shima Amamiya

Photographic Asst.: Tatsuya Inui

Circulation Dept. Masaya Komagamine

Research Staff: Hirokazu Fujihira

Teiji Sato

Shunya Moue

Takao Shimada

Kiyoshi Amamiya's

site Designer: Masahiro Tsuda

REPRESENTATIVES and CORRESPONDENTS

are all over the world.

Exchange Partners: SKY PEOPLE ASSOCIATION

Japan Space Phenomena Society

Kazuno UFO Research Association

The UFO Criticism by J.N. from Japan

Tugio Kinoshita(Director of UFO Contact House)

The organization of UFO Research Japan

Robert K. Lesniakiewicz (Poland)

SWIAT UFO(Poland)

NIEZNANY SWIAT(Poland)

CBUFOiZA(Poland)

BIBLIOTECA UFO ROMANIA INTERNATIONAL(Romania)

CALIN N. TURCU(Romania)

JUDr. Jiri KULT(Czech)

Milan Dolezal (Czech)

Takashi Okamura(U.S.A.)

Richard F. Haines Ph.D.(U.S.A.)

NARCAP(U.S.A.)

AFU(Sweden)

THE JOURNAL OF UFO RESEARCH(China)

UFOlogy Quarterly(Taiwan UFOlogy Society)

LIU FENG JUN(China)

Cheng Bainian(China)

Wu Jia Lu(China)

UFOlogy Research Institute of ShanXi(China)

Revista UFO(Brasil)

Francisco Fazio Baiz(Argentina)

Ahmad Jamaludin(Malaysia)

Jutta Eli(Israel)



2000年前と何も変わっていないな
今度は誰に扮して指導しようか

ホッタ閃玉 2003.

THE UFO RESEARCHER published by SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN, Printed in japan.

© 2006 SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN

巻頭言

“地球外知性と人類の歴史”・我々の基本的な考え方

歴史時代をさかのぼる我々の遠い祖先は、200万年以上のながきにわたり、大自然のなかで狩猟採集民として営みを続けてきた。この長大な歴史のなかにおいて、ある時期、突然にして人類史上、革命的な技術を獲得したのである。それこそは、農耕の発生であり、この知識や技術なくして、文明の誕生、発展も成すことが出来ず、我々は今日、この世界に存在することは無いと言える。祖先が与えてくれた栽培植物は人類にとっての最大の遺産であり、今日も、それは欠く事のできない生活の基盤となっている。農耕と栽培植物発生の歴史を知ることは、我々自身を知ることである。

真摯であり献身的でもあった、ユーホロジストのパイオニア達により、すでに、この歴史研究の進むべき方向は指し示されている。彼らの成果をふまえた我々の研究は、徐々に、農耕の発生を含む古代史の真の姿を解明しつつある。

古代世界では民族、部族間において言語、習慣の大きな違いにもかかわらず、農耕の基本文化複合は全世界共通であることの実事。驚くような進化をし、その地域の環境に適合した多数の栽培植物が世界中、独自に存在する事実。そして、世界の伝説、神話のほとんどが例外なく伝える内容、文化英雄、太陽神、半神半人など、さまざまな名で呼ばれた存在によってもたらされた栽培植物と農耕技術。これらを総合的に捉え、全く新しい視野に立ち、分析することにより、一つの巨大な歴史の真実が我々の前に姿を現す。栽培植物と農耕技術は第三者により古代世界に与えられたものなのだ。第三者としての神神を古代人の想像の産物より現実の存在へと引き戻すことは、我々をして、驚愕的な歴史の発見へと向かわせる。国、都市国家の誕生や宗教、律法の成立にいたるまで基礎文化は、現実の神神、天空よりの人々の深い関わり合いなくして存在し得ず、その量り知ることの出来ない恩恵の結果でもあった。歴史のなかに埋没してしまったような小規模な文明から、華々しい大規模文明まで、その栄枯盛衰を学ぶことは、現代世界の置かれている状況を認識することでもある。世界の各地で、多大な労力と年月をかけ、ジグラットやピラミッドを築き、天空の人々を迎えようとしたのも古代人であり、また、その文化を形骸化させ、勢力争いなどの闘争へと向かったのも、同じ古代の人々であった。それは、文明を手にした人々自らが選んだ闘争の歴史であり、古代から中世を通して現代に受け継がれているものである。天空の人々は、大いなる権威者として、神として、古代の人々に臨んだのだ。それが天空人の真の姿であるのならば、彼らは、この現代社会の全ての人々が、その存在を認めなければならなくなるようなかたちで、この社会に現れることはないだろう。それは、我々が選んだ「道」に対する深刻で重大な干渉になるからだ。例え、国や民族が存亡の危機に瀕した時であっても、道義的な意味において、彼らは、何も関わり得ないのだ。我々自らの行為の結果としての利害は、全て自らの責任であり、これが、真の意味での「自由独立」なのである。

濃き雲、天空の炎、炎のチャリオットなどの、さまざまに表現された、天空の人々の乗り物は、変わる事のない姿を、今も世界の空に現わしている。

Over the course of 2 million years, our distant ancestors have lived as hunter-gatherers in the great wilderness. Following this vast expanse of time, mankind spontaneously achieved a technological revolution. That, which is the birth of agriculture, was the key to the birth of civilization, and we can say that without it, we would not be in this world of ours that we know. The crops we harvest are the greatest gift by our ancestors, and to this day, our daily lives are based upon it. To know the emergence of agriculture is to know us.

The devoted and diligent works of the pioneers of ufologists have shown in which direction this research should follow. Our research based upon their accomplishments has begun to reveal the true nature of the history of the distant past, including the rise of agriculture.

The fact that, regardless of the differences in culture and language, the basis of the agricultural cultures of the distant past mirrored one another throughout the world. The fact that, following extraordinary steps in evolution independent from one another, multiple distinct species of agricultural plants exist in multiple places throughout the world, each adapted to their surrounding environments. And the fact that all the mythologies and legends of the world tell of cultural heroes, sun gods, demigods, in various forms that bestowed the crops and agricultural technology, almost without exception. By comprehensively taking and analyzing this information from a totally new standpoint, we begin to see the great truth. Agricultural plants and technologies were granted to humankind in the past by foreign entities.

By shifting the presence of the gods from a product of our ancestors' imagination to an existent being, it leads us to an astonishing discovery in history. The basic culture that gave rise to countries, city-states, religion, and law is the result of an immense gift bestowed upon us, which cannot be without the presence of the celestial entities and the gods in reality. From the humble civilizations lost in the sands of time, to the great civilizations that have prospered, to learn of their history is to understand the current position our civilization is placed in. It was the ancients, who expended a tremendous amount of time and effort to construct the ziggurats and pyramids around the world, tried to embrace the celestial entities, but also reduced their great civilizations to a perfunctory state, and headed into battle in the struggle for power.

That is a path of conflict that the ancients chose to follow when they acquired civilization, and the path has been followed through the middle ages and to this very day.

The people of the sky met the ancients, as great authorities and as gods. If that is their true nature, they will not appear before the entire modern population in a form, which forces the people to acknowledge the celestial peoples' existence. That would be a serious and significant interference to the way we have chosen to live. Even if it meant that countries or races of people were in danger of extinction, from a moral standpoint, they cannot intervene. The consequences of our actions are entirely of our responsibility, which is "freedom" and "independence" in its true form.

The thick clouds, the fire of the heavens, the chariot of fire; the vehicles of the celestial people are described in many ways are ever present before us in their unchanging forms.

Takashi Okamura & Robert Duvall

**現代農業をしのぐ
古代アンデス農法** 12/7

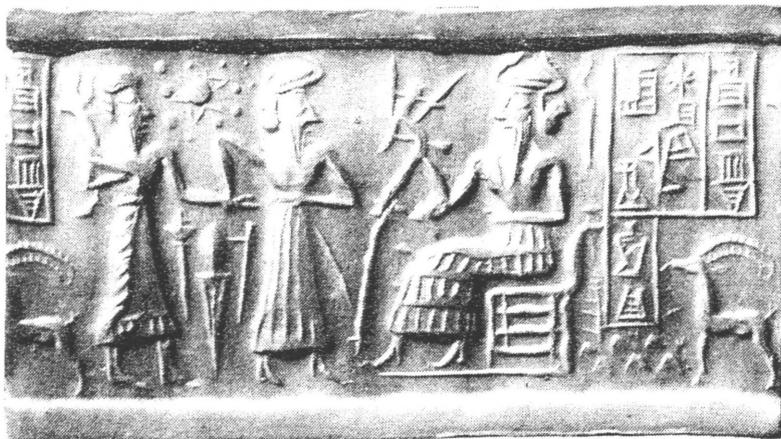
南米アンデスのチチカカ湖湖
辺で発見された三千年前の奇妙
な形の耕作地を米国の考古学者
たちが現地へ復元、耕作実験を
行ったところ、アンデスの古代
人は現代を上回る農業技術を持
っていたことが分かった。

必要とする資本集約型農業と違
うに、アンデス山脈
アンデス山脈
ブラジル
チリ
ホルヒア
太平洋
湖

この農法
は化学肥
料、機械を
必要としない。

現代農業をしのぐ
古代アンデス農法

必要とする資本集約型農業と違
うに、アンデス山脈
アンデス山脈
ブラジル
チリ
ホルヒア
太平洋
湖



■シュメールの円筒印章にみられる神から
人類への勤の教授場面。
人力によらず、家畜の力で耕す「勤農耕」
は、人類に飛躍的な恵みをもたらした。
【写真はZecharia Sitchin著the 12th Planetより】

■1988年12月7日「朝日新聞」より

■文化英雄“Culture-heroes”

「フィリピン主島ルソンに住むボントック、イゴロット、イフガオの諸族の伝説に従えば、彼らの文化は不思議な異人衆の賜だった。この異人衆は天から天降って、巨石の用法、金属の製作、耕地をつくること、灌漑を施すことを始め、ありとあらゆる知識を彼らに授けた、というのだ。」

「或る生物によって人間の文明が創始されたという土人の説話には、明らかに何等かの真実がある。伝説が不可思議な異人のわざであると語るところの、食用果樹の移入、並びに定住生活の手段(農耕)を教えたことは、古代文明人衆の行為として既に我々の考定し得た事柄である」

「数群のオーストラリア種族は、『万物の父』(“All-Fathers”)と彼等自身で呼び伝えてきた存在を深く信じている。『ナルリニエリ族はこの至高存在をヌルンデレ(Nurundere)またはマルツムレ(Martummere)と呼び、地上の万物を創造したものと信じている。…このヌルンデレは彼の子供たちと共にウィルラワルレへ赴いた。(ウィルラワルレ“Wuyirrawarre”とは天のことである)』

「パイオ族は至上存在をヌレルリ(Nurelli)と呼ぶ。ヌレルリは黒い人間に色々な法則を教えた後に、天に昇り、星座の一つに位することになった。」

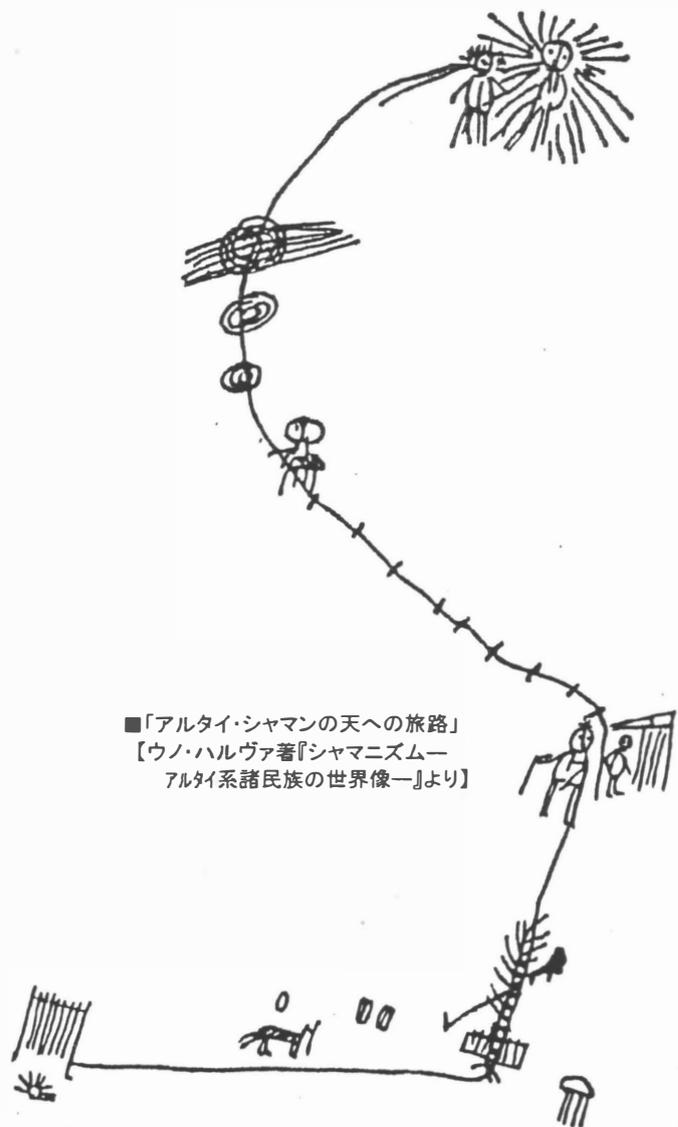
「クーリン族の物語るブンジル(Bunjil)も、クーリン族の祖先に生活の各種の技術を教えた末に、その子供たちを連れて昇天した。」

「中央セレベスのトラジャ族は、むかし彼等の間に天降って彼等と共に住んだ『日の君』ラサエオ(Lasaeo)から、彼等の文明を授かったと信じている。」

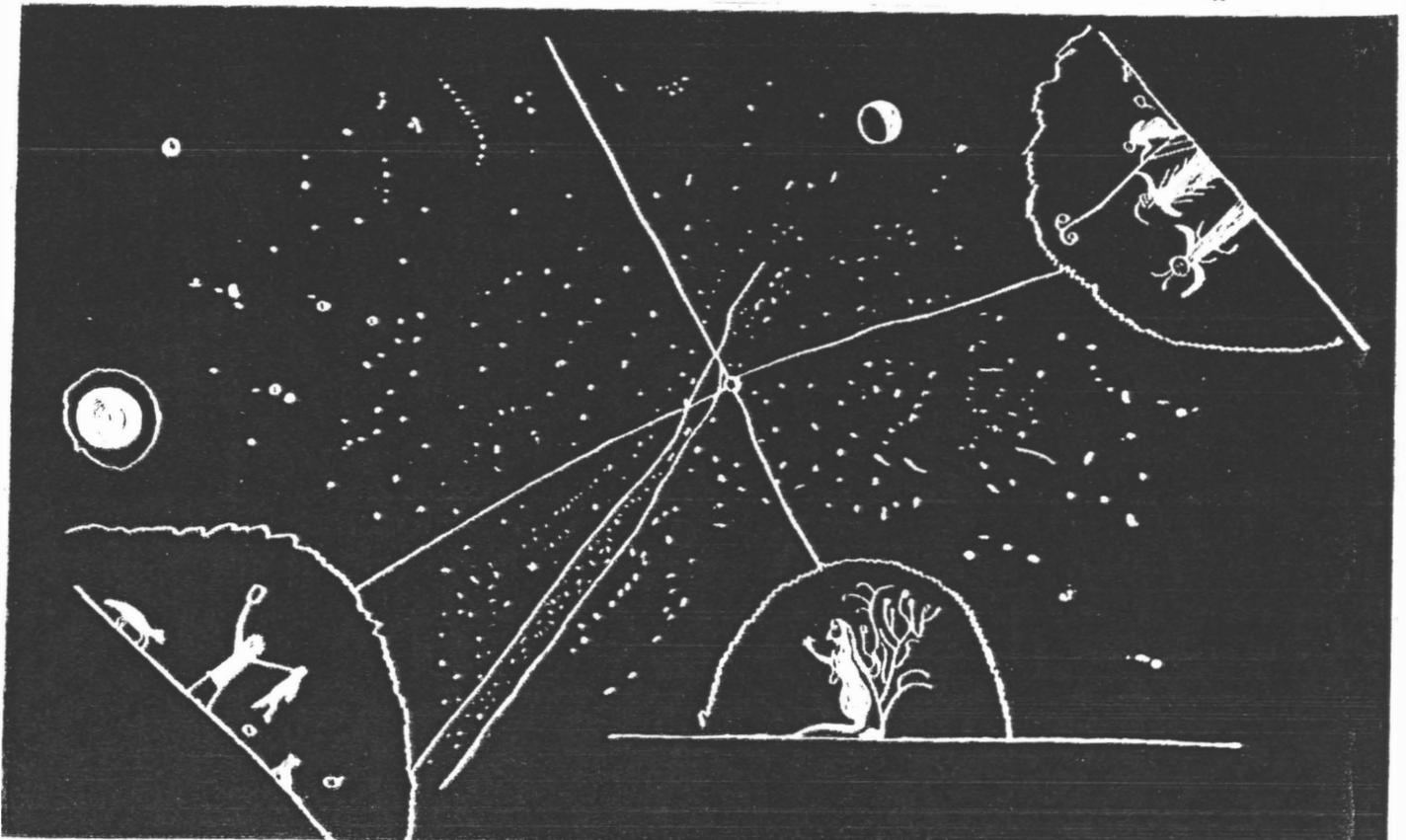
「トラジャの信ずるところでは、女子の役目である僧侶の仕事、病を治すこと、収穫に関した事、死者を葬ること、家屋を建てること、これらは土着起源に非ず。天上界の人間の工夫したもので、これを教えるために天人たちが地上の婦人の若干を天へ伴って行った。で彼女等がこれを習い覚えて地に帰ったのが、この種の技術と儀式のそもそもの起こりである、というのだ。」

「巨石の使用、灌漑農耕を移入した文化英雄は、人間の生命の性質に関する観念をも伝えた。人が健康を保ち、食物供給を得、間違いなく家を建て、更に死後の国への安全な道を見出すこと……」

【春秋社版 世界大思想全集65-66 ペーリー著『古代文明研究-太陽の子』1931年より】



■「アルタイ・シャマンの天への旅路」
【ウノ・ハルヴァ著『シャマニズム—
アルタイ系諸民族の世界像—』より】

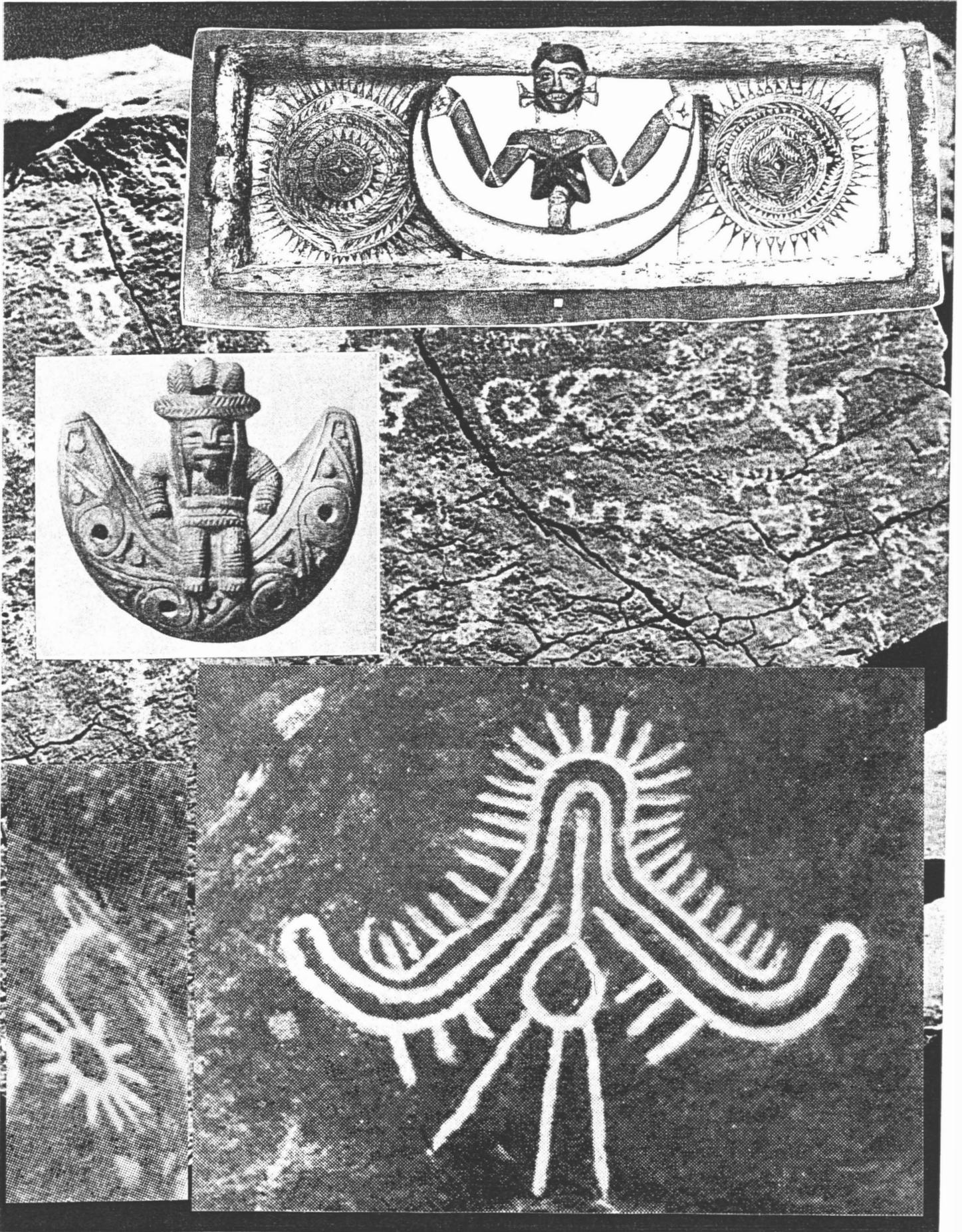


■シベリア東部チュコトの人々が描いた世界。【ジャン・ピエール・ヴェルデ 著『天文不思議集』より】

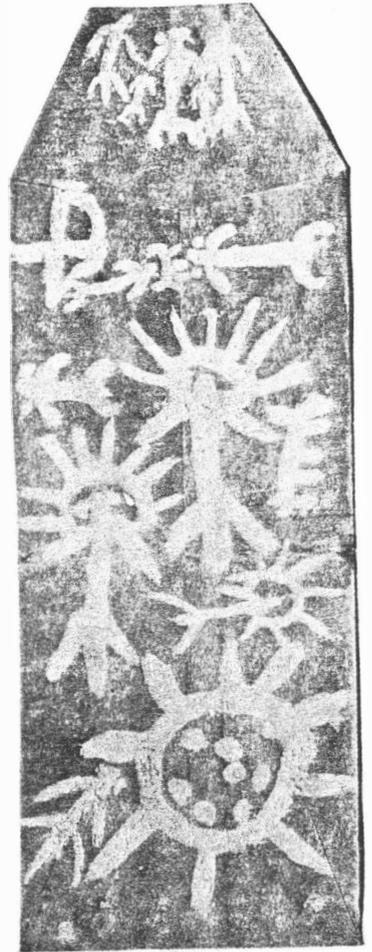
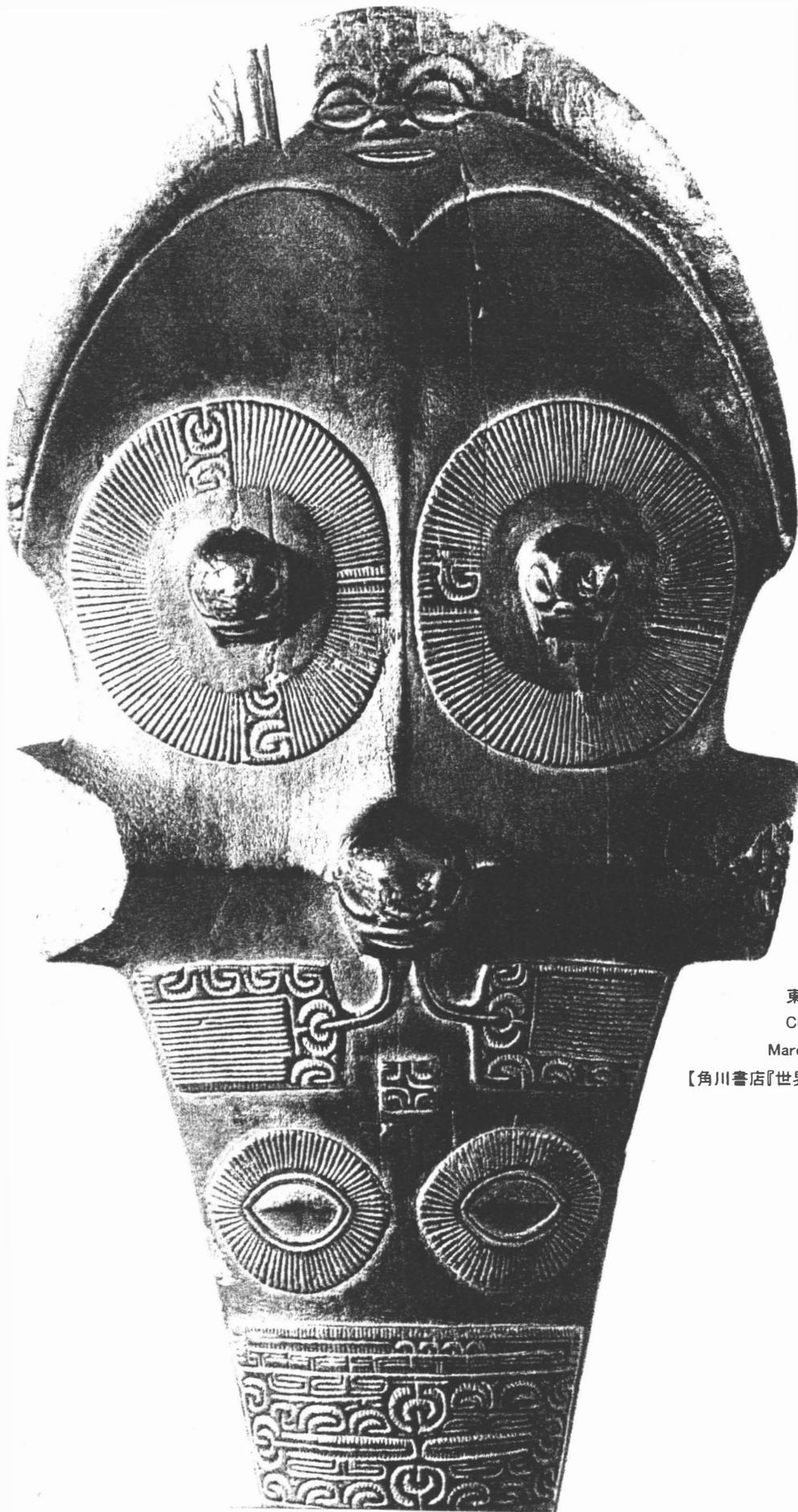


■太陽 チリ南部海岸アサパ河谷セロ・チューニヨ
The Sun. Cerro Chuno, Azapa Valley, Chile.

【角川書店『世界美術全集24アメリカ』1962年より】



■上:祖靈額 アドミラルティ島 中段左:オリナタイロ文化 コロンビア、サンタ・マルタ出土 中段右:岩絵 ペルー、サンタ・クララ 下:謎めいた意匠 アンデス 【平凡社『世界美術全集原始』1956年 角川書店『世界美術全集24 アメリカ』1962年より】



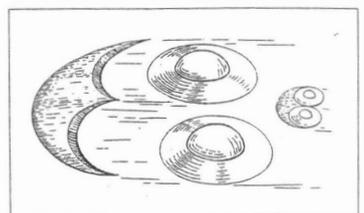
■人物と動物の便化円様
ヴェッダ族 セイロン
【平凡社『世界美術全集
原始』1956年より】

■棍棒(部分)木彫(カスアリナ)

東部ポリネシア、マルケサス諸島
Club(Detail), Wood Carving(Casuarina).
Marquesas Islands, Eastern Polynesia.

【角川書店『世界美術全集23民族美術』1965年より】

■Master Craftと呼ばれる
三日月型と円盤の結合タイプ。
米誌『ホワイ・スター・イル
ミネーター』が1960年頃掲載。
【CBA『空飛ぶ円盤ダイジェス
ト』1961年8月号より】





【『インド古代彫刻展』1984年より】

About 500 B.C., the Sakya people were celebrating the birth of their prince later called Buddha, when a phenomenon was sighted over the

palace: Gods let umbrella-like things with many spokes and many concentric rings hover in the air and whisks with a golden stick wave themselves up and down. No one was to be seen holding them. (from Sutta-nipāta)

「王子はどこにいますか。わたくしもまたお目にかかりたい。」と。そこで話のシヤカ族は、鎔炉で巧みな金工が鍛えた黄金のようにきらめき、幸福に光り輝く尊い顔の児を、アンタという（仙人）に見せた。火焔のように光り輝き、空行く星王（日月）のように清らからで、雲なくして照る秋の太陽のように輝く児を見て、歡喜を生じ、非常な喜びを生じた。」

インドでは秋の空は澄んで、透き通っていて、雲の影が殆んど見られないし、北インドでは雨も絶対に降らない。だから、雲なくして照る秋の太陽」という形容が生きて来るのである。

「神々は、多くの骨あり、千の円輪ある傘蓋を空中にかざした。黄金の柄のある私子を上下に願いだ。」

しかし、私子や傘蓋を手にとっている者は見えなかった。」

■中村元著『ゴータマ・ブツダ』より

問 題

一・(一) 梵論師等の曰く、「宇宙の根元は梵なりや？ われらは何物より発生したるや？ われらは何物によりて、何物に基づきて生きつゝありや？ 梵智者よ、何物に支配せられて、われらは苦楽等に処して各自の境遇を生きるや？」

(二) 時間、本性、必然、偶然、諸原素、胎、原人等は根元と認むべきや？ したらず、別に自我なるもの存在するを以ての故に。しかも、自我を以て根元と見なすべきや？

また快と苦の因を左右し得ず」

■佐保田鶴治著『ウパニシャド』より

■仏陀誕生のインド イクシャヴァーク時代 3世紀 ナーガールジュナコングラ出た 仏陀の一代記の場面を詳説を混えた難やかな表現で示す。中段がナンビ二面の菩薩像の下で右端下から仏陀を出産する場面。その上が「摩訶」と「私子」。

■インカ人(Incas)の伝えるペルーの神話伝説によると、マンコ・クカパック(Manco Ccapac)という神は、土をこねて様々な人形をこしらえ、様々な色を塗った後、命と魂とを与えて、言葉を与えて、詠うべき唄を教えて、地に播くべき食物の種を与えた、という。

別な神話によると、マンコ・クカパックは太陽と月の子であり、インカ王族の神話的祖先で、その妹であり妻であるママ・オウロ(Mama Oullo)と共に、天界に住んでいたが、太陽と月の命によってチチカカ湖の近くに降ってきて、人類にさまざまな利益になる技を教えたという。

別な伝説によると、二人は黄金の楔を受け取って、人間世界に降った。そして、あちらこちらと歩き回っていると、クスコ(Cuzco)で黄金の楔がマンコ・クカパックの手を離れて、大地の上に落ち、土の中深く沈んでしまった。二人は「父に言われた通りだ。ここに住んで人間を教え導こう」と、クスコに住家を作り、人間たちを呼び集めて、いろいろな為になる技を教えた。

マンコ・クカパックは、男の人たちに地を耕して穀物をつくることを教え、ママ・オウロは、女の人たちに糸を紡いだり機を織ったりすることを教えた。

【名著普及会『世界神話伝説大系 17

「ペルー・ブラジルの神話伝説』より】

写真説明:「神像をあらわした黒色土器 ペ

ルー中部海岸後古典期

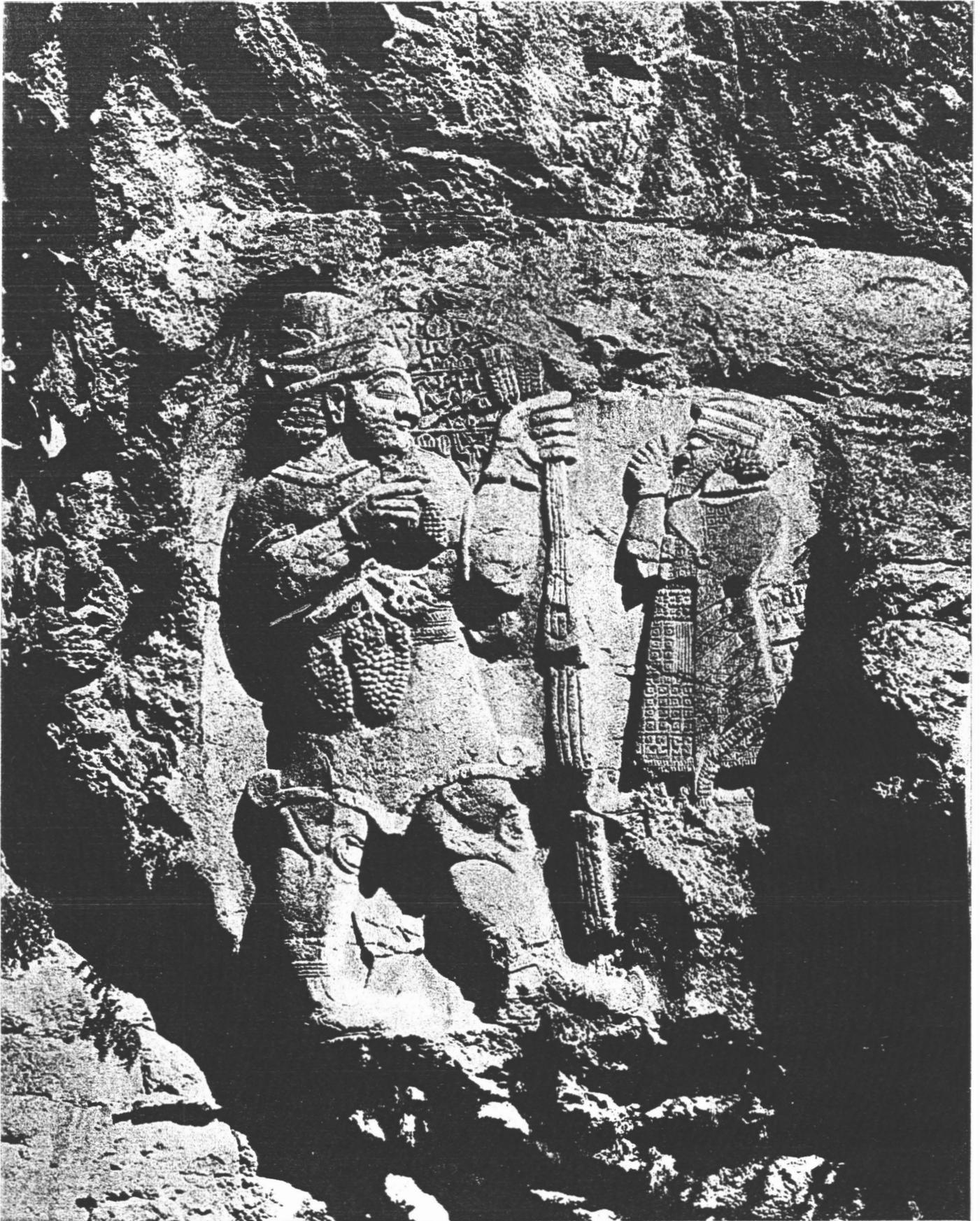
(チム)これは、トウモロコシの穀物神と農耕の神の浮き彫りをもったチムーの典型的な土器。上下二人の神は、耕作に用いられるスコップを手にしている。

【角川書店『世界美術全集24

アメリカ』1962年より】



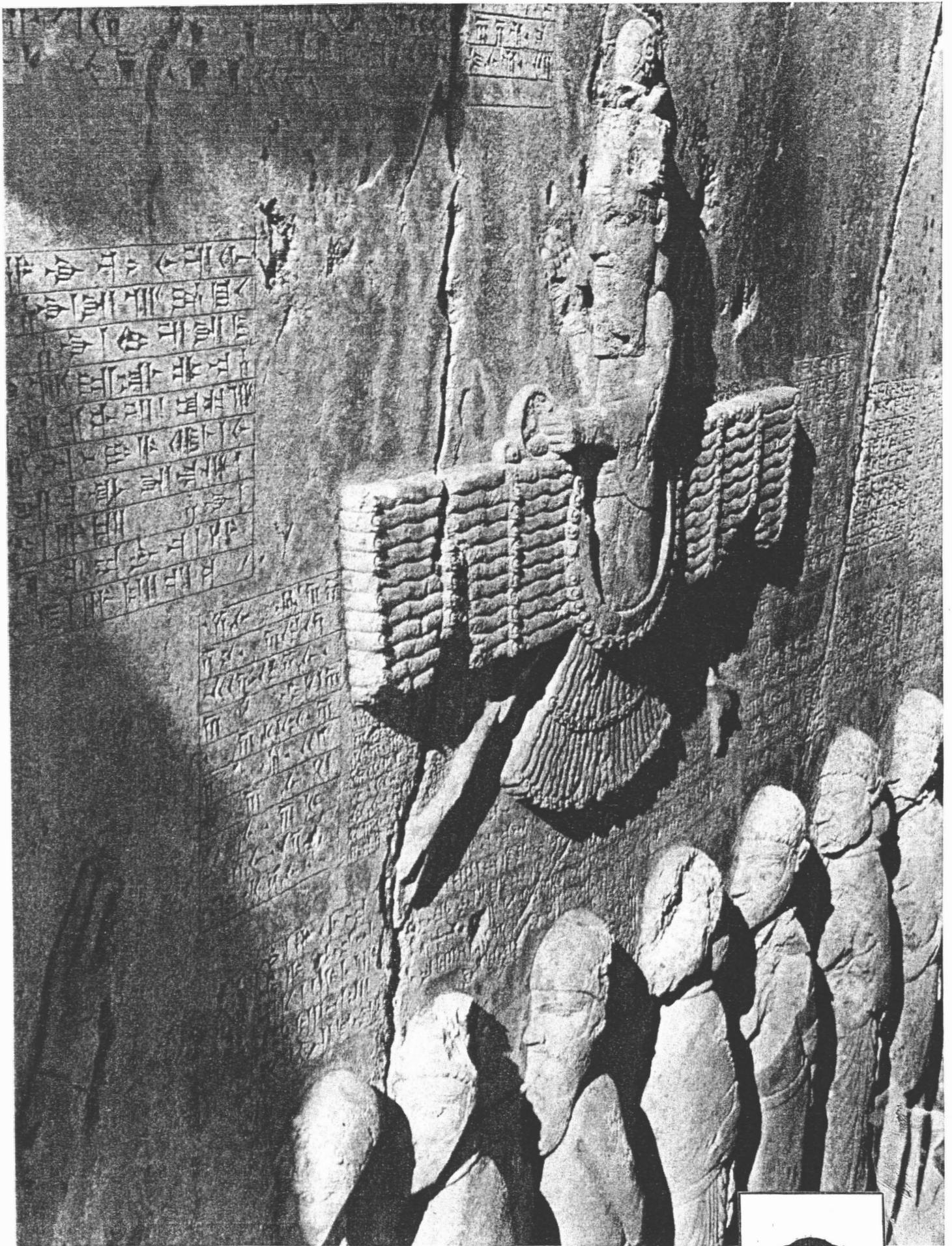
Black ware with representation of gods of agriculture. Chimu. Private coll., Lima.



■「イヴリズ磨崖の浮彫」

「前八世紀 コジャ・スー(kodja-su)川の支流が本流と合する近くの岩上に彫られた、ハッティ末期の最も有名な磨崖浮彫である。左方の巨像は高さ4.26mで、農民の神である。堂々たる体躯で威容を具え、右手に葡萄の房をさげ、左手には穂のついた穀物(麦?)をもっている。右方は神官

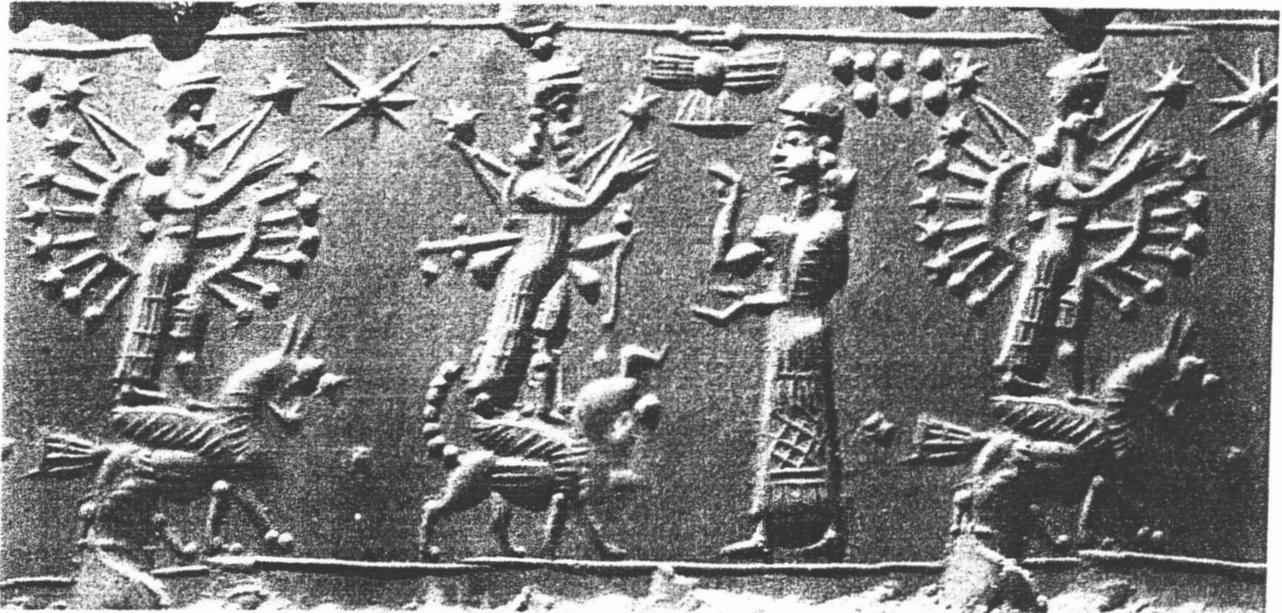
でもある王(高さ2.43m)が神に向かって両手を握って礼拝し、その贈物に対して感謝の意を表している。』【平凡社『世界美術全集3古代西アジア』1957年より】註:ハッティとはヒッタイトの原音で、紀元前1500年前後シリア地方に栄えた古代帝国を指すが、ヒッタイト帝国は先住民ハッティ人を支配したので、両者は区別されている。



BC.522年各地の反乱を鎮定して王位にのぼったペルシャ帝国のダリウス一世の戦勝記念碑「ベヒストンの碑」天空に輝くアフラマズダの像。【『大世界史』写真は『THE NATIONAL GEOGRAPHIC MAGAZINE DECEMBER, 1950』】



■1965年6月東京*
遠藤修氏の目撃画



■アッシリアの円筒印章。祈禱者の前に、有翼円盤の下にある神が有角有翼蠟尾の獅子の上に立ち、星の象徴の下に星の笏をつけた女神イシュタルを従えている。【平凡社『世界美術全集3古代西アジア』1957年より】



■有翼陽盤の天蓋を支える三神。テル・ハラフ出土。「ハツティでは神となった太陽は鷹と考えられたようである。BC.12?【平凡社『世界美術全集3古代西アジア』より】



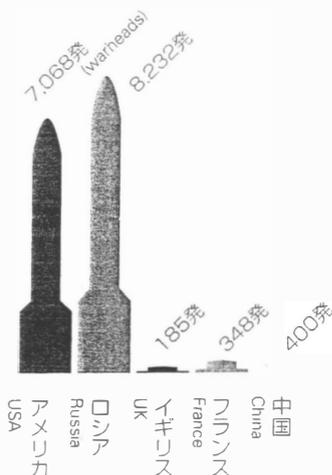
■ハンムラビ法典を授かる図。「此は、BC.2200頃バビロニアの英主ハンムラビ王が、法律を刻さしめた 石の上部の浮彫である。
…右に座せるは太陽神シャマシュで長鬣を蓄え四重の角を持つ冠を戴き、右手には笏と輪とを持っている。」【平凡社『世界美術全集1』1928年より】

■地球人類にとって最重要課題とは何か？

世界の核兵器 Nuclear Weapons Around the World

【ストックホルム国際平和研究所年鑑・2003年版】などより
Stockholm International Peace Research Institute Yearbook (2003)

●核兵器保有国 Nations Possessing Nuclear Weapons



●実質的核兵器保有国 Officially Unrecognized Nuclear Powers

インド India	30~150発 (warheads)
パキスタン Pakistan	30~50発
イスラエル Israel	200~300発

●核保有疑惑国 Nations Suspected of Having Nuclear Capabilities

北朝鮮 North Korea
「6か国協議」のなかで核兵器開発計画の放棄を迫られているが、「核抑止力を保持している」と発言、2010年までに200発以上を製造する能力を持っていると見られている。*2005年2月10日、北朝鮮は核兵器製造の宣言を行なった。

イラン Iran
2004年、国際原子力機関の査察をいったん受け入れるが、ウラン濃縮に使用する遠心分離機の組み立てを再開すると通告。

●核兵器計画・核兵器を放棄した国 Nations That Have Relinquished Nuclear Weapons or Plans to Obtain Them.

イラク 南アフリカ共和国 リビア ブラジル アルゼンチン
ウクライナ ベラルーシ カザフスタン (ソ連崩壊後、ロシアに移管)
ルーマニア アルジェリア スウェーデン

Iraq, South Africa, Libya, Brazil, Argentina
Ukraine, Belarus, Kazakhstan (under Russian jurisdiction since the collapse of the USSR)
Romania, Algeria, Sweden

この地球上には、今なお3万発近くの核兵器が存在し、その95%以上をアメリカ、ロシアの両国が保有、およそ半数の1万5000発がいつでも使用できる状態で配備されていると推定されている(アメリカNRDC=天然資源防衛評議会の「ニュークリア・ノートブック」より。ほぼ上図の数字と照応する)。

我々人類が無数の動植物と共存している地球という天体は、太陽系の第3番惑星であり、太陽系は直径10万光年の銀河の腕の端にある。

我々の世界は、無限に等しい宇宙空間に浸っており、そこには我々の知らない無数の世界と、未知の力学的法則があるだろう。

我々の科学技術は38万キロ離れた月面に、訓練された宇宙飛行士を到達させた。無人の惑星探査機は、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星そして太陽系の外に到達した。

それらの宇宙進出計画によって、地球外の天体に関する多くのデータが得られている。

地球はまた様々な民族紛争、それを解決しようとする超大国による大きな戦争、一度に大量の人民と都市を消滅させるための核兵器の開発が進んでいる。

地球はまた、文明の発展によって、世界が均一の豊かさや便利さを求めて資源を採掘占有し、自然環境を破壊して人間本位の生活領域を拡大してきた。

こうして、地球は様々な問題を未来へ持ち越し、「世界平和」や「世界の安定」といった古代から賢人たちが描いてきた理想郷に到達することが出来ないでいる。

筆者は民間の自称UFO研究者である。いってみればUFO愛好家の一人だ。何ら国家的な資格、学術的な業

Nuclear Weapons in the World Today

The National Resource Defense Council's "Nuclear Notebook" estimates that the world today is home to almost 30,000 nuclear warheads, 95% of which are in either the United States or Russia, and roughly half (15,000) are deployable at any time.

【『原爆写真 ノーモア ヒロシマ・ナガサキ』より】

續もない。あるのは、人一倍「UFO」というものに憧れ、また目撃や撮影などの体験を持つと自認する「熱意」だろう。

この「個人的な体験」が、正式の学会や国会で吟味されたことは一度も無い。

私はUFO愛好家の立場から、地球における最重要課題、解決しなければ、地球自体の存続が危うい、と考える課題は「核兵器」の問題だと思っている。

なぜかといえば、地球外の知性によるとみられるUFO事件の時間と場所が、温暖化でも自然破壊でもなく、核兵器の存在に向けられているからである。

「いや、地球温暖化こそ緊急重要課題だ」「いや、環境破壊が地球を滅ぼす」など異論はあろう。それはそれで重要である。

私は自称UFO研究者だが、ここでUFO真偽に関するのイロハを述べる余裕はない。それを学ぶための書籍なら、過去50年間、多数発行されてきた。

私は「核とUFO」という課題に即した重要な資料のみを提示するために、これを書いている。

ずいぶん昔の発言だが、筆者の新聞切り抜きから一つ紹介する。

「(前略)・人類が自慢する理性はどこへいつてしまったのであろうか？ 理性の片鱗でもあれば当然世界の大国は首脳会談でも開いて核兵器を全廃すべきであろうが、現状

では不可能である。しかしこれが非現実的で不可能であるという所に不気味で奇怪なものが見られる。…(後略)。(日本・数学者 小平邦彦氏が1970年代の終わり頃、毎日新聞とユネスコ共同企画「21世紀の主演へー世界の100人のメッセージ」の中で述べられたもの。)

■ UFO 愛好家を取り巻く環境

一時的で再現性のない「UFO事件」は、第三者による検証が難しい。ゆえに「UFO事件」は、未確認の情報としての位置を余儀なくされており、それらの情報を受け取った人類多数の中でも「自ら身に憶えの在る知性」のみが、内容の信頼度を「認める」だけにとどまる。

そこには、国籍、学籍に関係のない広い範囲の「個人差」が、「物事の信頼度」に対する格差を生む固有の世界がある。

まず、当面の問題を考えてみたい。「UFOについての未確認情報」を正しく評価する基準とは、どのようなものが考えられるだろうか。以下の3項目ではどうだろうか。

1. 内容が世界の他の国と同じ様なパターンが見られること。
2. 目撃者・報告者が社会的地位、責任を持つ立場として公に認知されていること。
3. 検証に伏される「写真」や「映像」が伴っていること。

1. の場合は、その形状、飛行パターン、変化などUFOの特性を示す要素が含まれる。たとえば、報告されたUFOが「家の形をしていた」という場合、当然ながら、目撃者の視力、表現力、精神状態が問われることになる。

「どこそこの基地では、宇宙人と軍人が協力関係にあるそうだ」という「噂」は、過去50年の基本的なUFOの活動を学習することによって、常識的UFO愛好家は無視できるが、マスメディアという怪物が、執拗にこの話題を取り上げる場合、やはりUFO愛好家に対する愚弄方針といった危機管理面からの政策を勘ぐることになる。

2. の場合、体験は真実であっても、必ずしも当該者の「観察眼」「識別能力」が常人より勝っているか、劣っているかの判定は難しい。

要職の地位や軍籍からの体験発言は、社会的に大きな影響力をもつものだが、これも100パーセント信頼が置けるかという、そうではない。そのような影響力は、より高いレベルにとつての利用価値がある限り、たとえば重要軍事機密隠蔽のための代替情報による回避、という手法も否定できない。

3. の場合は、そうした物的証拠を検証することで真偽の判定は、比較的容易になる。しかし、ひと目でガセネタと判るものでも、これを執拗にマスコミが使用する場合、UFO信者の愚弄方針という国家的プロバガンタを疑ってみるべきであろう。国家とは公平均等なものではない。むしろ逆な場合がある。

以上のような、やや極端かも知れないが、UFO愛好という思想が未だ社会の異端者である限り、我々を取り巻く環境の認識として、念頭におく必要があるだろう。

■ 宇宙の知的生命へのイメージ

先に紹介した「21世紀の主演へー世界の100人のメッセージ」を企画したユネスコのムボウ事務局長は、当時こう述べた。

「予言することよりは、正しい問題提起がなされるような、全く客観的な診断書が作成されることが必要です」

「核の冬」を証明するために、故セーガン博士らが行った貴重な森林を燃やすという愚行は、実験によって、不幸な結果をもたらす理論を証明するという科学による自然破壊の一つだったが、核爆発の連鎖によって地球破壊を証明する、という証明方法はとれないのである。

地球自身の「客観的な診断書」を作成し、人類に突きつける知性があるとしたら、彼らはどんな能力を持たなければならぬだろうか。

ここに地球外知性をイメージについて、考えさせてくれるいくつかの資料がある。まず、一つの宗教的思想、あるいは信仰者の直観とも言うべきものから紹介しよう。

時は1958年4月、ヴァチカン教皇科学アカデミーにおける外宇宙の生物に対する協界の義務を学ぶための秘密会議において、米国のコーネル神父による以下のような説が発表されたというのである。

「他の宇宙には、霊的に、また物質的にも安寧な世界に神の恩恵を受けて生活している人達がいるかも知れない。……他の世界の住人が神の命令に厳しく従って生活を営んでいるならば、彼らは宇宙の自然の法則の最も深遠な秘密を解き明かしているかも知れない。

だとすると、彼らは無限の物理的・精神的・霊的なエネルギーを持っているかも知れない。

そのエネルギーはほとんど魔術的とも形容すべき才能によって富み栄えられるようなもので、彼らは恐らく400～500年の活力に溢れた生命を維持するのも可能であろう。彼らは恐らく精神面に優れ、テレパシー通信、或いは一週間に2～3時間の睡眠しか必要としないかも知れない。

彼らの特性は……

①信じられない位の精密な機械を発展させる生まれつきの優れた能力と、発明の有用な特質を発展させるずばぬけた才能を持っているに違いない。

②それにもかかわらず、彼らはまたその逆に、単純にして素朴な平和な生活を営む能力を持っているだろう。

次は、ドイツの科学者としてUFO研究の開拓者としても著名なヘルマン・オーベルトが、宇宙人についての考えを述べた『宇宙人との対話』(たま出版刊)からの引用を紹介する。

「……犯罪者でも、一校角の雄鹿でも、また英雄でも基本的にはその本質を何も変えられないとすれば、我々はいわゆる“決定論”に到達するのだ。この言葉の意味は次の通りである。即ち誰でも決断する立場になると、彼がこのように決断するだろうということを予言することはできる、ただ彼の才能、彼のこれまでの生活や知識、彼の世界観、彼の現状把握、彼の希望や彼の気質を十分知っている場合には、である。正確にいつて、彼は一定の瞬間にはただそのようにしか、そしてそれ以外の決断はできないであろう。

世界中の生物について、もしそれがいかにできたとか、ある瞬間にそれが何を為しました求めるか、また世界で何が今起きているか、無機物の自然現象がいかに相互にかかわり合い、また他のものから解放されるかなどのがわかるものとすれば、——この観察者はその他各個人の意

義を認めて、人が自分の意思でどの程度まで突き進むものか知るであろう。

そんな観察者がいたとすれば、彼はこの瞬間的出来事から、次の瞬間何が起こるかを予言できそうに思われる。さらに次の出来事を結論でき、また世界の出来事を限りなく予言することさえできるかも知れない。」

難解な言い回しだが、つまりこういうことだと思う。人の行動を決定するのは、過去からの積み重ねの延長にあるから、内面に蓄積された特定個人のすべてを知ることが可能なら、その人の招来の行動や意思決定を予測し、ひいては個人の集団である世界の予測にも適応されるだろう、と。

しかし、残念ながら我々地球人類のレベルでは、自分自身のことさえ、よく解らないのが現実である。何年先の自分の姿などは、占い師にも見てもらわなければわからない。

もし、家庭や職場事情はもちろん、細胞の変化や脳内記憶までの「個人の情報」を把握できる探査装置を、自由に操作できる知性がいたならば、そういった予測に基づいた各種の計画が成立するであろう。

オーベルト教授は、5万件のUFO報告を分析した人物である。UFOの行動特性について熟知していたことは十分考えられる。

同様に、国家的UFO情報の中核にいた元英国空軍司令官、ダウディング空軍大将の空飛ぶ円盤実在声明も、「地球への訪問者」に言及している。

「私は“空飛ぶ円盤”に乗ってくる訪問者たちの大部分が、友好的で善意に満ちた動機からする訪問者だと信じている、とっておこう。もっともその証拠はそれほど多くはない。しかし証拠のほかに、可能性というよりむしろ合理性という点で私の考え方を裏付けてくれるものがある。

それは他の天体の住人たちが、我々には未知な自然の力を利用するという点で、我々より遥かに進歩しているとするならば、当然、精神的発達という点でも、我々より進歩しているであろうし、従って意見の合わない者を殺すよりも、自分たちの持っている精神的な所産をいっそう広く分け与

えようとするだろうということである。」(1954年8月29日神戸新聞より:原禎男氏提供)

ここでダウディング卿が述べる「分け与えるもの」とは、我々の常識世界のような物質的なものではない。「精神的な所産」である。

最後に、学術的な見解からとして、著名な天文学者小尾信彌著『宇宙論はなぜ、地球外知性を予感するか』から「160宇宙的に見た人類文明の達成度は？」から引用する。

「宇宙的な立場から知的生物の進化を三段階に分けると、第一段階は一次的進化である。すなわち、自分の力で科学や技術などを発展させている文明の段階である。第二段階は、その社会の総エネルギー出力の一部を、宇宙通信のために使えるような文明である。先進の地球外知的生物と接触して、宇宙文明に仲間入りする段階である。

第三段階は、宇宙文明社会の先進的立場に立つ文明で、受けるだけではなくより多く与えるような文明である。望めば星間旅行も不可能ではないような段階で、本当の意味で“宇宙人”である。現在の地球文明は、まだ第一段階にある。」

UFO現象を、他の惑星世界からの訪問だとすると、UFO事件の多くを見る限り、彼らの訪問動機は、地球に資源を求めるとか、領土を求めるといった、我々の“宇宙開発動機”とは異なると推定される。

また、その調査能力や予測能力が、地球側のそれより上回るとしたら、彼らの我々に向けられた観察期間と対応能力から推し量って、我々人類の習性について熟知しており、個々の人生における価値観や行動の動機、科学機器の構造、特に軍事基地、航空機の性能や宇宙船の構造については、高水準の認識力によって把握していると考えられる。

ではいくつかの事例から、UFOの能力というものを見てみよう。

■ UFOの能力: その1 軍事的な能力

1. 対処能力

過去50年間以上、航空体としてのUFOは、民間航空機と空軍機に接近することで、様々な「高性能」をパイロットに示してきた。まず、自在な速度の変更である。急激な加速、急激な減速、および急停止、滞空という自由な速度変化は、地球の航空機には不可能な飛行である。

次に飛行経路である。これらは主にレーダー面に示された。「直角ターン」「180度ターン」「飛行機への追尾・雁行・離脱」などが示された。また、しばしば肉眼で目撃されるのは「ジグザグ飛行」「螺旋飛行」「往復運動」である。飛行機にも「錐揉み飛行」という曲芸飛行や、急旋回の曲芸飛行があるが、それらは空中分解しない速度を保ち、慣性の法則に従った曲線を保つことで可能である。

UFOの飛行は、翼を持つ航空物体というより、空間における物理的な運動に近い。即ち、空気の摩擦、音速の壁、急激な加速度に伴う「Gの増加」を無視した運動を示す。それらは乗り物の飛行というより「空中の美術」であり「空中の

啓示」に近い。それらを「あの種の生物が乗る乗り物」という概念だけで理解するのは困難である。例えばそれが現実の物体ではなく、「空間に投影された映像」の可能性さえを論じる向きもある。

UFOが我々の知る「物体」の概念から遠く離れている、と思わざるを得ない現象の一つに、「拡大・縮小」という現象がある。

つまり、地球の物体でたとえれば、長さ70メートルのB-747旅客機が、瞬時に長さ10メートルの三菱MR-1のサイズに縮小する、或いは直径30センチの風船が瞬時に直径30メートルの気球に拡大する、という具合である。

顕著な実例を紹介する。まず原文から。

A flight of four jet fighter-bombers took off from Ota Air Base, Portugal on a routine practice night flight, on 4 September, 1957. They were under the command of Captain Jose Lemos Ferreira.

The first part of the flight went as scheduled. Then Captain Ferreira noticed an unusual light above the horizon and alerted the other pilots. After the UFO underwent various colour changes, suddenly, according to Captain Ferreira, the object enlarged becoming five or six times its initial size. Before the pilots had time to get over that spectacle, the object shrank becoming a barely visible, small yellowish point.【*Trench, The UFO Story Mysterious Visitors*】

次に邦訳を大陸書房『UFOの秘密』からみる。「4機のジェット戦闘爆撃機がオタ空軍基地を飛び立った。定期の夜間訓練飛行である。時は1957年9月4日。指揮官はホセ・レモス・フェレイラ大尉だった。

飛行のはじめは予定どおりだった。それからフェレイラ大尉は地平線上に異様な光を発見し、部下たちに警戒するように命じた。UFOはさまざまな色に変わったあと、フェレイラ大尉の言をかりると突然“5、6度、頭文字ぐらいの大きさになった。”パイロットたちがその光景に慣れるまえに、物体はみるみる縮みはじめ、黄色がかった点になってしまった。」

拡大例としては1959年の春、ウラル山脈近くのスベルドロフスク市における戦闘機とUFOの“戦い”にみられる。

「あるパイロットは巨大な火球(群?)めがけて戦闘機で突っ込んでいった。その火球は単に“膨張”して戦闘機を通り抜けさせてから、また元どおりの形に戻ったという。戦闘機に衝突の痕跡はなかった。」

【グリーン・アロー『UFO赤い国のエイリアン』】

さて、UFOは様々な「知的な振る舞い」を見せる。このことが、UFOがある種の知的生命によってコントロールされる「機械」だと認識される根拠となっている。

「知的な振る舞い」は、「知的な生物」である我々人類に向けた「意思表示」だろうと解釈できる。簡単に言えば「我々は知性を持つ存在である」というサインである。

例えば「編隊飛行」がある。UFOが単独で現れる場合と、複数が隊形を持って現れる場合の、両者の違いは何だろう?その隊形は、我々の航空機や戦艦のそれに酷似し、しばしば「艦隊」の表現でそれらが報告される。

また、単機が複数に分裂したり、複数が単機に集合する現象も見られる。それらは、彼らUFOの飛行にとって必然の過程なのか、それとも我々「見る側」に対する何らかの「サイン」なのか。

UFOが地球の飛行機にない優れた能力を持ち、「燃料の補給」や「空中修理」を必要としない航空体ならば、UFO飛行に見られる不規則な変化は彼らの事情によるものではなく、我々見る側に向けた彼らの「意思表示」と受け取ることが出来る。

次にUFOの「電磁気影響」「EM効果」の問題がある。これは、UFOの能力に該当するものか、UFOの推進動力に伴う物理的波及現象なのか、判断がつかかぬ。

つまり、UFOの全ての出現が、EM効果を示すとは限らないからである。

それは使用されるエネルギーの差によるものか、UFO

によるコントロール下にあるのか。この「効果」を活用する空中のUFOが、地上の施設に影響を及ぼす事件は多数みられる。また、UFOが故意に地上の施設や機器に対して「EM効果」を行使し、その知性の目標が示された事件もある。

その実例について、いくつか紹介する。

In summer of 1961 large flying saucer appeared at an altitude of 20,000 meters over a hillside base near Rybinsk 150 km, north of Moscow and missiles were fired all at once, but they exploded on their way, moreover the second fire also failed.

1961年夏(または春?)モスクワ北方150kmのリビンスク近くに、旧ソ連首都防衛のためのロケット砲台が建設されていた。およそ20000m上空に、大型円盤が多数の小型円盤を伴って出現した。恰もミサイル基地を探索するかに見えたが、大騒ぎになった同基地から、恐らく非公式命令によるものと思われるが、その巨大円盤に向かって一斉に攻撃が行われた。

ミサイルは発射されたが、目標物から凡そ2000mの空間ですべて爆発してしまった。第2回目も同じ結果に終わった。

3回目のミサイル発射をしようとしたとき、小型円盤の編隊が降下し、ミサイル基地の電気系統が停止した。しばらくして、小型円盤は引き上げてゆき、巨大円盤に合流した。そのとたん、基地の電気系統は元通り回復した。

【CBA 19632-3『空飛ぶ円盤ニュース』グリーン・アロー『UFO赤い国のエイリアン』】

2.浄化能力

1961年来日し、驚くべきインカ古代遺跡上空のUFO写真やナスカの直線を紹介し、神秘的で難解な著書で知られる故ジョージ・ハント・ウィリアムスン博士は、円盤から発射される小型機について詳細に述べている。

その部分の原文を掲載し、増野一郎訳CBA刊『宇宙語宇宙人』から少し紹介してみる。文中の「…」は省略部分。

彼は小型機を「fireballs 火球」と名づけて論じている。しかし「火球」という名称は自然のそれ、つまり天体としての流星火球と混同されやすい。

1948年10月日のノース・ダコタ州ファーゴ基地上空における「ゴーマン事件」も、火球の一つだ、とするウィリアムスンは火球を3種類に分類している。

『第1類:無音で爆発して、地上に何の痕跡も残さないが、大気中には銅の分子を残すもの(この点では第2類と同じである。)

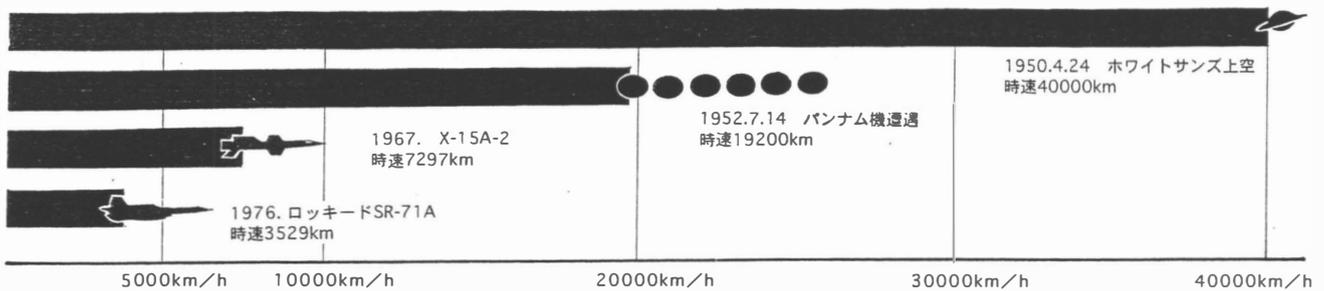
第2類:フーファイターと呼ばれたものもこれに属する。地球の航空機や地上施設に接近して情報を集め、それを上空の宇宙船に中継する役目を持つ。…感覚・知覚能力をそなえ、それによって得た実際の経験を上空に浮かぶ母船にテレビ送信する。……

第3類:これに属する火球は爆発しない。…その能力は映画「地球の静止する日」に登場したロボットの“ゴート”

■UFOの防御能力、即ち地球側からの攻撃を回避する能力は、地球の航空機とは格段の差がある。初期の頃、直径25cmのUFOは、プロペラ戦闘機からの機銃掃射に対し「素早く位置を変える」ことで回避した。高性能ジェット戦闘機がミサイルを発射しようとする時は「ブラックアウト」でこれに応えた。即ち攻撃側の能力停止である。このことによってロシアは、UFOと遭遇しても「決して攻撃の意思を見せない」よう伝達されたといわれる。UFO本体の周囲に見えない「バリア barrier」をはるといふ、この想像画のような1961年リビンスク近郊ミサイル基地事件はあまり他に例がない。



UFOと航空機、大気圏内飛行速度比較



■乗り物や飛行機は、文明を代表する能力である。UFOのそれが、地球側のそれを上回るならば、その「文明差」は？

■ミサイル工作

1975年11月7日米国モンタナ州リュイストンのミニットマンミサイル・サイトK7の上空に、巨大なフットボール場大のまぶしく輝くオレンジ色の円盤が現われて、ミサイル・サイトを照射した。物体が上昇をはじめたとき、NORADのレーダーはこれを捕捉。グレート・フォールズ基地からF106ジェット迎撃機が2機発進し、K7地区に突進したが、UFOは上昇を続け60000メートル付近でNORADのレーダーから消えた。後日、ミサイルの専門家がサイトに派遣され、ミサイルを目標に向ける弾頭内のコンピューターの点検に当たった。驚いたことにコンピューター内のテープが不可解にも目標番号を変えていることが発見された。この大気圏再突入部分はサイロから取り出されて基地に運ばれた。結局、ミサイル全体が取り替えられた。

Since December of 1948 countless "fireballs" have bathed the hills of the American Southwest with their strange, blue-green glare. They have also been seen in Pennsylvania, Maryland, Puerto Rico, Arizona, California, Washington, Denmark, and other places throughout the world. The chief Air Intelligence officer for the Albuquerque district saw one. Col. Joseph D. Caldara, USAF, attached to the Joint Chiefs of Staff, saw one in Virginia. Hundreds of pilots, weather observers and atomic scientists have observed these "fireballs".

Reports came so rapidly during 1948 that in 1949 the Air Force established "Project Twinkle" to investigate them. This Project established a triple photo-theodolite post at Vaughn, New Mexico to obtain scientific data on the "fireballs". Day and night, week in, week out, for three months, a crew kept watch of the skies. Ironically, while "fireballs" continued flashing everywhere else in the South-west, they saw nothing until the Project was transferred to the Holloman Air Force Base at Alamogordo, New Mexico.

During the next three months they saw a few but were unable to make satisfactory computations because of the "fireballs'" great speed. Search parties have had no better luck. They have combed in vain the countryside beneath the point of disappearance; not a trace of telltale substance has been found on the ground!

Theoreticians in the Air Force believe the "fireballs" are not natural phenomena but propelled objects. They bear similarity to the balls of fire, called "fireball fighters" or "foo fighters" which flew wing on Allied aircraft over Germany and Japan during 1944-45 and which have never been satisfactorily explained. Many of these "fireballs" are balls of kelly-green fire, blazing brightly, and race across the sky straight as bullets, parallel to the ground. Then they explode in a frightful paroxysm of light--without making a sound!

In the Southwest, the popular belief has been that a strange meteor shower is underway. However, Dr. Lincoln La Paz, mathematician, astronomer and director of the Institute of Meteoritics at the University of New Mexico, has pointed out that normal fireballs do not appear green, they fall in the trajectory forced on them by gravity, are generally noisy as a freight train and leave meteorites where they hit. The green "fireball" does none of these things!

The "fireballs" do not appear to be electro-static phenomena because they move too regularly and too fast. They are not the product of a U. S. weapons project and they are not self-destroying Russian reconnaissance devices. These "fireballs" are propelled, artificial objects. Their color is close to 5,200 angstroms on a spectrum chart--close to the green of burning copper. Copper is almost never found in meteorites; the friction of the air oxidizes it shortly after the meteor enters the upper atmosphere. However, a curious fact has been recorded by

["OTHERTONGUES-OTHERFLESH" by George Hunt Williamson]

aerologists. Concentrations of copper particles are now present in the air of Arizona and New Mexico, particularly in "fireball" areas. These were not encountered in air samples made before 1948!

These "fireballs" are always silent, and upon exploding, light-up the ground directly beneath them. They are not always green or blue-green in color; they can be nearly white, also. Of course, they are intelligently controlled devices, but they are not manned with "little men" only inches tall. They are similar to our own remote-controlled devices, however, on a much more highly advanced scale. They are sent down from the large space-laboratories that are daily checking our Earth for important scientific data. Undoubtedly, Lt. Gorman encountered such a device when he chased the "flying light" over Fargo, North Dakota, October 1, 1948.

It appears that the "fireballs" fall into three general classes: 1. Those which leave copper particles in the atmosphere after silently exploding and leave no residue on the ground such as meteors do. 2. Those that were called "foo fighters" and known by other names which draw near our aircraft and other earthly objects to obtain information to be relayed directly to the space-lab. These objects are mainly crystalline in structure and are really sentient beings. They possess the powers of sense or sense-perception and have actual experience of sensation and feeling as they "televise" their gathered data back to the hovering laboratory. This idea is difficult for the people of Earth to accept, and indeed, even to understand. The idea of a crystal that thinks! 3. There is a third class of "fireballs" that do not explode. In fact, after they are constructed in great scientific laboratories their power is immutable! There are very strange records in history of the activities of this type of "fireball". Their power is similar to the power of the robot "Gort" in "The Day The Earth Stood Still" a science-fiction movie. However, the space people do not have robots in the form of "mechanical-men".

In his book, *The Ether Ship Mystery And Its Solution*, Meade Layne says: "The balls or discs of light, sometimes only a few inches in diameter, consist of 99% aluminum, with 1% of copper in

very ionized form. These are used as a rule as photo plates, that televise their pictures back to the mother ship that gave them birth, and are later destroyed or disintegrated. The large green 'fireballs' are ionized copper, and are exploded in your atmosphere to absorb the radiations created by your atomic bombs. These radiations drift toward the north magnetic pole, and most of the green 'fireballs' originate in the northern skies."

Similar information has been received by other research groups. Type 1 is exploded to nullify adverse conditions arising from atomic explosions. These "fireballs" are usually observed shortly after atomic tests have taken place.

["OTHERTONGUES-OTHERFLESH" by George Hunt Williamson]

の持っていた力とよく似たものである。

ミード・レイン博士はその著『エーテル船事件とその解決』の中で次のように述べた。

「火球、すなわち光る円盤は、直径わずか数インチ・写した写真を母船へテレビ送信し、用がすめば破壊、ないし分解処分される。大きな緑色の火球は電離した銅で、地球大気中で爆発して、原爆で生じた放射能を吸収する。緑の火球の大部分が北部の空に現れるのは、原爆の放射能は次第に北磁極の方向へ漂流してゆくものだからである。」

他の研究団体でも同じような情報を入手している。原爆で生じた有害状態を中和するために爆発させられるのは第1類に属する火球であって、原爆実験の行われた直後によく出現する。』

なぜ、そんなことが解るのか？と質問を浴びせたい位の内容だが、私なりに過去の事件と合わせて考えてみた。

ウィリアムスンの前述、映画の中で「大きな力を持つ」と言われたロボットの話は、一個の「鞠のような神火が陸に押し寄せる津波の海水を二分して、大きな水塊を沖へ運搬した」という紀伊南部の目撃からも、小さな火球が相当な「力持ち」であることを物語る。或いは、奇オニコラ・テスラが提唱した「電力の無線送電」のような具合に、母機からエネルギーが供給されたのかも知れないが。

また、レイン博士のいう、緑の火球による放射能吸収の

話は、ニューメキシコにおける「緑の火球」事件で、大気中の放射能が減っていた、という記述を思い起こす。

最近では、あのチェルノブイリ原発事故の放射能除去作業において、「赤い火球が現れて、ビームを照射し放射能を軽減させて、作業をやり易くした」という情報とも重なる。

それらの検証は不可能である。しかし、少なくとも「UFO墜落」や「宇宙人解剖」の話よりも、有益な話であり、これらが真実の話であれば、UFO学の最終章まで生き残るに違いない。

上記で紹介したUFO報告が、事実そのままを伝えているとすると、以下の項目がUFOの能力として提示できる。これらを受け入れるのも、拒否するのも自由である。

- 1.UFOは自由に体積を変える能力を持つ。
- 2.UFOは地球製物体と物理的に接触する事故を未然に回避する能力を持つ。
- 3.UFOは地球製武器によるの攻撃を回避・阻止・麻痺させる能力を持つ。
- 4.小型円盤が実行部隊として地上の電気系統を自由に操作する能力を持つ。
- 5.地球の航空機が突進しても透過させる能力を持つ。
- 6.放射能汚染の浄化能力を持つ

本来ならより多数の実例を列挙すべきだが、本稿の目的はそこにはないので、簡略化して先を進める。

UFOの能力:その2 編隊と不可視能力

1.編隊による「十字」形成

UFO編隊は、隊形を変えて目撃者側からみて意味のある記号・文字などを空中に描くことが出来る。その事例としてよく知られているのは、1956年11月6日、イタリア、ローマ市上空で発生した事件である。以下、その概要をリチャード・ヘインズ著『Project Delta:A Study Of Multiple UFO』からJ.N氏による訳文より紹介する。

1956年11月6日現地時間12時00分 UFOの数:20+20

『各々だいたい20個から成る、広く開いたVの隊形をした物体群が2組、ローマ市上空で互いにゆっくり近づいていくのが見られた(AおよびA')。それらは交わり、ローマ市トラステヴェレ・モンテ・マリオ地区の上空、だいたい22,000から24,000フィートと見積もられる高度で、頂点と頂点を合わせ、1個の完璧な「聖アンドリュー十字架」を形成して停止した。ヴァティカン市の真上である!それらはそこに、だいたい1分ほど留まっていた。(B)。そしてこの十字架は、それから分離して2個の不規則な曲線になった(CおよびC')。それらは、やってきたのと反対の方向へゆっくり動いていた。この出来事の継続時間は、だいたい3分だった。およそ10分後、1個の大きな青みがかった影が空中に見られたが、それは互いに比較的接近した4個、7個、そして12個の物体から成る諸編隊で構成されているように思われた。これらの数は、居合わせた外交官アルベルト・ペレゴ博士によって数えられた。彼が述べるには、輝く繊維状物質が彼の近くの地面に降下するのを見た。彼は「それをいくつかつかむ」ことが出来た。それは細枝のようであり、また非

常に長くて細い、クリスマスツリーをキラキラ飾るフィラメントのようであった。ただならぬ空中の諸物体はローマ市上空で11月12日に再び出現し、11時00分、カステル・ガンドルフのヴァティカン天文台[または气象台]で、ブラジル人聖職者一人を含む多くの目撃証人が見た。彼は、いくつかの物体が非常に高速で低空を音もなく飛ぶのを見たのである!』

この「十字架編隊」は、カトリックの総本山ヴァティカンの上空ということから、宗教的な意味合いを含むサインと受け取ることが出来る。また、UFOの本源というべき異郷の背景が、SF映画の如き空想的かつ異質なものではなく、人類の歴史に密着した知性・感性を持った人格の関与をうかがわせる。

この事件に先行して、英国上空にも異変が起こっていた。「見えないUFO、U=Z事件」である。

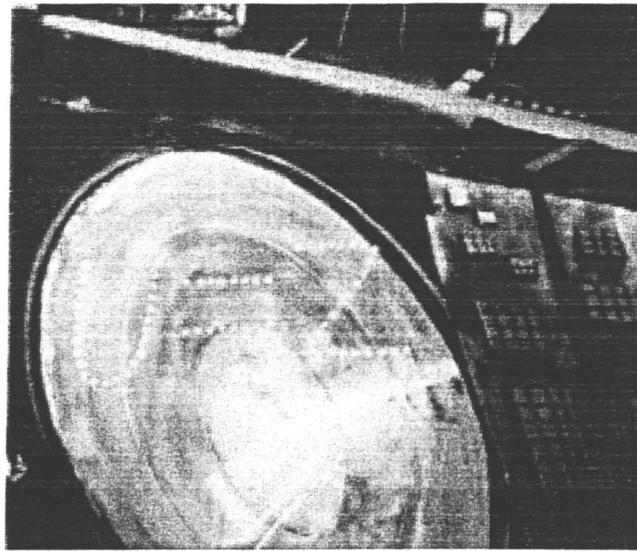
2.不可視編隊による記号「U=Z」

まずヘインズ著からJ.N氏による「大要」をみってみる。

1954年11月17日現地時間12時00分UFOの数:40~50

「これらの物体は突然(いずこからともなく)イギリスの多くの異なった地域に設けられたレーダーに出現して、東から西へ飛行した。図示した如く、それらは当初1個のUの形を作って飛んでいた(A)が、次に2本の平行線へと変化した(B)。それから、(C)に示した如く1個の大きなZの文字へ変化して、レーダー・スコープより消え去った。」

ヘインズ博士による、この図は貴重なものである。恐らく、



"U" EQUALS "Z"

STRANGE SIGHTS IN SKY BAFFLE WAR OFFICE. Thus headlined the London "Sunday Dispatch" on November 17, 1954.

The account related that, starting late the previous September, a series of seven different radar tracking of from 40 to 50 UFO's were reported to the British War Office. Each time, it was said, the UFO's appeared about twelve noon, and each time they maintained an altitude of approximately 12,000 feet. But that was only the beginning. "All our radar sets in the area have picked them up", said a War Office spokesman-yet the cause of the "blips" were invisible to human eyes. No known aircraft were in the vicinity at the times. Balloons, Kites, mirages and their ilk were quickly discarded as possibly accounting for the phenomena.

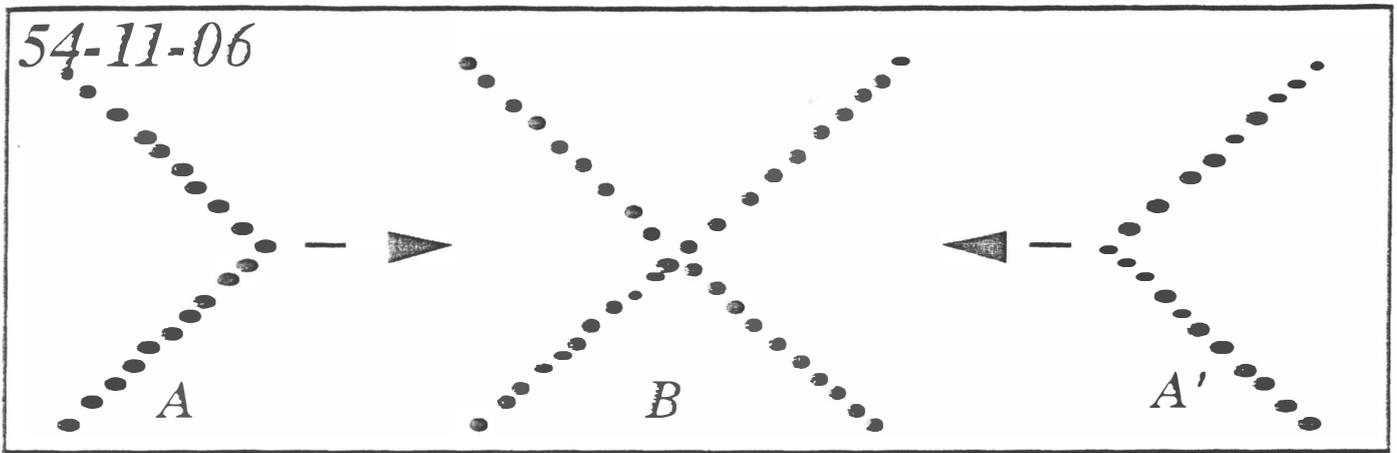
AND THE UFO'S CHANGED THEIR FORMATIONS. Coming in from the east their initial pattern was "U" - or hairpin- shaped. This rapidly changed to two parallel lines - the symbol for "equals". And finally, before they left the radarscopes, the formations equated the letter "Z". What did it all portend - if anyone knew, they weren't talking. In fact, the sightings were retained under "utmost secrecy" for over one month until "leaked" via the Dispatch.

But several interesting theories have more recently been advanced : To the technically trained or science-minded individual, "U" invariably refers to the atomic symbol for uranium (U-238, or U-235). (A more popular assumption might be that "U" meant just that : You) The equal sign, or two parallel lines, is close to universally known. And what of the "Z" ? We all know that "Z" is the last - or "end" - letter of the English alphabet. "Z"(small or capitalized) may also, electronically defined, pertain to ohm impedance.

THE ABOVE REPORT IS ONE of the most enigmatic - if not important - among UFO annals . It is not inconceivable to think that the oft-repeated (by coincidence?) patterns were not ha-hazard but possibly effected by intelligent direction - i.e., a major communications attempt. By whom or what? - no one knows. It may deserve intensive thought and re-analyses.

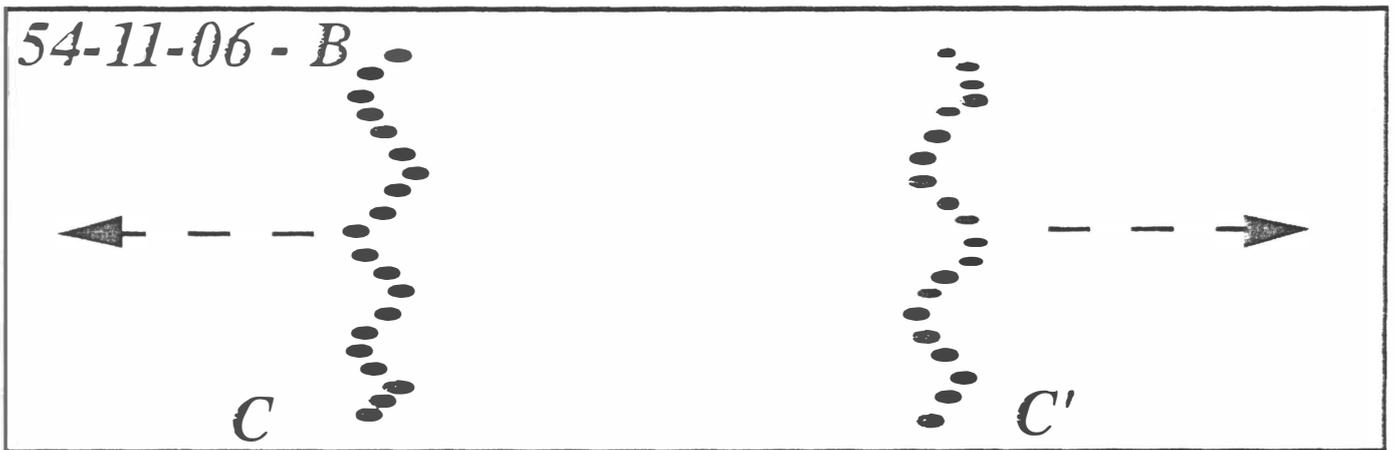
For - "Even if I did know what they are" , a War Office spokesman was quoted as commenting by the London Sunday Dispatch, " I am too worried to say anything".

["UFO NEWS DIGEST" May, 1957]



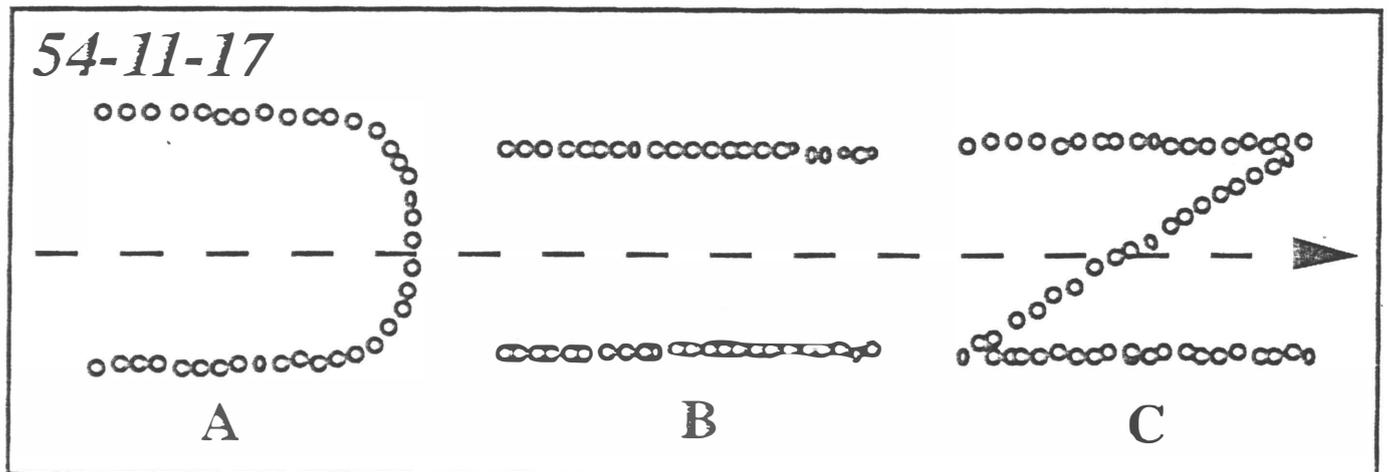
■ローマ上空における十字形成の図。左上に記された「54-11-06」は、そのように記された出展もあるが、編者は1956年を採用している。

【"Project Delta" by Richard F. Haines】



■十字形を形成した後、左右に分かれる図。この編隊の目的が「十字」の形成にあることを確実に地上の観察者に知らせるべく、「十字」を形成後、可能な限り「崩れた隊形」に変化した意図が読み取れる。

【"Project Delta" by Richard F. Haines】



■ロンドン近郊レーダーサイトのスクリーンに映った編隊の変化を示す図。この図から、編隊の変化過程を編者なりに想像すると、横になった「U」の右端の真中が切れ離されて、上下の直線になり、「=」が形成される。次に上の直線の右端が鋭角に伸び、下の直線の左端が鋭角に伸び、それぞれ順送り鋭角に折れた先端が接触して「Z」が形成される。その想像図を下に示す。

【"Project Delta" by Richard F. Haines】



彼は英国の当事者による証言ないしは図的な資料を基にこの図を作成したと思われる。

これによって、UFO編隊がどのようにして隊形を変えたかが、推測できる。

まず、「U」の隊形は横になった形をしている。この隊形から2本の平行線に移るには、右端の縦の連結を中央から切り離し、上下に直線の隊形をとることで、成される。そして、次は上の直線の右端の数個が下方に向けて鋭角に折れ、下の直線の左端の数個が上方に向けて鋭角に折れ、その先端が接触することで「Z」の形が得られる。この編隊隊列変更は、後のローマ上空における「十字形」でも応用されている。

これらの「編隊」は、空中に投影された虚像ではなく、飛行物体としてのUFOが、訓練された飛行、あるいはプログラムされた飛行の「隊形変化」を展開したものであろう。

より詳しい内容を『UFO NEWS DIGEST』May, 1957(原文は別頁に掲載)よりJ.N氏による訳文で以下に示す。

● 「U」イコール「Z」

空中の奇妙な有様が陸軍省を困惑させる。このように、ロンドンの『サイデー・ディスパッチ』紙は、1954年11月17日に見出しをつけた。

この記事が述べるところでは、40機から50機のUFO群を7つの別々のレーダーが追跡するという一連の事件が、去る9月の遅くより始まり、イギリス陸軍省に報告された。

毎回このUFO群は昼の12時ごろ出現し、毎回おおよそ12000フィートの高度を保っていた、とのこと。しかし、これはほんの序の口にすぎなかった。「この地域に設置された我がレーダーの全てがそれを捉えた」と、陸軍省スポークスマンは言った。――だが、この[レーダー面上の]「輝点」の原因となるものは、人間の眼には見えなかった。その時間、付近を飛んでいる飛行機は知られていなかった。気球、凧、蜃気楼、その他これに類する物は、現象を説明できそうにないため、ただちに捨て去られた。

そしてUFO群は隊形を変化させた。東からやって来た群の最初の配列は、「U」――またはヘアピン――の形であった。これは、急速に2本の平行線――「イコール」の記号――へと変化した。そして最後に、レーダースコープから去る前、隊形は「Z」の文字と同じになった。それは果たして何の前兆なのか？――もし誰かが知っていたとしても、彼らは告げない。実際これらの目撃は、ディスパッチを通じて「漏らされる」まで、一ヶ月以上のあいだ「最高機密」となっていたのだ。

しかし、いくつかの興味深い説が、もっと最近になって提出された。専門的訓練を受けた人、または科学に関心がある人にとって、「U」は常にウラニウム(U-238またはU-235)の原子記号である。(もっと大衆的な憶測は、「U」がまさにそれ、すなわち貴方[You]を意味しているというものかも知れない)イコールのサイン、つまり2本の平行線は、ほとんど万人に知られている。そして、「Z」は何か？我々は皆、「Z」が英語のアルファベットにおける最後の――つまり「終末」の――文字であることを知っている。「Z」(小文字であれ大文字であれ)はまた、電子工学における取り決めでは、オームのインピーダンスと関係がある。〔訳者注

:インピーダンスはZで表記される〕。

上述の報告は1つである、UFO年代記の中で最も不可解な――最も重要ではないとしても――ものの。何度か繰り返された(たまたまそうだった?)これらの配列が、偶然の産物ではなく、知性による操作――すなわち通信への大規模な試みの結果かも知れないということは、考えられぬことではない。誰、あるいは何物による？――誰も知らない。それは徹底的考察と再分析に値するかもしれぬ。

なぜなら、――「たとえ私が正体を知っていたとしても」と、陸軍省スポークスマンのコメントが、ロンドン・サンデー・ディスパッチによって引用された。「私は、何と言つてよいか全く困ってしまう。」

この英国上空のレーダー面UFO事件の発生時期に関しては、二説あり、「9月末から10月はじめにかけて」とするもの。「10月の終わりから11月の初めにかけて」(ヘインズ著の「11月17日」という日付は、新聞の日付と混同したとみられる。)とするものである。

新聞報道が11月17日ならば、後者の場合だと、それほど間をおかずに報道機関に伝わったことになる。前者の場合だと、「1ヶ月以上最高機密となっていた」とするサンデー・ディスパッチの内容に一致し、また軍事的認識から推察してこのほうが自然であり、「9月の終わりから10月にかけて」という時期が正しいと思われる。

また、上記の内容では、やや情報不足なので、高梨純一氏による『空飛ぶ円盤情報』1957年1月号から抜粋してみる。

● 英軍事省の度肝を抜いた見えない円盤の謎

「……翌日になると、又しても謎の大編隊は、同じような時刻に、全く同じ場所に、そのU字型の編隊を現して来たが、この日は、前二日とちがって、カラリと晴れ亘った絶好の秋日和であった。実は、前二日は曇天で、全天どんよりと雲っていたため、高空を堂々と行進する謎の飛行体の大編隊の姿は全然見えなかったのである。だが、この日は見える筈である。そこで、進路に当たる各レーダー観測所は勿論のこと、緊急指令を受けた各空軍基地やジェット偵察隊なども、今やおそしと、円盤の大編隊の現れるのを、待ちかまえていた。

所が、レーダー面上には、謎の飛行体の大編隊が、まずいつもの通りU字型の編隊をとって現れ、次いで「=」型になり、更にZ型に変わって西の空に消えて行くのに、カラリと晴れ上がった空には、何一つ編隊を取って飛ぶものの姿は現れてこないのである!!

……そこで、軍事省と空軍省は、早速レーダー観測所に、そのレーダー設備の点検を命じた。だが、どう調査してみても、こんな不思議な現象の原因となったと思われる故障は、どの器械からも発見されなかった。

こんな出来事がたった一日だけ起こったというのなら、まだしもである。所が、この現象は、それから四日間、全く同様に引き続いて起こったのである。しかも、その度毎に、地上の看視者達はレーダー観測所から指示された空の方向に双眼鏡のレンズを向けて見、高空を飛んでいる空軍ジェット機の操縦士達は、下方に目を落としてみたのであ

る。だが、何1つ目に映るものはない。こんな不思議な出来事である。」

以上二つの大きなUFO事件から、以下の能力が明らかと成る。

1.UFOは編隊を自在に変形させて、空中に記号を描く

能力を持つ。

2.UFOには正午を重要な「サイン」提示の「時」とする認識がある。

3.UFOは大編隊であっても、肉眼に見えない飛行を行う能力が在る。

4.UFOはレーダー・スコープのみに姿を示す能力がある。

UFOの能力:その3 探査能力

1.海中と地中における待機状態

まるでSF小説の見出しのようだが、こういうことである。過去の記録にみられるように、UFOはしばしば海中に突入し、また海中より飛び上がるのが目撃されている。日本海における現象は、神が発現する神聖な火として崇拜の対象になっている。また地震の予兆として現れることから、地震エネルギーと関連づけた理論で説明されている。しかし、これらは一個のあるいは複数の飛行物体である。岩石の崩壊が発する火花では説明が困難である。

私は横浜において、地中に突入する小さな光体を同じ地点で何度も目撃した。1962年当時、横浜は非常に熱心なUFO研究者が多数集結していた。それら研究者の内面を探査する場合、UFOの活動拠点が地中に在ることは妥当であろう。即ち、必要に応じて瞬時に目標(人物)に接近できる。この場合、UFOは地中を「透過」しなければならない。地面に穴を開けることなく、通過する能力である。UFOが建物や乗り物を透過して侵入する事例は、UFOの物質透過を裏付ける。

日本の古記録にも、包丁を豆腐に刺すように、縦になった細長い物体が地面の中に入る目撃がみられる。また、ロシア圏におけるUFO事件に伴う地中の穴など、これは物理的に地中の土が排除された事で、“透過”とは異なるが、透過では痕跡が残らないが、そうした痕跡を残すことで、考える材料を提供する意図の存在も考えられる。

2.呼びかけに応じるUFOとCBAの活動

この項目の冒頭に記すべき言葉があるので紹介する。

The LORD looks down from heaven upon the children of men, to see if there are any that act wisely, that seek after God.

They have all gone astray, they are all alike corrupt; there is none that does good, no, not one.

【Psalms 14-2】

「主は天から人の子らを見下ろして、賢い者、神をたずね求める者があるかないかを見られた。彼らはみな迷い、みなひとしく腐れた。善を行う者はない、ひとりもない」

【聖書 詩篇 14-2】

この「詩篇」の言葉は、我々人類の営みをはるか上空から監視する存在の意識をうたっている。この詩の作者は、自分が人類の一人でありながら、神の意識を代弁せんとしている。

1960年から1970年にかけて、UFO問題への理解を日本全国に広めていた民間団体があった。惑星間友好を目指す趣旨から「宇宙友好協会」と名づけられ、後に略称「CBA」が一般に知られる名称となった。

筆者の私も1960年から1975年頃まで、この団体に所属していた。彼らは、人類最大かつ緊急の課題である空飛ぶ円盤問題・宇宙人問題の報道を、本来なら国家機関が行って然るべきだが、国家機関にその能力がないので、その能力の代行を意味する「公報」という用語をもって、その広報活動の推移を機関誌上に発表した。

CBAの会員で、単に機関誌を購読するだけでなく、CBAの趣旨に賛同して支部やサークルの活動に参加した人々は、個人的な観測や様々な活動の過程、そして彼らの催す観測会で多くのUFOと遭遇また目撃した。

彼らの多くは、UFOからの積極的な接近を受けるか、個人的にあるいは集団として、空に「思い」を発することによって、驚異的なUFOの飛行を目撃することとなった。

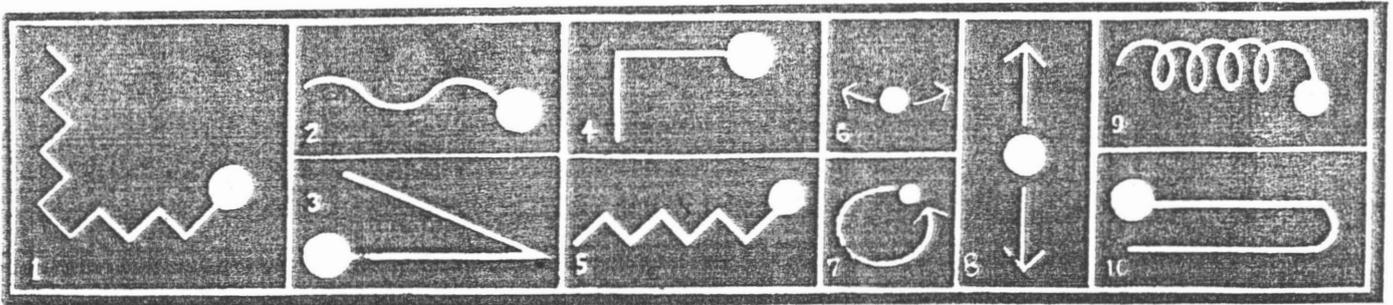
彼らは統一されたUFO目撃報告様式に基づいて、目撃体験をCBA本部に逐次報告した。

例えば1965年の一年間における会員からの目撃報告数は1805件であった。それらの報告が、そのまま「UFO」とされた訳ではない。報告のなかには当然、流星、人工衛星、飛行機、飛行機雲とみられる誤認もあった。それらは天体観測や航空機観察の経験を積んだ目撃報告担当者によって、「〇〇の誤認」のゴム印を押されて真性UFOの統計から外された。UFOと判断された目撃の内容は、世界各国から報告される形状や飛行パターンと共通し、また観測会という行事から複数による目撃も967件あり、個人的な一方的思い込みによるUFO判断の可能性が軽減されていた。

このような例がUFO先進国の欧米に、どれくらいあるかは不明だが、CBA会員による目撃が、集団幻覚や狂信的な誤認などではなく、客観的な現実のUFOを目撃していたとすると、このような出来事がなぜ起こり得たのか、研究する価値は充分にあるだろう。

この出来事を、冒頭に掲げた「詩篇」的立場、つまり古くからの地球の「管理人」ともいべき神の側から考えてみる。神が、定期的な人間の意識調査を行うに当たって、小型の調査機あるいは記録機ともいべき道具を、大量に人間界に放って、数十億の人類の脳と心を調査記録し、それらを回収することを想像してみよう。

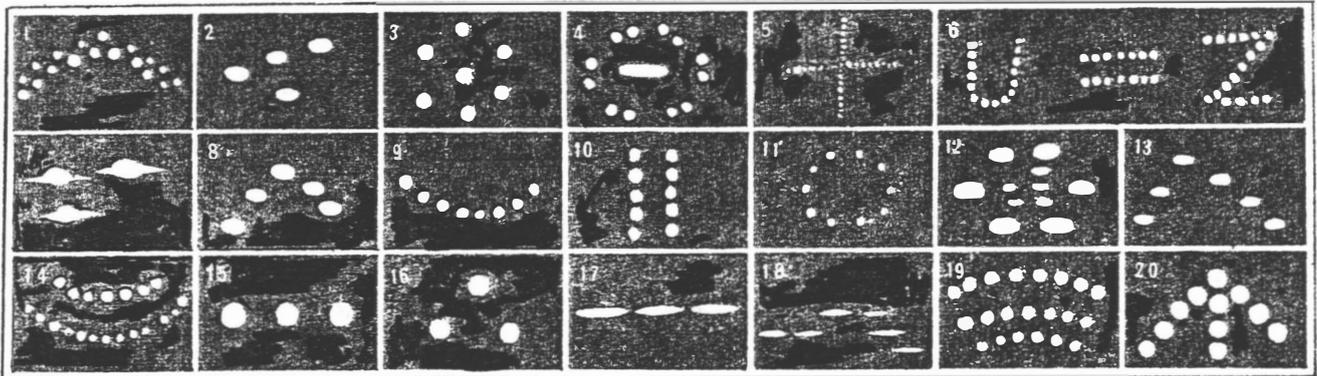
CBAの多くの会員達は、毎月発行された『空飛ぶ円盤ニュース』を学習し、「空飛ぶ円盤の乗員」を「古代の神々の再来であり、宇宙連合のメンバーであり、宇宙の尊敬す



- ①1949年6月28日米国ネバダ州マックスウェル空軍基地の関係者8人が目撃した、急速なジグザグ飛行をしながら頭上で直角ターンをしたUFO。
- ②1957年3月12日夜、福岡県八幡市で目撃されたUFOの波状運動。
- ③1958年3月2日夜、沖縄で目撃された、下降したUFOが停止して水平に後退したもの。
- ④1958年5月5日日没時、神戸市で白色UFOの直角ターンが目撃された。同年5月28日にも秋田でも形を変えながら直角ターンしたUFOが目撃されている。
- ⑤1958年9月10日夜、島根県益田市でジグザグに飛行する青白い光点が目撃された。同年12月10日朝、香川県多度町でも

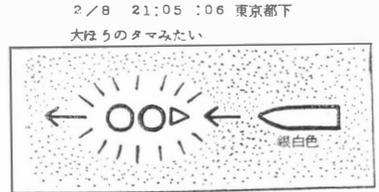
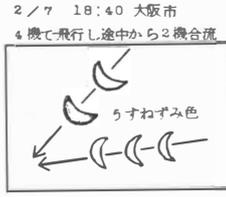
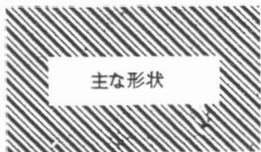
ジグザグ運動が目撃されている。

- ⑥1958年5月28日夕刻、神奈川県鶴見でフリコの運動をする謎の物体が目撃された。
- ⑦1958年4月19日深夜岡山の高校生等が目撃したUFOは円を描くような運動をしながら進行した。
- ⑧1958年12月27日夕刻、豊川市で目撃されたUFOは、滞空しながら上下運動をしていた。
- ⑨1958年9月2日夜、佐賀県唐津市で青白色楕円UFOがラセン運動しながら飛行するのが目撃された。
- ⑩1959年2月1日夕刻、北海道網走で、2個のレンズ形物体が出現し、そのうちの 하나가Uターンを行った。

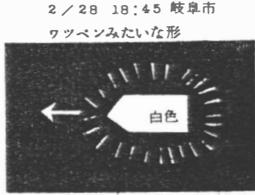
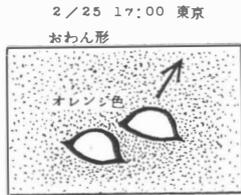
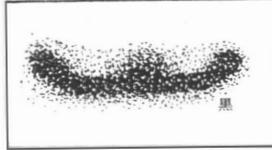


- ①1951年8月30日、米国テキサス州ラボックでカール・ハート氏が撮影。
- ②1952年7月16日、米国マサチューセッツ州で沿岸警備隊カメラマンが撮影。
- ③1952年7月26日、米国の首都ワシントンの民間・空軍両空港レーダー面と、1954年7月3日バミュダ沖合いでレーダー面にキャッチされた知的編隊。
- ④1952年10月27日午後4時頃、フランスのオロロン市上空に現れた円筒状を中心にペアの円盤が取り巻いた編隊。
- ⑤1954年11月6日正午、イタリアのローマ上空でV字編隊二組が左右から接近、パチカン上空で十字を形成した。
- ⑥1954年10月、英国ロンドン近郊のレーダーサイトで、連日正午になると、この目に見えない編隊が「U=Z」という隊形を示した。
- ⑦1955年8月31日、ベルリン上空に現れた3機編隊の側面から見た形態。複数のUFO編隊は3機構成が比較的多い。日本では1965年の一年間に5例が報告されている。
- ⑧1954年8月、広島県甲奴郡(こうぬぐん2005年に消滅)で目撃されたV字型5機編隊。1960年5月29日名古屋でも目撃された。
- ⑨1956年8月11日、福山市で目撃されたやや開いたV字型編隊。円弧型ともいえる。

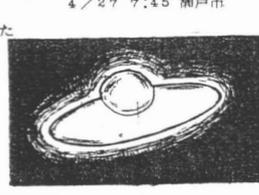
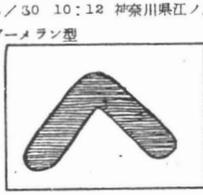
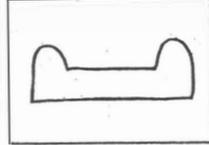
- ⑩同じく福山市で目撃された編隊で、この時のUFO編隊は何度も隊列の形を変えた。
- ⑪1957年9月14日、羽田国際空港で観測会が行われた時、目撃されたリング状のUFO編隊。
- ⑫1958年5月18日、島根県松江市の上空に現れたもの。
- ⑬1958年8月、三重県伊勢市に現れたV字型編隊。7個V字型は1965年10月19日夜に福岡でも目撃されている。
- ⑭1958年10月6日、東京上空で目撃された二重の円弧状V字型編隊。ネックレス型ともいえる。
- ⑮1959年1月21日、青森県上空に出現した一列3機編隊。同年2月25日米国でもアメリカン航空の旅客機から目撃されている。
- ⑯1959年1月30日東京上空、1962年5月横浜上空、同年7月29日埼玉上空に出現した。
- ⑰1960年10月20日、九州阿蘇上空に出現した母船編隊。この周囲をきらめく円盤が飛び回っていたのが目撃された。
- ⑱1961年12月21日、航空機から目撃された瀬戸内海上空に現れた母船の大編隊。組み方もいろいろ変えた。
- ⑲1962年10月23日、神奈川県で目撃された三重円弧の大編隊。
- ⑳1962年11月5日、東京で目撃された変わった編隊。



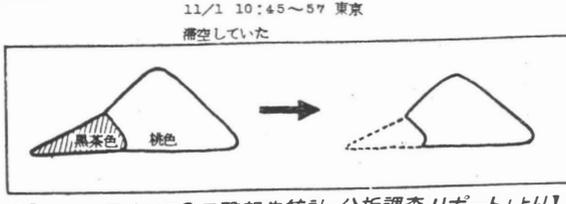
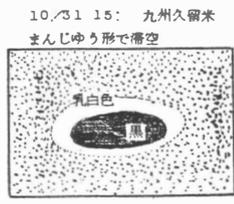
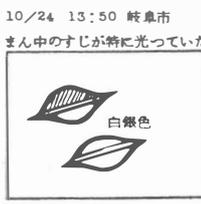
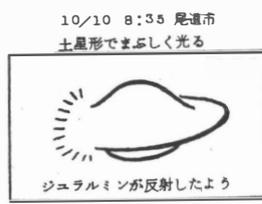
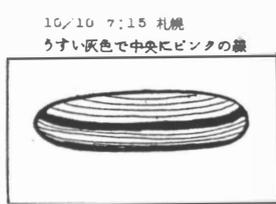
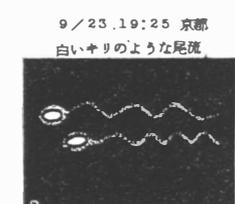
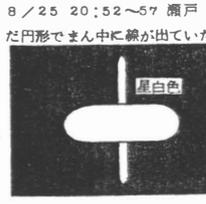
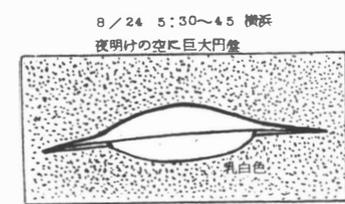
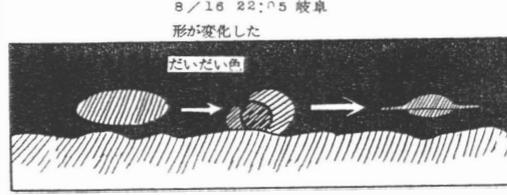
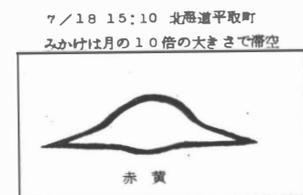
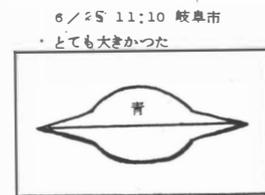
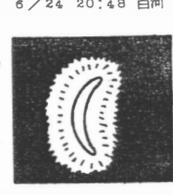
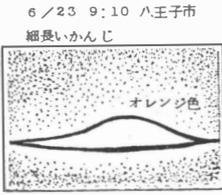
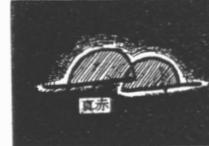
2/19頃 13:00~14:00 市川市
左右が出ていて輪廓ははっきりしない



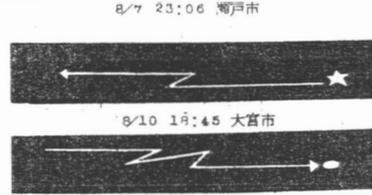
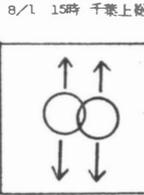
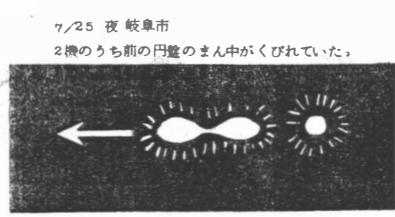
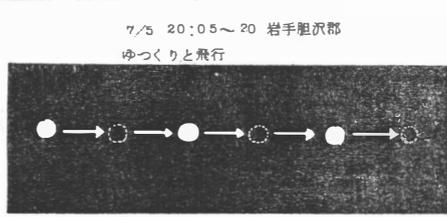
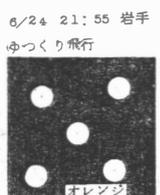
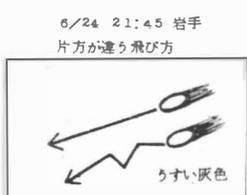
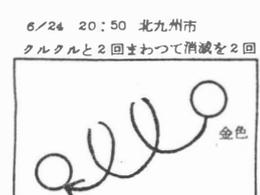
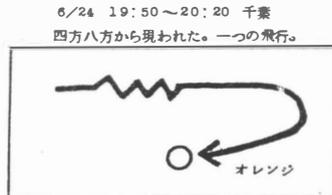
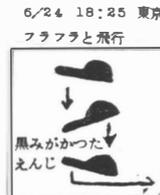
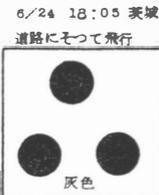
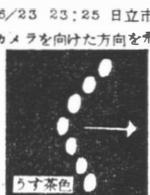
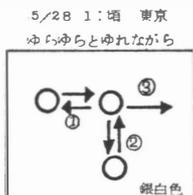
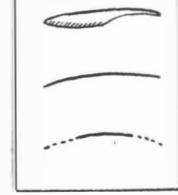
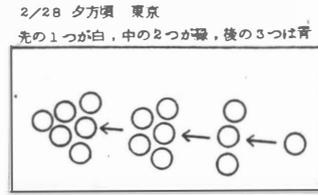
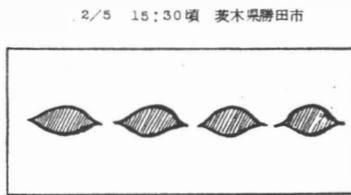
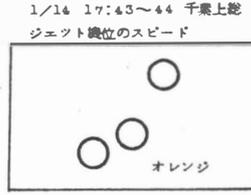
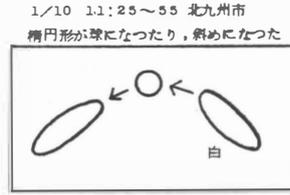
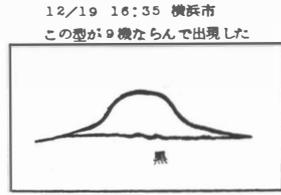
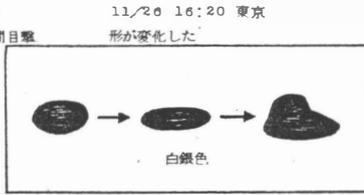
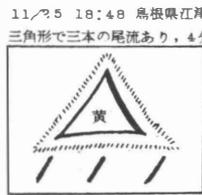
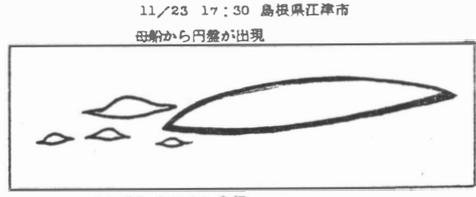
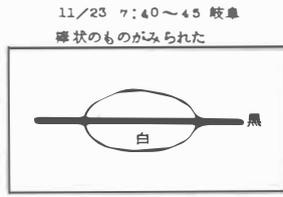
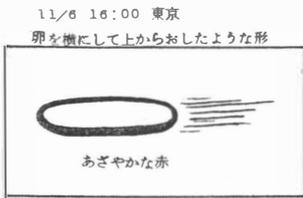
3/17 5:20 岐阜市
前後がふくらんでいた



5/9 21:00 岐阜市
帽子のよう



【『空飛ぶ円盤ニュース』1966年8月号附録「1965年日本UFO目撃報告統計・分析調査レポート」より】



【『空飛ぶ円盤ニュース』1966年8月号附録「1965年日本UFO目撃報告統計・分析調査レポート」より】

べきブラザーの方々である」という認識に立っていた。

単にある特定の時期「1960年前後」、空飛ぶ円盤に興味を持った、という人々が、お互いに連絡をとることもなく

入会の手続きをとり、血族的、思想的つながりの無い任意の100人以上の人々が、自らの自発的意思で、そうした「UFOに対する統一見解」の確信に到達していたこと自体、「現代の奇跡」というほかないであろう。個々の間に多少の差異があったことは、彼らが決して「洗脳」された人々ではなかったと思われる。過去のある「原因」が、日本列島に集結した結果、という解釈もある。

そして、彼らは人類史始まって以来の出来事、「呼びかけて応えるUFO」の目撃証人となった。私はそこに「UFO」の調査能力の正確さ、緻密さがみられると思う。

なぜ、高名な科学者やUFO文士が除外されたのか。CBAにおける奇跡は、聖書的観点から言うと、神が天地を創造して以来の出来事であったのかも知れない。

それを物語る出来事として、彼らが北海道平取のアイヌ聖地に建設した「ハヨピラ公園」における1965年6月24日の祭典において、「創世記の記述“契約の弓”」と解釈された現象が現れたことである。

現存するユダヤ人国家イスラエルという「神の民の後継者」を差し置いて、本居地を遠く離れた日本の、一民間研究団体の行事に、人類と神の間において交わされた契約の印が現れる、という「思想」自体、「生じ得ない」と考えるのが普通である。「そんなことがあつてたまるか」と笑い飛ばすのが良識ある人々の無難な反応である。私もその列に加わりたいが、残念ながら「目撃証人」の一人であり、機関誌『空飛ぶ円盤ニュース』“でも「契約の弓の目撃証人」として目撃手記が記載されている立場である。

約40年を経ても、脳裏に焼きついているのは、真っ白な積雲を背景に、やや斜めになって静止していたスリとした2本の黒い「弓」、そして、映画『十戒』の中で、紅海を背にモーゼが立つ背景の雲が急速に動くように、「あつあつだ！」と叫ぶ隣人の声で空を仰ぐと、弓状の雲が急速に広がって形が形成された瞬間であったこと。

いっぽう、熱心なUFO信者で推理力のある御仁なら、いかなる「約束」が、UFO部隊とCBAの間に存在したのか、勘ぐりたくなるであろう。

実際のところ、「宇宙人とのコンタクト」という理念目標が、現実にこの団体の中に実現していなければ、そのようなことは起こり得ないのである。

その現象を撮影した数百枚のカラー・モノクロ写真を見て、「まさにその通りだ」となったら、人類の歴史の再考が求められることにもなる。それほどの「重大事件」を、小さな民間の日本人が独占していた、もしそうなら、これは大変なことなのだ。

彼らは天と地の間に発生する奇跡、UFO、つまり聖書的には「神の栄光」の具現を独占したと言えるのである。イエスが天に呼びかけても、即座に「天の栄光」が飛来したわけではないし、モーゼの頭上には絶えず「雲の柱・火の柱」が滞空していたとしても、モーゼの求めに応じて、「神の栄光」が「思い」を発する者の意思に従うままに空中を移動する奇跡は記されていない。しかし、現代のCBA会員は、それらの奇跡を体験したのである。

再び冒頭に記した聖書詩篇の言葉をご覧戴きたい。これは、天から人類を見下ろす神が、人類の中に「神を求めらる者」を探したが、一人もいない、と嘆く言葉である。もし、これが「神の苛立ち」ではなく、実際にその通りなら、「神」は早々に地球の管理を放棄して母星に帰還すべきではないか。しかし、神は未だ天に留まっているようだ。思えば、人は絶えず生まれてくる。新しい命に、神の思いを実現する者は絶対に生まれないと断言できないだろう。45億年の中の一瞬の時を経過中の人類史である。神はそんなに痛癢を起さず、永い目で我々を見てほしいものである。そして1957年8月、CBAが生まれたのだ。たぶん、「神の思い」にかなう人材の集団として。

“Blessed are the pure in heart, for they shall see God”

【MATTHEW 5-8】

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」

【マタイ伝5-8】

「心が清い」とはどんな心を指すのか。それを、とりあえず「純粋な動機」と置き換えて「新しい時代が、空飛ぶ円盤の来訪によって実現すると信じて行動したCBA」に当てはめてみる。

「神の栄光」は、単に望んでも見られないことは、いかなる宗教家でも同意するだろう。すなわち「行動」が伴わなくてはならないのである。

人は言葉が正しいかどうかで評価されるのではない。行動が正しいかどうかで判断されるのである。無論「言葉」は重要ではあるが。

繰り返すが、CBAの会員達が報告したUFO目撃の内容は、全世界から報告される「形状」「飛行パターン」とも一致していた。その一例の目撃図を別頁に掲げる。

日本には世界を騒がす大きなUFO事件は皆無だが、個人の範囲では、世界中のUFOパターンが集結していた。この解釈は、おそらく誰も述べてはいないだろう。

目撃者からの直接UFO報告を読んだ私の見解である。

彼らは自らのUFO目撃体験によって、UFOの実在を確信し、多数の同胞に対し、UFO問題の人類史的重要性を訴え啓蒙した。すなわち日本全国各地で写真の展示会、講演会、観測会が開催された。観測会においても、多くのUFOが目撃され撮影されて、彼らの情熱を更に高め、活動を加速した。

彼らは自らの給料を投入した。いわば完全な奉仕活動である。一部の企業家以外支援はなかった。当時、ボランティアの言葉も奉仕活動の喜びも日本列島には流布してなかったが、彼らはそれを意識することなく、UFOを目撃した体験から発する自然の行為として、何等代償を求めることなく、世間からの非難や、他のUFO研究者からの嘲笑を浴びつつ、自らの信念による活動を力強く展開したのであった。

図らずもこの行為によって、日本列島は「空に呼びかけてUFOを見る」という雰囲気は流行し、テレビでも取り上げられた。現在、この流行は「UFO」の概念の流布に伴って定着し、中国など諸外国にも及んでいる。

この「呼びかけ目撃」のきっかけとなった書物がある。この書物はアメリカで発行され、日本のCBAが独自に翻訳し印刷され、書店に委託された。

その本の日本名タイトルは『地軸は傾く』原書名は『Look Up!』である。

3. “The Registering Discs” 「レジスタリング・ディスク」

CBA宇宙シリーズ『地軸は傾く』は、筆者も1960年に購入したが、まだ当時16歳で読解力が不足していたし1975年に散逸した。今年2006年4月、盛岡のA氏の御好意により、再びこの書が手に入り再読して46年前には未読だった部分を確認し、その重要部分を原書と合わせてここに紹介することにした。

著者レイ&レクス・スタンフォード兄弟は、1954年月6日、米国テキサス州 パードリ島海岸において、6人の研究者と共に「宇宙船を呼ぶ」実験を行い、ドームを持つ円盤の接近と接近遭遇し、その光景を近くで見ていたハイウェイ・パトロールの要員を証人として正式な文書にサインさせた卓越した研究者である。

レイ・スタンフォードはその後、大掛かりな科学的観測装置を作成し、その施設を日本人研究家も訪れて『UFOと宇宙』誌に発表されている。

その起点となったのが、UFOとの接触、つまり宇宙船に搭乗して、「大変動の通告を受けた」事柄であった。

スタンフォードの示した1960年は、6月に世紀最大のチリ地震が発生して地球が振動したが、それ以後、地球全体に及ぶ大きな変動はなく、今日に至っている。

UFOが地震発生地域に目撃され、火山活動にも関心を示す写真もあり、宇宙からの知性が、地球における地殻変動の推移を調査対象の一つとして維持していることは明らかである。従って、現実のUFO報告がスタンフォードの体験と矛盾するものではない。

それと共に、「UFOは人類の個々の内面調査を行う」という概念を示したのがスタンフォードであった。この調査に使用されるのが「レジスタリング・ディスク」という無人の小型円盤もしくは球体で、円盤の内部に多数搭載され、「ランチャー」から発射されて地球上のあらゆる地域で情報収集を行う、とされている。

この概念は、「UFOが宇宙船の一種だとしたら、数が多

すぎる」という疑問に対する解答であると共に、「円盤が地面に激突して破壊した」とか宇宙人の死体が回収された」といった次元の低いUFO・宇宙人像を打ち砕く、彼らの「科学力」の高さを示すものである。

ここに、同書「SURVEYING EARTH」の項目から紹介し、合わせて翻訳書から要旨を紹介する。意味不明箇所は、訳注を本文に挿入するなどして簡略化してある。

「宇宙人は特殊な装置を使って地球の状態を観察している。物質面と精神面の観察がある。

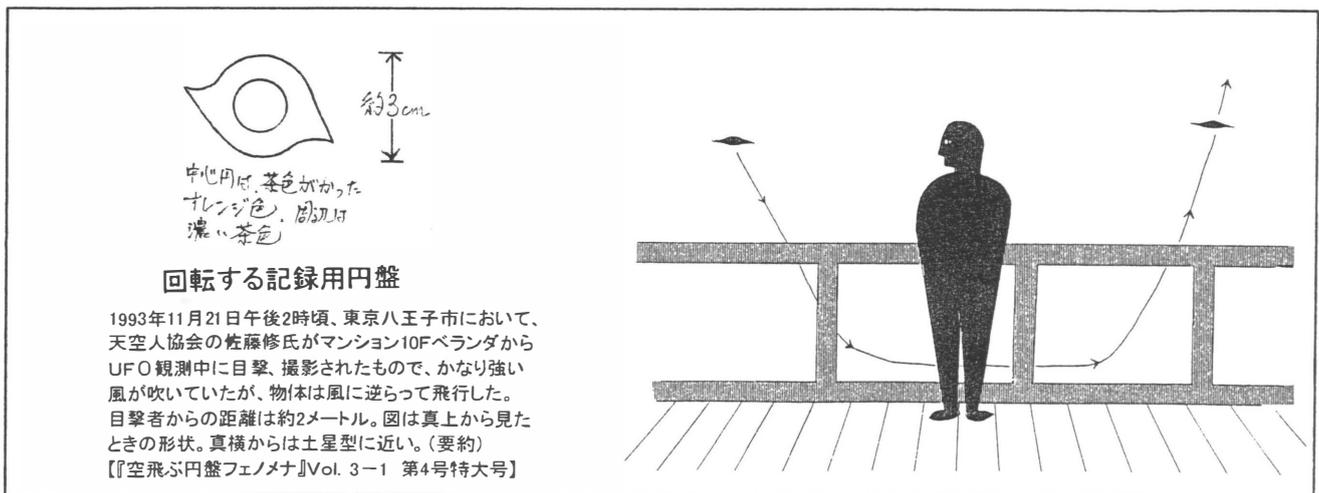
観察用の装置の「記録用円盤(レジスタリング・ディスク)」は、数インチから10フィート以上のものまで、種々ある。これらは対象となった個人あるいはグループの精神波動(メンタルヴァイブレーション)を自動的に記録し、それを母船に送信したりあるいは記録蓄積することができ、また物質面の観察にも使用される。これらの円盤は、ある特定の時期にある個人を観察し、通常、ある種の条件に対するその個人の反応をキャッチする。

地球上の国家的および国際的緊張下にあつては、局地ないし全面戦争の危惧に基づいて、宇宙人は地球を観察している。

かくて、宇宙人は、もし必要なら宇宙人に尽力できる準備の整った人間を見出す。私たちは、この方面に全く経験のない人が夜間ふいに強烈な衝動(インパルス)を受けて目を覚まし、窓の外にUFOを目撃する話が多い。

一方、物質面の観察も精神面のそれとよく似た装置を使って行われ、「記録用円盤」がその大半を果たす。宇宙人は“磁気異常現象”“核爆発による大気中の放射能”“断層線の歪み”その他を観察する。これらの状態を円盤が厳密に監視しているということは、世界各地で発生する地核振動前後の地震地帯上空に円盤がしばしば出現することによって証明される。核爆発による影響も観察対象であり、強烈な諸状態は遊星を粉碎させることも出来る条件である。」

現在、スタンフォード兄弟が提示した「新時代」「大変動」は、類似の理論や運動の台頭によって、ほとんど意味を成さないが、大地震発生に関連する「断層」問題、核兵器、核爆発、チェルノブイリ残留放射能、大災害という現実問題は、50年前より増してと緊急的な人類の課題となっていることは、誰も否定できないであろう。



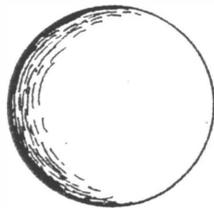
【天空人協会発行『空飛ぶ円盤フェノメナ』1996年特大号より】

The Registering Discs

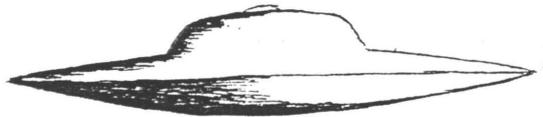


←1957年1月16日横浜市において松村雄亮氏が撮影した“日本最初の円盤写真”。松村氏の証言を元に河合浩三氏が作図したもの。
これとほぼ同一の小型円盤は、1980年、大阪長居公園上空において、山野涇氏により目撃されている。上部ドームの突端に“アンテナ”を示す突起がある。

1944年の第二次世界大戦末期、米空軍のP-47パイロットによって目撃された「黄金色の熾光性を発する球体」。フーファイターと呼ばれ、当時のパイロットが多数遭遇した。
直径1~1.5m位。→

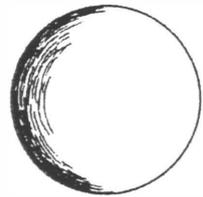


1956年10月10日と同日13日に、米国サンフランシスコで撮影された。→



1950-51年の朝鮮戦争中、米海兵隊空軍が撮影したUFOも、このタイプと考えられる。

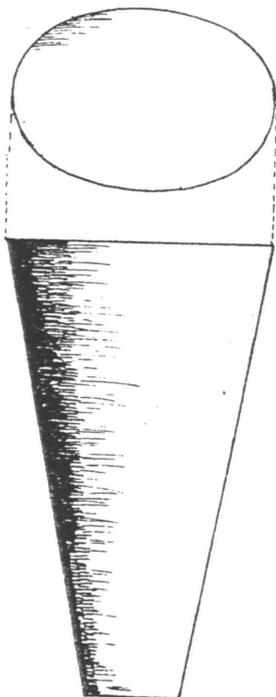
これも第二次世界大戦中B-29爆撃機が日本上空、富士山付近で遭遇した。直径1m、熾光性の赤色だった。 →



1943年10月24日、第二次世界大戦中、ドイツ上空でボーイングB-17爆撃機に接近した物体。
直径10cm、厚さ3cmくらい。→



←同じく第二次世界大戦中ソロモン海域上空に出現したフーファイター。
直径80~90cm。
白銀色をしていた。



1960年10月、→福島県の永江氏が夜12時頃自宅のガラス戸近くに出現したのを目撃。
直径20cmくらい。



東京で梯さんが見たもの。直径5cmくらい。紫とブルーが混じった色をしていた。
↓
○

←1961年7月24日
福島県白河市に降下した楕円形。
直径20~25cm。



←1961年11月7日午後7時半盛岡の中学生が目撃。上部は長径1mくらいの楕円形。高さ3mくらい。

↑1959年春、旧ソ連のジェット旅客機の中に侵入してきた円盤状物体。直径50cm。



身長1.65mの人間

SURVEYING EARTH

The space people sometimes conduct surveys to observe conditions on earth using their ships and certain instruments. These surveys are generally of two types, namely, physical or mental. We shall first examine both types of surveys and later tell something of what they have learned from these.

Initially, we shall discuss the mental type of survey. This is conducted usually over a relatively short period of time such as several weeks, and it may be done upon persons in a specific area, persons as a collective group who are interested in a certain field of endeavor, or upon select individuals. The manner of conducting it is from scout ships of various types which are launched from mother ships. At such periods of survey many of the "discs" are reported in the skies. This stems from the fact that many people mistake scouts for the more commonly reported disc, and it is also due to the fact that many discs are launched from both the mother ships and certain types of scouts and are used in the survey.

The instruments used in such surveys may be of some interest. Most important are the registering discs which vary in size from several inches to about ten feet and perhaps larger. The size used depends upon several factors, including the type of survey and the vastness of same. These discs, also used in physical surveys, can register, transmit back to the mother ship, and/or record mental "vibrations" (resonations) of the individuals or group in question. Also, these discs may be launched from certain types of scouts which have appropriate instrumentation aboard. These discs observe individuals at particular times, usually to get their reaction to certain types of conditions. The conditions they sometimes examine will be discussed a little later in this chapter.

Also, the scouts sometimes have instruments on board which they use to directly register thought vibrations. These vibrations are sometimes transformed into colors visible to the space people on their instruments. This is usually done at the time of application of one of the various beams from such ships. It relates to how the beam is "set" for the individual and of what intensity it should be.

The purpose of such surveys is usually to determine a course of future action with regard to the persons involved in the survey. They might test all the people in a given area as to their reaction to strong telepathic impulses of a definite type, or to the sight of ships overhead. Sometimes during tense national or international situations they will conduct a survey for reasons which could easily be deduced. Over a period of time they have been known to give numerous "potentially receptive" persons in a certain group or geographic area strong telepathic impulses to stop whatever they might be doing and look up into the skies and see their

["Look up" by Ray & Rex Stanford]

アーノルド事件から59年目、 核とUFOについて考える

■ヒロシマ・ナガサキにUFOは現れたか？

本誌『THE UFO RESEARCHER』が通巻50号を記念して“核とUFO”の特集を出す¹⁾と宣言してから3年以上が経過した。目標が大きすぎたため、どのようにするか、などで年月が経過した。

それでも、様々な推進的要因が、ここにきて重なったことで、“なりふりかまわず出す”ということになった次第である。要するに「完成品」ではないが、「現状のまま」を見てもらう、ということである。

この第I集を初代として、第II集、第III集と、同じ構成と新しい内容で進んでみたい。

編者が空飛ぶ円盤問題に興味を持ち、宇宙友好協会(CBA)に参加した1960年代の当時、空飛ぶ円盤飛来の目的は、「迫り来る大変動」であり、その準備として「一人でも多くの人に、空飛ぶ円盤の真実を知らせる公報活動」を展開したのであった。

しかし「準備」には、もう1つの重要な要素があった。それは「核兵器対策」である。当初これは、関係者だけの口伝的な事項だったため、編者が知るまでには、年月がかかった。

核兵器の地球破壊の問題、あるいは生命発育を阻害する放射能汚染の問題とUFO出現を関連づけるテーマは、すでにジョージ・ハント・ウィリアムスの著書邦題『宇宙語・宇宙人』と、レイ、レクス・スタンフォード兄弟の著書邦題『地軸は傾く』でも述べられていた。

従って、この認識を“宇宙人側の意思”として日米の研究者が共有している事は、極めて重要だと感じた。つまり両者が「本物の宇宙人」と接触している可能性が大だからである。

その可能性をそれを更に強化させ、確実なものとするためには、全世界における客観的なUFO事件が、CBAやウィリアムスン、スタンフォードの発信する内容と一致するかどうかにかかっていた。

一方、UFO現代史でみると、すでに1954年、英国空軍のダウディング中將が原爆実験への反応として、他の遊星から空飛ぶ円盤が飛来する、という説を発表している。記事を掲載しておく。

また米空軍のUFO調査機関初代主任エドワード・ルッペルト大尉も、著書邦題『未確認飛行物体に関する報告』の中で、1952年の米国初の水爆実験に際し、“水爆実験の実施期間中、UFOを監視するために上空を飛行する”という計画がもちあがったことを述べている。

つまり、ルッペルト達空軍の関係者は、UFOがロスアラモスに集中出現していることなどから、UFOが核兵器、核実験に関心を持っている、ということを確認していたよう

【ロンドン十一日発】AFP
特約】第二次大戦中英空軍機部隊を指揮して偉勳をたてたダウディング中將は十一日付サンデー・エクスプレス紙に「空飛ぶ円盤」に関する一文を寄せ、つぎのように述べている。
空飛ぶ円盤は地球以外の遊星から飛来したもので、これは最近地球に実験が行われた原子爆弾が宇宙の空間をとおして他の遊星にも感ぜられたのと同じく、世界の入り口で飛来したのではないかと思われる。

29.7.12 毎日(夕)

原爆実験への
他遊星の反応
『空飛ぶ円盤』に新説

まず、水爆実験に関する話をした。11月か12月に、アメリカは、アイビープロジェクトという最初の水爆実験を行う予定だった。当時このことはトップシークレットであったにもかかわらず、機密の保持がこれほどずさんだったことは史上なかったほどで、誰もがそのすべてを知っているように思えた。

ペンタゴン内の一部は、地球上のものかそうでないかは別として、何者かが、オペレーション・メインブレイスの時と同様、太平洋でのアメリカの活動に関心を寄せる可能性があると考えていた。そのため、プロジェクトブルーブックは実験場へ移動し、報告連絡網を立ち上げ、報告の仕方を指示し、現場でその報告の分析に当たるように命じられた。

具体的な観測計画

1952年の秋には、報告が徐々に減少していった。12月までに、これまでの平均の月30件にまで低下した。“識別不能”に分類されるのはその約20%である。

水爆実験の実施期間中、UFOを監視するために、我々が太平洋に飛ぶという提案は、土壇場になって却下された。航空機に空席がなかったからである。しかし、水爆実験で現地に赴く海軍と空軍の保安要員に対して、UFO観測のための十分な状況説明が行われ、UFOの観測や報告の方法が説明された。

【学術研究出版センター刊 エドワード・J. ルッペルト著『未確認飛行物体に関する報告』より】

だ。

確かにルッペルト達の予測通り、このときの記録フィルムには、水爆小屋付近の空域を飛行するUFOs(本誌裏表紙の掲載の写真)と、その上空、また準備工事をしている要員の頭上を高速度で飛行するUFOが映っており、UFOによる水爆実験の監視活動として、米国のステイーブン・グレア博士のグループでも注目されている。

年2-3月号『空飛ぶ円盤ニュース』であった。

このニュースの情報源となっているイタリアのUFO研究家の、同じ情報が、やや訳文に相違はあるものの、1989年に中村省三著『UFO 赤い国のエイリアン』でも使用されており、情報通のUFO専門家の間では、かなり知られている事件と思われる。

ここでは『空飛ぶ円盤ニュース』の記事を、そのまま紹介するので、まだ読んでない方は是非お読み戴きたい。

読者は、この内容が単にUFOが目撃された、というレベルではない事を知るだろう。事件を伝える文章は断片的だが、先の「UFOの能力」でも示したように、地球上で行われる「動き」に対して、直接的に影響を及ぼすものであり、我々が抱く「惑星間不干涉」という理念の修正を促すか、或いは古代の預言者の仲介者を想定しなければならない。

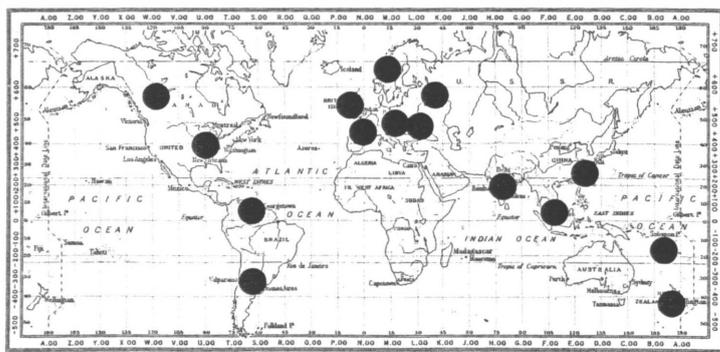
事件の「全体像」を知らない我々には、漏れてきた断片でしか、推測するしかないが、もし、UFOが「地球の悪事すべて」を武力で阻止するのが目的なら、UFOの実力行使は、すべての人類の悪行に対して適用されなければならない。しかし、「UFO知性の最終目的」は、そこにはないようだ。

■1956年における「数千の目撃・コンタクト」?

スタンフォード兄弟によると、1956年11月13日から18日まで、宇宙人側は地球全域にわたり、人類の精神面の観察を行ったという。その結果、当時世界各地で数千にのぼる目撃報告があり、同時に幾百もの「コンタクト」が発生したという。

しかし、現代UFO史において、1952年の米国UFOウェーブは知られているものの、1956年がどうだったか、調べようが無い。

唯一、高梨純一氏が1956年12月から発行を始めた『空飛ぶ円盤情報』に2回連載された松村雄亮氏による「空飛ぶ円盤ワールド・ホット・ニュース」によると、松村氏が設立した「空飛ぶ円盤研究グループ・極東総本部」は、その時



■1956年9月から11月にかけて、松村氏の研究グループに送付されたUFO目撃事件の一部を、地図上に示した世界規模の分布を示す。

19ヶ国から目撃報告を受け取り、その一部が同誌に掲載された。

それによると、1956.9.4ニュージーランド南島、1956.9.12モスクワ、1956.10.23ノルウェー、1956.10.23英国、1956.12.12台北、1956.4.15カナダ、1956.5.13インド、1956.7.14米国、1956.7.24シンガポール、1956.8.3フィジー、1956.8.19アルゼンチン、1956.8.27モロッコ、1956.8.27ベネズエラ、1956.9.12スイス、1956.11.7フランス、1956

.12.2チェコ、1956.11.8米国という具合に目撃がみられる。

注目すべきは、目撃報告発信の範囲が地球規模で広く、これらが“氷山の一角”だとしたら、まさにUFOウェーブであったのかも知れない。

日本の場合は、1957年1月に小型の土星型円盤が、横浜にある松村雄亮氏の自宅上空に飛来し、これを松村氏が撮影。新聞にも報道されると共に「日本最初の円盤写真」として海外にも知れ渡った。

スタンフォード兄弟の主張から類推すると、UFO知性はこの頃、地上の人間の行動面、精神面などの調査を行って、自分達の「対地球計画」にとって「地球上で代行任務を果たせる人物」を各国の住民の中から選出し、それぞれに対して接触が行われたのではないかと考える。

選出され、UFO目撃体験から地上に降り立った要員とのコンタクトへと進み、初期的訓練を受けた学力・理解力・心身ともに優秀な若者達が、一同に集められたのが、3年後の1959年7月であったとしたら、人物観察や能力確認を含む準備期間としては充分であっただろう。日本にも、その「一人」がいた、そう考えると、後にCBA幹部の一人が匿名の著書で告白した内容と一致する。

■日本の場合

弧状列島では、その時、第一次円盤ブームの最中であった。しかも、コンタクトを受けた日本人松村雄亮氏は、航空雑誌記者、空飛ぶ円盤研究者として有名人であり、民間団体を率いる指導的立場に立っていた。

CBAが「宇宙とのコンタクト」へと歩み出す経過と、後の混乱と世間からの非難など、過酷な道のりを体験する過程が、日時を追って記録されている冊子『宇宙友好協会(CBA)の歩み』から、宇宙会議の部分のページを紹介する。

日本の事例は「世界中のコンタクト」における氷山の一角と思われるが、世界の「コンタクト」が極秘裏に進められたのに対し、日本の場合は「公報」という団体の使命達成と共に、多くの人に知られるようになり、当然ながら不理解な人々による非難中傷は避けられない道を歩むことになる。

机上で解決を図ろうとする大多数の研究者の中にあって、UFOを実際に目撃し、その経験や実験を積み重ねて、ようやく到達できる理解と信念を持たなければ、到底近づけないという理念で行動するCBAは、通常の科学的知識や常識でしか判断できない多数の人々にとっては「科学の異端」であり、「異常集団」にしか見えなかったであろう。

UFO現象じたい、単に「見たい」という思いだけでは一生かけても見られない性質のものである。「呼びかけ目撃」というテーマでも触れたが、基本的にはUFO知性側にとって、「見せるべき相手」として認められなければならないという難関がある。

CBAは、自分達の遭遇した宇宙とのコンタクトは、重大事件であり、多くの支持者を必要とする、という現実問題から、政、官、財、学界、およびジャーナリズムなどに働きかけ、協力と支持を求めた。その中から、賛助的な態度で協力を申し出た有名人や、深い理解を示す実業家もいた。

CBAの活動が、集会や出版といった活動にとどまらず、海外からの研究者の招聘、日本全国の遺跡調査、そして最終的にはアイヌ聖地復活のピラミッド建設へと続く、新

先きに61年1月、ソ連紙は空飛ぶ円盤は実在しないという内容の記事を全面に掲載したが、その後ソ連側のUFO極秘情報を調査し続けたイタリアのユーフォロジスト、アルベルト・フェノリオ氏が、西欧側を訪れたソ連人に個人面会を行ない、ソ連外交官および技術者をふくむ鉄のカーテンの内側の人々の情報を蒐集した。次に紹介するのは全く驚異的かつソ連らしいダイナミックな円盤事件のあらましである。

☆☆☆

完全な核兵器装備を完了しつつあるソ連の軍需工場・ミサイル基地・原水爆製造所などのあらゆる機関が、今や空飛ぶ円盤の24時間の監視下にあることをソ連当局はよく承知している。そして基地要員・民間パイロットの多くが、大型円盤・火球・超大型母船に遭遇していることが判明した。

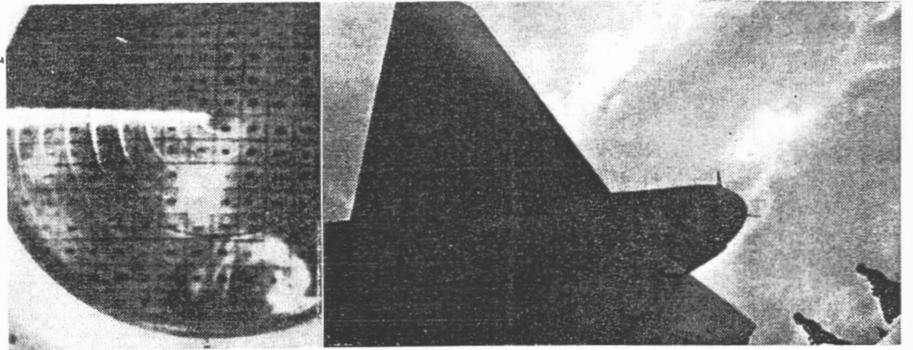
例えば59年春、戦略ミサイル基地司令部のあるスヴェルドロフスクの上空に延々24時間以上も出現し、レーダーおよび基地要員の間に大恐慌をきたしている。

事実、ソ連空軍はこれまで円盤や火球に対して屢々発砲しているが、あるパイロットの場合、彼は大火球群に向けて直進したが、着陸後綿密な調査の結果、彼およびその機体には微傷だに認められなかった。いわば彼の機体を通過させるために火球が膨脹したというわけである。そして機体が通過した後、まるで何事もなかったかのように再び収縮してその火球は飛んで行ったという。そして彼の機銃掃射の間中、火球は明らかに意識的にコントロールされているような飛翔を続け、ジグザグ運動を示した。

色々のデータから推察してみるに、天体、「空飛ぶ円盤」は、航空関係者に特別な関心をもっているごとくである。ソ連民間パイロットの操縦練習生の多くが彼らの基地に着陸するまで驚くべき熱心さで円盤に雁行された経験をもっている。

次に実例を御紹介しよう――。

- ① 1年前イルクーツク附近で4本の脚をもつロケット型の宇宙機が着陸し、近くの研究所の女医によって、同機と2人の乗組員の写真が撮影された。
- ② 凡そ1年前、4人の乗客を乗せた小型郵便機が、中央平原の予定コースを飛行していたところ途中で消息不明になった。2日後、シベリヤのトボルク近くで同機が発見されたがエンジン・ラジオ・郵袋その他は



☆驚くべきソ連の円盤事件!!

完全にもとのままの状態でおかれていた。ガソリンタンクはむこう丸2日間分は貯蔵されていたし、同機から100mの地点に、直径30mの明らかな円が大きく跡づけられており、その部分草はしおれ、土地がへこんでいた。

- ③ 昨年一人の女性パラシューティストが9000mの高度から降下し、彼女を乗せたパイロットは、彼女が降下するのを確認し、先きに着陸して彼女の降下を待機していたが、3日後に帰って来た。彼女の報告によれば、降下の途中彼女は円盤にキャッチされたという。3人の円盤乗員は彼女を地球を見るために遥か彼方の宇宙空間に連れて行った。そして、国家当局へのメッセージを委託したという。同書は地方警察署長に渡されたが、内容は何もいわれなかった。

全世界を瞠目させる 極秘情報

ば、降下の途中彼女は円盤にキャッチされたという。3人の円盤乗員は彼女を地球を見るために遥か彼方の宇宙空間に連れて行った。そして、国家当局へのメッセージを委託したという。同書は地方警察署長に渡されたが、内容は何もいわれなかった。

- ④ 昨年夏、ヴォロネズ市上空で、最小800m全長の巨大葉巻型母船が、白昼高度2000mの高さにまで降下し、数千人の人がそれを目撃、大騒動になった。ところが突如として母船が透明になったかと思うと完全に消えてしまった。やがて戦闘機が現場に現われ、旋回していたが、母船の機影を認めずとしてその困惑したパイロットが立ち去った直後、そのマンモス母船は全く同じ空間に再び姿を現わした。その後、その葉巻型の後尾からもすごい炎を出したと見るや急上昇して視界から見えなくなった。
- ⑤ 昨夏モスクワ北方150kmのリビンスク近くの丘陵にソ連首都防衛のためのロケット砲台が建設されていたが、凡そ20000m上空の大型円盤が夥しい小型円盤をともなって出現

した。恰もミサイル基地を探査するかに見えたが大騒ぎになった同基地から恐らく非公式命令によるものと思われるが、その巨大円盤に向けて一斉射撃が行われた。

ミサイルは発射されたが、目標物から凡そ2Kの空間に弾丸が到着した時、全部爆発してしまった。引続いて第2弾が打込まれたがこれも同じ結果に終わった。しかし第3回目は発射されなかった。というのは、この時、小型円盤群が行動に移った結果ミサイル基地の全ての電気系統の装置が停止してしまった。そして小型円盤群が巨大円盤に帰投するや、再び電気系統の機能が元通り回復した

- ⑥ 数カ月前、ある重戦車工場が突如爆発し、ソ連当局が米国の破壊活動のせいになろうとしたため、あわや世界的危機を早めるかに見えた。しかし夥しい葉巻型や円盤が最近、同工場地域で目撃されている。そして事件当日の夜明け、同工場めがけて落下する火球を認めたものが数人あった。その直後、無数の閃光球体をともなう大爆発が起ったのである。夜明けの薄明りはその爆発閃光によって明るくなり、ものすごい爆風が感じられた。それから数分間、猛烈な塵雲が生じ、破片で同地域がおおわれてしまった。残ったものといえば、石片に埋まった爆発口だけだった。その場所は数分前までは、同工場のある時、特殊部門の建造物があったところである。

その部門では原子砲に使用される特殊自動装置を製造していたもので爆発直後、円盤が一機、数分間、その結果を見とどけるかのように上空に滞空していた。戦闘機が接近すると円盤は消えて行った。ただ最高に不思議なことは、誰一人として傷ついたり死ななかったことだ。爆発の数分前、工場の非常サイレンが鳴り渡り、全員待避壕に入ったのであるが、後日綿密な調査の結果、誰一人としてそのスイッチに触れた者はなかったという。

かった。初めての場所へテレビシリーだけに誘導されて行くのは多少の不安ともなうものであった。しかしそれも杞憂に終わった。すでに顔見知りの宇宙人（渋谷で会ったキャット）を含めて三人の宇宙人が出迎えていたからである。すでに陽は落ちてあたりは薄明であった。街並みはそれだけほど歩いたろうか。全員黙々と足を運ぶ。この時松村の胸中を去来した複雑な気持は誰も理解することができないだろう。やがて真暗な前方に螢光の残光のように薄く光る円盤が、浮かび出るように着陸しているのが望見された。近づいてみると円盤の直径は三十センチくらいで、上部はアダムスキが写真にとった金星型に似ていたが、窓はなく、下部は全体に丸みを帯びていてギヤールは見あたらなかった。側面の一部がポツカリ開くとスルスルと椅子が伸びて来た。うながされて内部に入る。内部は幾つかの部屋に別れているらしく五坪ほどの部屋に招き入れられた。乗員は十二名で、うち一人だけが日本語をじょうずに話した。他は皆英語しか話せなかった。

ちょうどエレベーターが上昇する時のようなかすかなショックを感じたのは、円盤が離陸したためと思われ

である。彼らはみな首から裾まで垂れたガウンをまとい、松村は法廷に立つたごとく緊張した。長老は終始うなづきつつ時々ほほえむだけで、言葉は発しなかった。右端の宇宙人が英語で話しかけた。ここにおける問答はすべて英語で行なわれた。この日の話は三つの要点にしばられる。すなわち、

迫る地球の大変動

一、地球の大変動が極めて近い将来に迫っている。そのため常時地球の観測を行なっているが、その正確な期日は宇宙人にもわからない。あなたはその準備のために選ばれたのである。

二、われわれとしては、将来の地球再建のために一人でも多くの人を他の遊星に避難させたい。

三、決して混乱をまねかないよう慎重にやりなさい。いきなり地球の大変動などという大問題を持ち出さず、かつ最後までそれに關する話ばかりで、あらかじめこちらで用意した質問や円盤の中古品の話などという話し出せる雰囲気ではなかった。地球大変動の話もわれわれの間で話題になっていったとはいえ、遊星間友好の実

た。あとほとんど何も感ぜず、静止しているのと変わりはなかった。十五、六分もたった頃、円盤は母船に到着した。時計を見たけれどもいつの間にかとまってしまっていた。母船内部の円盤発着場から降り立ち、廊下へ出ると、再び地上に降りたのではないかと錯覚するほどであった。それは渋谷か新宿の大通りの観を呈していた。ただ歩いているのが外人ばかり、すれ違っても誰も振り返ろうとしない。三三五五、散歩するごとく、また用事ありげに通ししているのである。この大通りは母船の中央を貫き、長さ二千米はあると思われた。しばらくして、或る一案に案内された。

この部屋はかなり広く百畳はあったろう。通路を歩いたときにも感じたことであるが、照明が見あたらないにもかかわらず、かなりの明るさであった。しいていえば壁全体が光っているのしか考えられなかった。この部屋の半分ほどをしめて半円形にテーブルが並べられ、そこにずらりと宇宙人が腰をおろしている。中央のやや年とった感じの宇宙人が長老である。その正面にテーブルと椅子が一つおかれてあった。松村はその椅子に坐るようにならされた。すべての宇宙人から顔を見られる配置

現という大きな夢の前ではそのしめる度合は二、三割の関心にすぎなかった。それが今や目下の急務として巨大な姿を現わして来たのである。

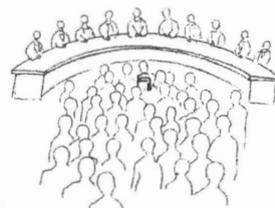
話し合いの間に果物と飲み物が出された。果物は一見さしみに似ており、赤、黄、緑、紫など各色のものが円い皿の上にきれいに並べられていた。コップは上へ順次直角に階段にひろがっている珍しい形であった。グレイプ・ジュース色の液体が入っていた。残念なことに果物には手をつける余裕がなかった。飲物は口に近づけただけで何とも言われない、いい香りがした。山中の出發した地点に送り返されるまで、約七時間地球を離れていた。

筑波山上築二回テレバシー・コンタクト

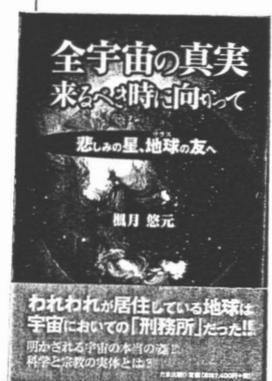
八月一日 筑波山麓にてテレバシー・コンタクト。参加者 松村雄亮、丹下芳之、小川定時、桑田力他一名。サブリーダー 中島（東北放送アナウンサー）

七月二十五日に全国一せいに言われたテレバシー・

■『CBAの歩み』と『全宇宙の真実・来るべき時に向かつて』を参考にして天宮志麻と天宮清が描いた「1959年宇宙会議」の様子。



【1960年8月『CBAの歩み』より】



それによいよ最後の仕上げの時が迫って来た。そこで、宇宙連中はそれらの種子を全世界から集めて、宇宙母船の内蔵へと送られた。これは、「対地球援助計画」に基づいての重要な会議を要するものである。これこそが、観測が言っていた王仏冥三の本当の意味であった。すなわち、地球連の最高責任者「すなわち王」と宇宙連の責任者「すなわち王」との真意、すなわち会合である。

全世界から召集されて、宇宙母船の中へと誘導された約四十数名の人々の中から、再度にわたって選出され、そのヘッドクォーターとして選ばれたその人間こそ、日本に集められていた偉大な「種子」その人であった。

その種子は、宇宙母船内の作戦会議においては、地上軍の指揮官として、世界各国から召集された四十数名の責任者たちに対して、各種の指示を身まられ、そして、今後発生するであろう諸問題に対応するための適切な指示を身まられ、日本において、CBAという研究団体の最高責任者として、それこそ生命を賭して活動されたのであった。

【梶月悠元著『全宇宙の真実・来るべき時に向かつて』より】

それからXは宇宙連合の偉大な方々の集まる円卓会議場のような所に連れられ、ここにXが招かれた目的を告げられたのである。

ここでXが知らされたのは次のような内容であった。

- ① 地球の大変動が近づいている。その時の地球の人々の救出のためにUFOは飛来した。
- ② その日は何時の日かわからない。地球の状態をたえず調査している。
- ③ 地球には核兵器が多量に製造されている。これは地球人の自らの集団自殺行為であり、これに対して救出の手をさしおのべること出来ない。
- ④ 地球を救うのは地球人、自らの意思でなければならぬ。強制した干渉するために後等はやつてきたのではない。果たして地球人は危険な爆弾を自ら製造する意志があるのか。
- ⑤ 地球の来るべき大変動のとき、地球上にいる者はすべて滅亡する。たとえ飛行機に乗って上空にいても助からない理屈底の命である。

【橋野昇一著『日本地名はUFO飛来の記録!』より】



米・ソが、UFO協定!!

UFO党がアメリカで発表!

ホットラインでUFO情報交換! 18年前「核戦争防止協定」で

【ワシントン発 和歌山記者】
もしUFOを核ミサイルと誤認したら、人類は核戦争を回避できないだろう。アメリカとソビエトが18年前、核戦争防止とUFO問題に関する協定書に調印していたことがこのほど明らかになった。米ソ間でUFO情報の交換を約束した当該協定は日本のUFO党独自の調査で発見された。UFOの問題が、両陣営の国際協定という形で発表されたのは、今回が初めてという。この結果、米ソ超大国のUFO問題への関心の深さが改めて露見された。

協定は本物! 国連関係者が同時確認

UFO協定に米ソ署名

一九七一年九月三十日、アメリカのロジャール・國務長官とソ連のグロムイコ外相は、ワシントンにおいて、「核戦争発生時の危険性を減少させる措置に関する協定」に正式調印した。全九条の同協定書の中で、問題の部分は第三および第四條である。

軍事脅威となるUFO

まず第三條において「米ソ両国は、ミサイル警報システムによりUFO(不明飛行体)を発見した場合、またミサイル警報システムと連動したUFOは①軍事上脅威とならない科学的技術的(干渉を受け、両国間で核戦争発生時の危険性が生じた場合、直ちに通告し合わなければならない)として、UFOがUFOであることはCIAやNASAのUFO公文書で確かめられておりまた米空軍のUFO規則(ANAP-146(合同陸海空軍手続)は、UFOを国籍不明機、ミサイルなどと明確に区別している」という。これよりほぼ二年前、米政府は真相を求め、一般国民のために、三点に要約されたUFO見解を公表した。(UFOは①軍事上脅威とならない科学的技術的

ホットライン事件発生

第六條の「緊急情報伝達用・直接通信施設の利用」は、米ソ両国がいわゆるホットラインでUFO事件を報告できる、と規定している。これに關係する出来事が、一九七二年一月二日アメリカで発生した。米国内で侵入したUFOに關し、ソ連大統領はモスクワのソビエト代表とホットラインで米国内で侵入したUFOに關して話した。この話題が新聞に掲載されるや、国防総省は直ちに抹消しに取

【米ソ協定第三條】 <資料 米国政府>

AGREEMENT
ON MEASURES TO REDUCE THE RISK OF OUTBREAK OF NUCLEAR WAR
BETWEEN
THE UNITED STATES OF AMERICA AND
THE UNION OF SOVIET SOCIALIST REPUBLICS

Article 3

The Parties undertake to notify each other immediately in the event of detection by missile warning systems of unidentified objects, or in the event of signs of interference with these systems or with related communications facilities, if such occurrences could create a risk of outbreak of nuclear war between the two countries.

Статья 3

Стороны обязуются немедленно уведомлять друг друга при обнаружении неопознанных объектов системами предупреждения о ракетном нападении или при появлении признаков эми систем или соответствующих средств связи, если такие явления могли бы создать опасность возникновения ядерной войны между двумя странами.

協定無期限の意味

また第八條で協定期間は無期限とされている。契約はなお有効であり、現在も米ソ両国は依然UFO情報の交換を執行しているものとみられる。当協定書を入手したUFO党は、「宇宙軍事大国間のUFO協定は世界各国および人類がそのレベルの認識まで日常感覚を到達させる必要性を訴えている」と述べた。

【平成元年7月23日執行 参議院(比例代表選出)議員選挙公報より】

証言10 その他

- 1. 選挙区別開票結果
- 2. 選挙区別開票結果
- 3. 選挙区別開票結果
- 4. 選挙区別開票結果
- 5. 選挙区別開票結果
- 6. 選挙区別開票結果
- 7. 選挙区別開票結果
- 8. 選挙区別開票結果
- 9. 選挙区別開票結果
- 10. 選挙区別開票結果
- 11. 選挙区別開票結果
- 12. 選挙区別開票結果
- 13. 選挙区別開票結果
- 14. 選挙区別開票結果
- 15. 選挙区別開票結果
- 16. 選挙区別開票結果
- 17. 選挙区別開票結果
- 18. 選挙区別開票結果
- 19. 選挙区別開票結果
- 20. 選挙区別開票結果
- 21. 選挙区別開票結果
- 22. 選挙区別開票結果
- 23. 選挙区別開票結果
- 24. 選挙区別開票結果
- 25. 選挙区別開票結果
- 26. 選挙区別開票結果
- 27. 選挙区別開票結果
- 28. 選挙区別開票結果
- 29. 選挙区別開票結果
- 30. 選挙区別開票結果
- 31. 選挙区別開票結果
- 32. 選挙区別開票結果
- 33. 選挙区別開票結果
- 34. 選挙区別開票結果
- 35. 選挙区別開票結果
- 36. 選挙区別開票結果
- 37. 選挙区別開票結果
- 38. 選挙区別開票結果
- 39. 選挙区別開票結果
- 40. 選挙区別開票結果
- 41. 選挙区別開票結果
- 42. 選挙区別開票結果
- 43. 選挙区別開票結果
- 44. 選挙区別開票結果
- 45. 選挙区別開票結果
- 46. 選挙区別開票結果
- 47. 選挙区別開票結果
- 48. 選挙区別開票結果
- 49. 選挙区別開票結果
- 50. 選挙区別開票結果
- 51. 選挙区別開票結果
- 52. 選挙区別開票結果
- 53. 選挙区別開票結果
- 54. 選挙区別開票結果
- 55. 選挙区別開票結果
- 56. 選挙区別開票結果
- 57. 選挙区別開票結果
- 58. 選挙区別開票結果
- 59. 選挙区別開票結果
- 60. 選挙区別開票結果
- 61. 選挙区別開票結果
- 62. 選挙区別開票結果
- 63. 選挙区別開票結果
- 64. 選挙区別開票結果
- 65. 選挙区別開票結果
- 66. 選挙区別開票結果
- 67. 選挙区別開票結果
- 68. 選挙区別開票結果
- 69. 選挙区別開票結果
- 70. 選挙区別開票結果
- 71. 選挙区別開票結果
- 72. 選挙区別開票結果
- 73. 選挙区別開票結果
- 74. 選挙区別開票結果
- 75. 選挙区別開票結果
- 76. 選挙区別開票結果
- 77. 選挙区別開票結果
- 78. 選挙区別開票結果
- 79. 選挙区別開票結果
- 80. 選挙区別開票結果
- 81. 選挙区別開票結果
- 82. 選挙区別開票結果
- 83. 選挙区別開票結果
- 84. 選挙区別開票結果
- 85. 選挙区別開票結果
- 86. 選挙区別開票結果
- 87. 選挙区別開票結果
- 88. 選挙区別開票結果
- 89. 選挙区別開票結果
- 90. 選挙区別開票結果
- 91. 選挙区別開票結果
- 92. 選挙区別開票結果
- 93. 選挙区別開票結果
- 94. 選挙区別開票結果
- 95. 選挙区別開票結果
- 96. 選挙区別開票結果
- 97. 選挙区別開票結果
- 98. 選挙区別開票結果
- 99. 選挙区別開票結果
- 100. 選挙区別開票結果

【弘原海清著『前兆証言1519』より】

■阪神淡路大地震発生前、編者の知人の家でも「テレビの電源が勝手に入る」という異常が発生した。この表でも55に「消したテレビがついている」とある。家庭用の電気器具なら問題は軽いかも知れないが、兵器の誤作動は軽くない。

【エメ・ミシェル著・後藤忠訳『UFOとその行動』より】

当面の問題としては、国際的にUFO目撃報告を承認出来る組織を作る必要がある。事態は人類にとって正に重大である! 限られた手段しか持たないエメ・ミシェルのような民間の研究者が、これらの客観を担当する時代はすでに過ぎた。今や各国の政府がこの問題の解決に協力する必要がある。これら客観を担当する時代は、最近ソビエト政府が国連の安全保障理事会に提案したように、UFOを敵の大陸間ミサイルと誤認することにより、感性的な戦争に突入する息を吐けるために、UFO問題を真剣に検討すべき時期がすでに到来しているからである。

これらUFOを自由に操るのとはどんな生物であろうか? そしてどのような科学的手段が用いられているのだろうか? これらの疑問に対し、現在我々が正しい解答を与えることは不可能である。従って当面の間我々は幾つかの仮説で満足せねばならない。

真実を追究する先駆者は常に多くの苦しみを経験する運命にあった。しかしいつかは彼等が正しく評価される時が来るはずである。エメ・ミシェルは当面は公式に認められないような困難な道を選んだ。我々は彼の努力を無駄にはしない! 我々は彼の思想を明確に理解し、我々の未来を決定するかも知れない現実を正しく認識することが極めて重要である。

かかる理由により、私はこの本がすべての図書館に購置されることを希望する。サン・エヴルモンは言った。「我々にとって本質的に重要なことは、物事を正しく判断し得る見識を持ち、自己に純粋な光明を与えるべく努力することである。」

一九五八年四月一三日
NATO所属中央ヨーロッパ空軍防衛本部参謀司令官
大尉L・M・シャサン

米国ネバダ州で行われた核実験と米国内で報告された UFO 事例の関係

桑原 恭男

Relationship between Reported UFO Events in the United States and Nuclear Tests in Nevada.

ニューハンプシャー州ボウ、サンリバー研究所のドナルド・A・ジョンソン博士の論文、“Do Nuclear Facilities Attract UFOs?” (核施設は UFO を引きつけるのか?) では、核施設のある郡と、人口数が同規模で核施設がない郡で、UFO 報告数および近距離遭遇 (CE) 数に差があるかどうかを調査している¹⁾。

それによると、UFO 報告および CE とも、核施設がある郡の方が 1.44 倍多いことがわかった。郡の人口の規模が小さいほど、その比率は拡大し、人口 5 万人未満の郡では、報告数で 2.06 倍、CE で 1.69 倍となる。そして、ジョンソン博士は、UFO の背後に核兵器や核動力に関心を示す知性体が存在する可能性を示唆している。

それでは、核実験と UFO の出現には関係があるのだろうか。

UFO データベースの UFOCAT2005²⁾ にはネバダでの核実験時に現場で起きた UFO 事例として次の 3 例が記録されている³⁾。

- ・ 1951 年 10 月 30 日。原爆実験の 3 時間後、高々度をプロペラ型の物体が高速で飛行、上空を数秒で通過。
- ・ 1952 年 4 月 15 日。原爆実験が行われた直後、原子雲の中を 4 ~ 6 個の円盤型飛行物体が通過。
- ・ 1952 年 4 月 22 日。核実験の 20 分前、銀色の楕円形物体 2 個が実験場上空 600m を飛行、さらに複数の物体が出現。

この論文では、これらの事例のような核実験場での目撃に限らず、核実験が行われた日に米国全土 (ハワイを除く) で “報告された UFO 事例” (以後単に UFO 事例と表記) の増加が見られるかどうかを統計的に調査した。ジョンソン博士の論文は地理的な相関の調査であったが、この論文は時間的な相関の調査である。調査期間は 1951 ~ 1990 年、調査したのは次の 2 点である。

表 1. ネバダ州での年間の核実験日数と全米および 10 州での UFO 事例数。

年	実験日数	UFO 事例数 全米	10 州
1951	12	346	85
1952	8	1752	381
1953	11	616	141
1954	0	932	275
1955	16	936	253
1956	1	1136	337
1957	30	1556	400
1958	26	775	239
1959	0	546	154
1960	0	715	228
1961	9	704	223
1962	56	505	208
1963	33	497	222
1964	40	725	261
1965	34	1413	529
1966	44	1968	832
1967	37	2890	1156
1968	47	1212	520
1969	31	884	300
1970	29	355	107
1971	19	370	142
1972	22	630	234
1973	18	2245	715
1974	21	1046	286
1975	20	1427	348
1976	17	758	171
1977	17	491	135
1978	16	751	195
1979	15	279	55
1980	13	204	38
1981	16	393	73
1982	15	174	56
1983	16	128	72
1984	17	159	78
1985	15	79	23
1986	14	240	73
1987	14	232	45
1988	14	334	89
1989	11	380	102
1990	8	241	43
計	782	31024	9824

・年間の UFO 事例発生数と年間の核実験日数の相関 (核実験の多い年ほど UFO 事例が多いのではないかと、という予想の検証)。

・ネバダ州での核実験日における米国内での UFO 事例数と、核実験が行われなかった日の UFO 事例数の比較 (核実験日に UFO 事例が集中しているのではないかと、という予想の検証)。

使用したデータ

UFO 事例のデータは UFOCAT2005 を使用した。ネバダ州での核実験の日付については、ウェブサイト “Federation of American Scientists” 内の “United States Nuclear Tests July 1945

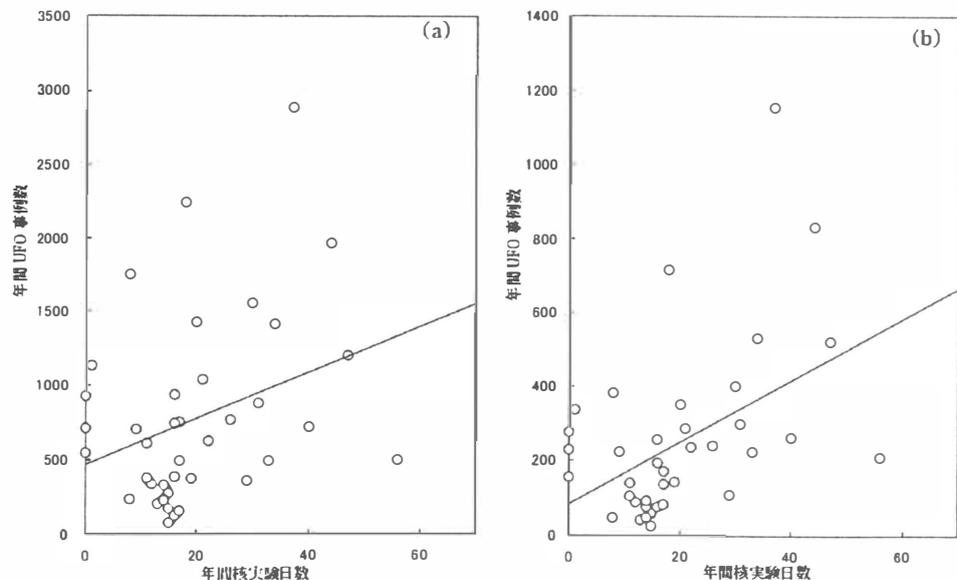


図 1. ネバダ州での 1951 年 ~ 1990 年の各年の核実験日数と UFO 事例数の関係。a は全米 (相関係数 0.32)、b は 10 州 (相関係数 0.46) を対象にしている。直線は最小二乗法により描いた回帰直線。二つの項目の相関が強いほど直線付近にデータが集中し、相関係数が 1 に近づく。

through September 1992, DOE/NV-209 (Rev. 14), December 1994⁴⁾のデータを使用した。核実験のデータはグリニッジ標準時となっているが、UFOCATのデータの日付はそれ以外に現地標準時等も含まれているため、それらをグリニッジ標準時に変換した。幅のある時間帯表記 (Daytime, Afternoon, Midnight 等) の場合はその時間帯の中央の時刻を用いた。

結果と考察

ネバダ州での1951年～1990年の各年の核実験日数と、全米および特定の10州 (後述) のUFO事例数を表1に、それらの散布図を図1に示す。これらの図からは年間の核実験の日数とUFO事例数の間には相関があるように思われる。

表2に、1951年～1990年の期間の、米国各州の全UFO事例数と、ネバダ州で核実験が行われた日に限った米国各州のUFO事例数を示す。その40年間を日数に換算すると14,610日であり、そのうちネバダ州で核実験が行われているのは782日である。UFO事例がランダムに発生した場合、核実験日にUFO事例が発生する確率は782/14,610 (=5.35%)となり、それを全UFO事例数に乗算すれば核実験日に発生するUFO事例数の理論期待値が求まる。表2の“a/b”というのは、実際のUFO事例数と期待値の比である。一番下の各州の合計 (全米) の場合、この数値が1.20になっているが、これは、実際の核実験日のUFO事例数が理論的に予想される値の1.20倍の頻度で発生している、ということである。

この頻度が偶然によるものなのか (A. 核実験日とUFO事例には相関がない)、核実験日にUFO事例が集中する傾向があるのか (B. 核実験日とUFO事例には相関がある) を調べるために、仮説検定を行った。ここでの帰無仮説は上記Aであり、対立仮説がBである。観測結果がどのくらいの確率 (p値) で起きることなのかを計算し、設定した有意水準と呼ばれる基準 (ここでは1%とする) より小さければ、観測結果は有意と見なされ、帰無仮説Aが棄却、対立仮説Bが受け入れられることになる。

この確率の計算は表計算ソフト・エクセルで二項分布の統計関数を用いて行った。その結果が表2のp値である。全米の場合、p値は0.00%なので、帰無仮説Aは棄却され、対立仮説Bすなわち「核実験日とUFO目撃には相関がある」が受け入れられた。図1bで使ったのは有意水準の1%よりp値の小さい10州である。

次にカイ二乗検定という方法で、上記の帰無仮説、対立仮説を検定した (有意水準1%)。この場合、前回とは異なり、UFO事例数ではなくUFO事例が発生した日数を使う (同じ日に複数の事例が発生することもあるので、UFO事例発生日数はUFO事例数より小さい値となる)。14,610日をUFO事例の有無、核実験の有無でクロス集計したものを表3 (全米) に示す。2×2のクロス集計の場合、自由度1のカイ二乗分布を使う。自由度1のカイ二乗分布において、有意水準1%点は6.63であり、これより大きな値が棄却域となる。表3のクロス集計表から計算した検定統計量は13.09なので、この検定でも帰無仮説Aは棄却され、対立仮説Bすなわち「核実験日とUFO目撃には相関がある」が受け入れられた。

同様の計算を各州ごとに行ったものを表4に示す。p値が1%以下の7つの州はすべて表2の1%以下の州と共通している。

核実験日とUFO目撃の相関の特に高い表2の10州の、全米地図上での位置を図2に示す。特定の地域への偏りが見られる。

次に考えられる相関の原因を検証する。UFO事例の発生が人間の活動に関連している場合、特定の曜日に集中する可能性がある。核実験は特定の曜日に集中しているであろう。どちらも曜日に対して同じような偏りが見られた場合、直接的因果関係はなくても相関が見られる可能性がある。

それで、核実験日とUFO事例発生日を曜日ごとに集計した (表5)。核実験日の72%が水～金曜日に集中していたので、曜日を水～金と土～火に分けた。1曜日あたりの実験日数を比較すると前者が後者の3.43倍、UFO事例数の方は1.11倍と水～金に集中する傾向があるようである (表6)。ところが、核実験日におけるUFO事例

表2. 米国各州の全UFO目撃事例数とネバダ州で核実験が行われた日に限った米国各州のUFO事例数の関係 (1951年～1990年)。核実験場のあるネバダ州で核実験日に期待値の2.4倍のUFO事例が発生している。右上の表は核実験日にUFO事例が発生する理論確率。右下の表は州の略号の説明。

	全UFO事例数	実験日事例数 (a)	期待値 (b)	a/b	p値	全日数	
						核実験日数	14610
						782	5.35%
実験日UFO事例発生率							

AK	Alaska
AL	Alabama
AR	Arkansas
AZ	Arizona
CA	California
CO	Colorado
CT	Connecticut
DC	District of Columbia
DE	Delaware
FL	Florida
GA	Georgia
IA	Iowa
ID	Idaho
IL	Illinois
IN	Indiana
KS	Kansas
KY	Kentucky
LA	Louisiana
MA	Massachusetts
MD	Maryland
ME	Maine
MI	Michigan
MN	Minnesota
MO	Missouri
MS	Mississippi
MT	Montana
NC	North Carolina
ND	North Dakota
NE	Nebraska
NH	New Hampshire
NJ	New Jersey
NM	New Mexico
NV	Nevada
NY	New York
OH	Ohio
OK	Oklahoma
OR	Oregon
PA	Pennsylvania
RI	Rhode Island
SC	South Carolina
SD	South Dakota
TN	Tennessee
TX	Texas
US	United States
UT	Utah
VA	Virginia
VT	Vermont
WA	Washington
WI	Wisconsin
WV	West Virginia
WY	Wyoming



図2. 米国各州の全 UFO 目撃事例数とネバダ州で核実験が行われた日の米国各州の UFO 事例数の相関が大きかった 10 州 (グレーの領域).

数から計算した p 値を比較すると、どちらも 0.00% で両者に差はなかった。よって全体の p 値の低下は、目撃および核実験日が特定の曜日に偏ったためではない。

結論

この調査でわかったことは次の 3 点である。

核実験が多い年ほど、UFO 事例が多い傾向が見られた。

核実験が行われた日に、UFO 事例が集中する傾向が見られた。

特にその傾向の強い州の地理的な分布に偏りが見られた。

註

1. <http://www.nicap.org/ncp/ncp-johnson1.htm>

ジョンソン博士は以下の核施設での UFO 目撃を取り上げている。1948 年 12 月 (ロスアラモス), 1950 年 12 月 (オークリッジ), 1952 年 7 月 (ハンフォード AEC [原子力委員会施設], サバナナリバー AEC, ロスアラモス), 1965 年 8 月 (ワイオミング州シャイアン近くのウォーレン空軍基地), 1967 年 3 月 (マイノット空軍基地, マルムストロム空軍基地, ロスアラモス), 1968 年 8 月 (サウスダコタ州エルスワース空軍基地), 1975 年 10 月 27 日 ~ 11 月 10 日 (メイン州北部のローリング空軍基地, ミシガン州ワートスミス空軍基地, ノースダコタ州グランドフォークス空軍基地, マイノット空軍基地, モンタナ州マルムストロム空軍基地), 1980 年 8 月 (ウォーレン空軍基地, サンディア研究所, ニューメキシコ州カートランド空軍基地), 1980 年 12 月 (イギリス, サフォーク州セントウォータース空軍基地), 1991 年 10 月 (ウクライナ, チェルノブイリ, ロシア, アルハンゲリスクミサイル基地)。さらに 1986 年のチェルノブイリ核惨事の際にも UFO が出現、火災が発生した第 4 原子炉に光線を照射、それにより放射線のレベルが 3,000 ミリレントゲン/時から 800 ミリレントゲン/時に低下したという。それに関する引用文献は Stonewell, Paul (1998). The Soviet UFO Files. New York: Quadrillion Publishing, pp. 68-69.

2. 約 18 万のレコードからなる世界最大の UFO データベース。以下のサイトから購入可能。

The J. Allen Hynek Center for UFO Studies (CUFOS) の注文ページ

<http://www.cufos.org/pubform.pdf>

3. これらはすべてネバダ実験場ユッカ平原 (エリア 51 に隣接) での、航空機から投下した Mk-4 原子爆弾 (長崎に投下された Mk-3 原爆改良の初の生産型原爆) の空中爆発実験である。
4. <http://www.fas.org/nuke/guide/usa/nuclear/usnuctests.htm> の "Chronological Section" にある PDF ファイル, "United States Nuclear Tests - By Date".

表 3. 全米を対象とした核実験と UFO 事例のクロス集計。

	実験日	非実験日	計
UFO 事例有	564	9103	9667
UFO 事例無	218	4725	4943
計	782	13828	14610

検定統計量 13.091

表 4. 各州を対象とした核実験と UFO 事例のクロス集計。

	実験日 UFO 事例有	非実験日 UFO 事例有	全日数 UFO 事例有	実験日 UFO 事例無	非実験日 UFO 事例無	全日数 UFO 事例無	検定 統計量	p 値
UT	24	160	184	758	13668	14426	21.758	0.00%
NV	21	153	174	761	13675	14436	15.681	0.01%
OH	122	1603	1725	660	12225	12885	11.422	0.07%
IL	69	830	899	713	12998	13711	10.201	0.14%
NY	89	1127	1216	693	12701	13394	10.126	0.15%
AR	23	209	232	759	13619	14378	9.682	0.19%
WV	20	194	214	762	13634	14396	6.836	0.89%
MA	51	654	705	731	13174	13905	5.176	2.29%
NE	19	197	216	763	13631	14394	5.133	2.35%
PA	83	1156	1239	699	12672	13371	4.845	2.77%
CT	32	381	413	750	13447	14197	4.815	2.82%
CO	40	499	539	742	13329	14071	4.727	2.97%
LA	19	202	221	763	13626	14389	4.664	3.08%
NJ	43	561	604	739	13267	14006	3.882	4.88%
MI	51	684	735	731	13144	13875	3.844	4.99%
VT	7	63	70	775	13765	14540	2.999	8.33%
NTI	19	224	243	763	13604	14367	2.967	8.50%
IA	23	282	305	759	13546	14305	2.945	8.61%
KS	22	284	306	760	13544	14304	2.082	14.90%
MN	16	402	418	766	13426	14192	1.975	15.99%
FL	60	887	947	722	12941	13663	1.933	16.45%
IN	43	632	675	739	13196	13935	1.447	22.90%
TN	19	261	280	763	13567	14330	1.157	28.20%
TX	44	899	943	738	12929	13667	0.938	33.28%
ME	15	210	225	767	13618	14385	0.779	37.74%
WA	42	661	703	740	13167	13907	0.564	45.27%
NC	22	456	478	760	13372	14132	0.549	45.89%
OR	26	397	423	756	13431	14187	0.542	46.15%
NM	26	410	436	756	13418	14174	0.331	56.51%
MD	23	361	384	759	13467	14226	0.316	57.40%
SC	13	196	209	769	13632	14401	0.315	57.46%
VA	31	497	528	751	13331	14082	0.291	58.96%
RI	3	72	75	779	13756	14535	0.272	60.19%
AZ	22	350	372	760	13478	14238	0.238	62.60%
MS	12	185	197	770	13643	14413	0.215	64.27%
WI	38	623	661	744	13205	13949	0.215	64.31%
CA	108	1986	2094	674	11842	12516	0.183	66.86%
OK	18	288	306	764	13540	14304	0.173	67.73%
GA	16	311	327	766	13517	14283	0.139	70.89%
MO	42	701	743	740	13127	13867	0.139	70.30%
KY	16	267	283	766	13561	14327	0.052	82.02%
DC	7	134	141	775	13694	14469	0.042	83.70%
ND	8	152	160	774	13676	14450	0.040	84.21%
ID	7	115	122	775	13713	14488	0.036	84.94%
AL	12	224	236	770	13604	14374	0.034	85.38%
SD	7	118	125	775	13710	14485	0.015	90.17%
DE	4	68	72	778	13760	14538	0.006	93.88%
US	8	138	146	774	13690	14464	0.005	94.54%
WY	7	121	128	775	13707	14482	0.003	95.32%
AK	10	174	184	772	13654	14426	0.002	96.02%
MT	11	197	208	771	13631	14402	0.002	96.70%
全米	564	9103	9667	218	4725	4943	13.091	0.03%

表 5. 各曜日の核実験日数, UFO 事例数。

	全日数	実験 日数	比率 (%)	UFO 事例数	比率 (%)	実験日 の事例
日	2087	19	2.4	4061	13.1	40
月	2088	36	4.6	4402	14.2	126
火	2087	96	12.3	4473	14.4	247
水	2087	164	21.0	4750	15.3	381
木	2087	229	29.3	4708	15.2	504
金	2087	170	21.7	4611	14.9	530
土	2087	68	8.7	4019	13.0	168
計	14610	782	100.0	31024	100.0	1996

表 6. 表 2 の全米の部分の土~火, 水~金の比較。

	日数	実験 日数	平均 比率 (%)	事例数	平均 比率 (%)	実験日の 期待値 (a)	期待値 (b)	a/b	p 値
土~火	8349	219	7.0	16955	13.7	581	444.7	1.31	0.00%
水~金	6261	563	24.0	14069	15.1	1415	1265.1	1.12	0.00%

Nuclear Historical Correlative Research

by Robert Duvall

Do UFO respond to our political will in the arena of nuclear weapons? It is inevitable to compare the onset of prolific UFO activity of the last 60 or so years to our acquiring nuclear weapons capability. In making that comparison it is essential to realize the possibility that an historical relationship could exist, and to at least perform a study to make that determination. This paper's primary goal is the introduction of the historical correlative concept and represents a small sample of such a study. This paper also provides topic organizational structure allowing the data to be collected in a fashion that is easily applied to historical research. Although much progress has been made towards firming this approach, not all topics have received correlative attention as of this writing.

Why choose military sighting data? The significance of military sightings is imbedded in the high quality of the observation and documentation, the consistency of the types of activity, and most important, the notice taken by the chain of command. Engaging the military of a state is the most direct way of getting attention – all the way to the top. It is apparent that direct contact with leaders of states today is rare or probably nonexistent. Any sighting at or near to a state's capital should therefore be treated as extremely significant. Most normal UFO activity occurs in fashions not meant to attract attention, such as in the guise of night or in remote areas, or so brief in length as to make it nearly impossible to ascertain anything from the sighting. When discovered, UFO usually end any observation by leaving quickly. Yet military engagement is direct, specific in type and location, often having duration indicating the intent to acquire full attention. Repetition of specific activities related to military could very well be attempts to relate or demonstrate clear superiority, concern over policy/decisions, and, with the more aggressive activity, a conveyance of warnings. That cannot be ignored as a distinct possibility. This is the case with UFO activity related directly to nuclear technology, weaponry and the associated political prowess.

What does this have to do with a possible historical relationship? Evidence supports this relationship. The location and the timing of many of these sightings are coincident with historical events within the related realm, whether that is conventional conflict or specific aspects of nuclear policy and militarization. This does not apply just to the US. There is much to be learned by applying an orderly study of this relationship both in conventional military conflict and nuclear militarization globally.

Introducing this historical relational concept in a convincing manner to the general populace would require a fairly extensive set of consistent examples. When looking at the complex history of the last 60 years, the task becomes daunting. However, setting specific categories and building examples for each with consideration of pertinent global military actions helps simplify this significantly. The separation between "conventional" and "nuclear" strategy/decisions during the various conflicts must be maintained at all times. The "conventional" military actions have related UFO activities which likely carry with them an agenda differing from that of "nuclear" related UFO activities.

While the results from each category may not stand firm statistically, applied together the composition with their patterns of behavior become more revealing. Over time a sense is acquired of the types of nuclear related policies/decisions/events and the kinds/timing of UFO activity these elicit.

Loren Gross has written about the Berlin crisis of 1948 in an historical relational manner (NCP-01: Some Early Patterns). There are many more nuclear historical manifestations to draw from. Although we lay claim to being the first to detonate atomic weapons, the events that we are studying here in the US are not peculiar to the US - Britain, France, the former Soviet Union (and now, Russia), China, Israel, Pakistan, India, and probably South Africa, all likely have had similar types of activity. The focus of this study has only included the first five. Of those, China and France have yielded little information thus far.

Actions of UFO related to nuclear technology and its utilization border on predictable.

The following list represents known categories for UFO event/nuclear historical correlative study:

*** Weapons Development and Manufacture** Atomic and thermonuclear - research facilities (Los Alamos, Sandia Labs, Lawrence Livermore) and other developmental locations.

This category seems straight-forward in that sightings at these locations could be related to activity at these facilities at the time of the sighting. It could even be as simple as status checks or demonstrating concern through repeated presence at facilities. More study is needed in this category to determine if any historical significance exists in these incursions.

*** Fuel Processing Facilities** (initially Oak Ridge Tennessee then Hanford Washington -in my backyard). Hanford was the second facility built to support the Manhattan Project. The fuel for the weapons used in Japan came from this facility. It would be an obvious target for surveillance and demonstration. An event occurred at this facility on or around the date of the Trinity Test.

Hanford, WA: Radar picked up a fast moving oval object the size of three aircraft carriers side by side which then began to hover over N-Plant at 65,000 ft altitude. Six F6F's were scrambled to the object but reached a maximum altitude of 42,000 ft, 5,000 ft above the rated ceiling of the F6F. The pilots were forced to go back as their engines began to fail and fuel became dangerously low. The object then disappeared as quickly as it came. At least twenty minutes elapsed during the event. The object was described as "very streamlined like a stretched-out egg and pinkish in color" and emitting vapor from the outer edges. The date of the occurrence was described by Rolan Powell, one of the pilots, as "six weeks before the Japanese surrendered aboard the Battleship Missouri in Tokyo Bay on September 2, 1945." This places the sighting in the middle of July. Living On The Edge: An American war hero's daring feats as a navy fighter pilot, civilian test pilot, and CIA mercenary by Byron D. Varner, privately published. Also interviews with the author and principal, Rolan D. Powell by Walt Andrus.

Thanks to Francis Ridge – NICAP Web Site.

Long duration sightings at or near these facilities close to such important dates can interpreted as demonstrations. The timing of these demonstrations often occur about significant atomic/nuclear related events. Do they want our leaders to be cognizant of these incursions and their importance? It is as if they are applying pressure. The sighting over the Oak Ridge facility September 18 of 1944 occurred on the same day as the Hyde Park Accord, a secret accord between the US and Britain [F. D. Roosevelt and W. Churchill] deciding atomic bombing of Japan. There are many events that have occurred over the weapons material manufacturing facilities and much opportunity to learn the historical significance.

A side note:

In a search for information relating UFO to Hanford, documents relating to the cleanup efforts at Hanford turned up with information on a waste dump area officially titled "UFO Landing Area." It is in one of the oldest dump areas of the reservation and adjacent to the main security facilities. It appears, based on another person's review of recent aerial photos, that the cleanup is complete at that location. That was an interesting find. The titles of these various cleanup areas do not show a theme of humor or sarcasm. The underground plume of contaminants at the reservation is slowly working its way toward the Columbia River. At this time, there is not much we can do to halt this progression.

*** Weapons Testing**— have test dates and locations, Space Tests-EMP
Moon N-test? (US, Britain, France and Russia)

It is likely that appearances were made at a majority of the tests. There is film footage from the DoD that looks suspiciously like a UFO applying surveillance during a test. Many of these tests are available on video.

Some of these tests were demonstrations themselves for the sake of applying pressure to the former USSR. These would be likely candidates for demonstration activity from the UFO.

One test in particular that either was or wasn't attempted, was a demonstration test that was slated to occur on the Moon. There are two accounts – one that says the Air Force shut the project down and another that says it was launched, intercepted and destroyed by UFO.

Tests did actually take place in space, however, in 1958 and again in 1962 after the test moratorium was over. These were executed to realize the results of ionizing the Van Allen belt with radiation. As it turned out in a test from Johnston Island, radar, radio communications and power were all knocked out in a large area. This EMP (electro-magnetic pulse) affect is known to be a useful tool in knocking out the enemies' ability to retaliate. The possibility of an enemy's use of EMP has become an important driver in having missile defense capability. Another attempted test on Johnston resulted in destruction of the rocket on the pad and resulting plutonium contamination of a large area around the launch facility. Deaths have been attributed to exposure following the accident.

Its unimaginable that we would have continued to get away with sending these weapons into space. Between the US and the USSR there were at least 20 tests. These were cut off due to the danger posed to space assets, astronauts and cosmonauts, and the population as a whole (not to mention UFO). An Outer Space Treaty was drawn up in response to keep nuclear weapons out of space for detonation or targeting from space. There is a good video called "Nukes in Space" (Peter Kuran – Goldhil Home Media International) and more information on the space tests available on the Internet.

Delivery of fissile materials via naval vessel for these tests had UFO fly-overs. It is also likely the USS Indianapolis and its ill-fated mission delivering the fissile material unescorted for the Hiroshima and Nagasaki bombings had visits by UFO. There are survivors from that sinking, but It seems unjustifiable interviewing them about possible sightings during their voyage after hearing their personal accounts of the hell they lived through.

*** Rocket/Missile Development**(White Sands, Australia, Russia).

It would be consistent for UFO to monitor rocket development both as future delivery vehicles for nuclear weapons and for our space purposes. Accounts exist to support this observation. Further work is needed to provide examples.

*** Nuclear Threat or Standoff Conditions**dates of US decisions or military command recommendations to pursue the use of nuclear weapons during various conflicts and standoffs.

It is this category that would include incursions over Washington D.C. and other capitals throughout the world. There are many examples to draw from. The demonstrations in these instances would be more bold, pointed at leadership and persistent in duration. The 1952 flap holds many secrets. At that time we were in the midst of the Korean war, were on schedule with development of the hydrogen bomb, had many complex issues to consider regarding the Soviets with their nuclear weapons development and China. China's involvement in the Korean War had pushed our military command towards recommending the use of atomic weapons at least once. This instance had taken place in the first months of 1951. In 1952 we had new developments involving China over the situation in the Indo-China region. China was once again aiding in a growing conflict that would eventually oust the French colonial government and persist to become the Vietnam War. An article researched and printed in a prominent Japanese newspaper Asahi on September 16, 1984, states that according to documents retrieved through the FOIA, on July 16, 1952, the joint chiefs made the recommendation to take

on China utilizing atomic weapons. Excerpts from the article as translated to English:

“The United States Department of State announced on the 14th [September, 1984] that in its diplomatic documents, the United States Armed Forces were concerned with the French gradually losing in its frontline battle in the Indo-China War. The United States was contemplating cutting resources to the League for Vietnamese independence (The Vietnamese army led by Ho Chi Minh), and to use nuclear weapons against China to prevent their descending south.

It is known from the diplomatic documents released last year [1983], that nuclear weapons considered for use against China by the United States when entering the Korean War. But this is the first time that the consideration for the use of nuclear weapons in the first Indo-China war was made public.

According to those documents, the first time that a nuclear strike against China was considered, was on January 11, 1952 at the conference held by military representatives from the United States, France, and England. Chairman Bradley of the Joint Chiefs of Staffs. He suggested that, in order to halt the southern advance of China in the Indo-China war, they warn China about the use of nuclear weapons as being one of their options. But, telling the method that they would use in a retaliatory attack was considered unwise, and the suggestion was dropped.

In the same year, on July 16, at the strategic military conference held by the Department of State and the Joint Chiefs of Staff, Chairman Bradley stated that it would be difficult to halt the southern advance of China without paralyzing their transportation systems with nuclear weapons. It is not known at this time what the view of President Truman was concerning this topic.”

There is evidence to support that strong connections exist between political/military considerations of the use of nuclear weapons and the appearance of UFO at the capitol or other important government facilities. Of the conflicts since WWII, the Vietnam War has provided the largest number of nuclear scenarios beginning in 1949, when the Chinese began supplying arms to Ho Chi Minh. Certainly all of the nuclear threats and standoffs have to be studied to look for consistent patterns before passing judgement on the 1952 D.C. correlation indicated above.

*** Deployment of Nuclear Bomber and Missile Wings** (US and overseas, increased activity as a result of. (over bombers on alert status, weapons storage, harassing bombers on training missions, etc...)) (most US locations were bases left over from WWII).

Deployment historical documents for the US and overseas are being utilized. Although this category is not documented yet, many examples have been collected over the years to suggest that correlation of activity with deployment is a sure thing. This will be backed with data as this effort continues. The primary purpose of covering this topic is to indicate a strong statistical relationship. If UFO are truly interested in and concerned over our nuclear components as the evidence supports, this would in itself be the motivation for the different incursions over these bases. Monitoring weapon types, movement and deployment would surely be the activities they would engage in. Another aspect this topic uncovers is the treatment generally of our military planes. UFO tend to engage our military aircraft directly and boldly.

*** Nuclear False Alerts** (bomber fleet attacks or missile launches indicated by early warning radar installations or satellites-occurring in the US or USSR (with consideration of specific nuclear related action or deployment by a country, increasing political tensions).

This is one hot topic. Of course there have been many false alerts that were of our own accord, whether equipment malfunction, inadequate equipment design, or technology infancy. Then there are some that probably fall completely out of our hands, and its interesting to note what was going on when these occurred. As an example, in the mid 1970's, European NATO countries were reformulating defense policy. It made little sense to have large numbers of ground troops in the face of a nuclear threat from the USSR. What really made sense both economically and strategically, was to have Eastern Europe defended by a theater of medium range nuclear tipped missiles. The only problem was that the location of the missiles only gave Moscow six minutes response time. Comparing that with what the US had left a clear imbalance. Deployment of the Pershing II missiles began in the early eighties. Many articles about false alerts during this period indicate the number of false alerts through 1985 is surely in the thousands. This is difficult to verify. Equally difficult to verify is the source of these alerts. There are the same few explanations repeated over and over. While this accounts for a few, what of the rest? The true depth of the issue of false nuclear alerts is not explored or exposed for reasons likely having to do with public confidence. If UFO have had a role in keeping our defense apparatus off balance with these staged scenarios, who in the defense department would ever admit this?

Going back to December of 1950, about a year after Russia had detonated its first atomic bomb, we had an alert that looked like Russian bombers headed towards our Northeastern coast. This was probably our first alert. The bombers faded out on the radar screens before any detrimental action was taken. Its interesting to note that a year after the first detonation would have provided the Russians enough time to assemble the weapons and to get the bombers ready for the task.

This is a difficult topic to get good data on. But it would be consistent that UFO would engage the US and the Soviets in such a fashion. If anyone reading this is aware of examples, please pass them along.

*** Missile Wing Interference** (nondestructive and limited scope demonstrations/warnings) -with missile launch readiness or missile trajectory change, or with test launches curtailing dummy warhead trajectory, all demonstrating highly advanced capability we are unable to anticipate and design to. (Both US and USSR. What else do they have up their sleeve?)

At some point we passed the line separating the possibility and the probability of utilizing ICBM weapons. This is a discussion worth engaging in because it will likely reveal that military and political will somehow changed in the early 1960's to elicit the bold UFO activity experienced at the various missile bases. It is no secret to most individuals who have read the various publications discussing military related UFO activity that launch capability of limited numbers of missiles were taken offline on a few occasions, and that launch coordinates were altered at least once.

There was also a test launch of an Atlas ICBM with a dummy warhead out over the Pacific in September of 1964 (Deliberate Deception: The Big Sur UFO Filming – Bob Jacobs). This test was filmed and, upon review of the film, officials in the airforce found a disk entering into the frames, circling the warhead, shooting a laser like beam at four separate locations on the warhead, and exiting the frames. The dummy warhead then tumbled out of its trajectory. There are many other instances including an individual silo in Russia where the controls indicated to the operator for a harrowing 15 seconds that the launch sequence was initiated and the missile was about to launch. A massive UFO hovered outside of the silo control facility. The top officials were aware of this event. Why did these kinds of activity occur? One assessment is that we were being shown a superior capability. For what purpose? Here are some possible reasons:

Indicating to our military command that we do not have the control over these assets that would have to be in place in order to utilize them.

Allowing that we may not know whether our equipment is malfunctioning or that the source is external.

Allowing that in a real scenario, we will not have certainty that interference wouldn't occur again.

Uncertainty seems to play an important role. With thousands of nuclear weapons ready to go at any time and with the predictions of the outcome uncertainty has no place. No permanent damage was incurred by these activities and our national security was minimally compromised. The people at the top were well aware of these events.

*** Nuclear Military Exercises**(US and joint).

This is another category that is worth filling in with some research. If pressure was being applied using these other areas for demonstration, likely nuclear exercises would have had them as well.

*** Nuclear Accidents**(research, reactor, weapons test, weapons lost, vessels sunk).

There was one purported incident in Canada where a small nuclear-tipped cruise missile was fired from a US military aircraft at a UFO, missing it, of course. Although that may not be considered an accident, it is not stated whether the missile was recovered after the incident.

There were many occasions when bombs were lost, nuclear submarines loaded with missiles sank, and accidents occurred at nuclear fuel processing plants and nuclear power plants. A limited search for activity at Three Mile Island in Pennsylvania turned up dry. There may have been some related activity after the event. It will take more work.

Chernobyl was a different case. UFO Activity occurred prior to and after the accident there. Readings before and after a sphere descended over the facility just after the accident indicated that the level in that area had been reduced by over 2/3, according to Paul Stonehill in "The Soviet UFO Files".

*** Mining Raw Uranium** what better place to make a statement than the mines.

There is documented activity over uranium mines in Africa. It is likely that data will support mine-related sightings in Wyoming. And here's a fascinating event that occurred in Texas:

The summer of 1971, I was working the night shift for Conoco Oil Co. at an open pit uranium mine west of Karnes City, Tx. I was one of 6 people operating Caterpillar 657B earth movers. We were down to about 210 feet deep when this incident happened. It was about 11:10PM, just after shift change we were getting ready to crank our machines, when the 85 acre pit lit up as if it was daylight. The light was so bright that I had to squint because it hurt my eyes. I remember hearing a high pitched hissing noise and the hair on my arms stood on end. I was so scared, I fell to the ground and started praying. I remember trying to look up, but the light was so bright I couldn't. After about 2 minutes, the light started getting dimmer and I could finally look up at it. What I saw amazed me. The object was round and the bright light was coming from the center of the bottom of the UFO. Around the perimeter of the craft was hundreds of penlight size light beams that alternated in all colors of the spectrum. Now I know they were laser beams. The UFO was rising up slowly at first and then went straight up out of sight in about 10 seconds. I was crying and shaking and so was everyone else. The other shift workers thought we were crazy when we told them what had happened. But we got the last laugh. This is how we proved it actually happened. There is a vein of uranium ore that runs from George West Texas to almost Texarkana Texas. When determining where to place a mine, the following steps are accomplished: (1) A geologist with a geiger counter flies over the area and finds the highest radiation reading. (2) Drilling trucks are sent out and core samples are drilled to determine the highest concentration of uranium ore. These core samples are drilled in a grid pattern and every core sample is given a tracking number and logged in showing the concentration and amount of uranium present. (3) The open pit mine is then laid out according to these core samples. When this UFO incident happened, we were about 2 feet away from a layer of hard rock called the "tap rock" that laid directly on top of the uranium ore. The uranium ore varied in depth from 6 to 18 inches and had about the same brown color as low grade coal. Two days after this incident, the tap rock was removed to expose the uranium ore. We were astounded to find that the uranium ore was now a chalky white substance that had NO radioactivity at all! There was a 250 foot diameter circle of this chalky material in the center of the pit. Outside of the circle, the uranium ore was still as potent as before the incident. Core samples don't lie. This chalky material was uranium before this incident. Many a night I have laid in my bed thinking about what happened. I think the UFO needed the uranium for some reason.

NUFORC

Occurred : 6/15/1971 23:10 (Entered as : 6/15/71 23:10)

Reported : 5/27/1999 21:18

Posted : 6/23/1999

Location : Karnes County, TX

Shape : Circle UFO sighting over open pit uranium mine.

Interpretation of this event is that a demonstration was made regarding the use of uranium. If UFO needed raw or processed uranium, certainly given the advanced capabilities displayed, they could have taken as much as they wanted from any source. If that were the intent you would see much more of that kind of activity

around these mines and likely we would be dealing with losses at facilities where processed material is stored, which is simply not supported by the sighting data available. In this case however what we have is a known quality and quantity of raw material that is days away from being extracted. Right in front of the workers this UFO comes down and renders the uranium worthless in an area large enough to get attention. There are no other events on subsequent days. Just this one. This surely got the attention of any engineering personnel working on the project. It is likely that the information was forwarded to the AEC or another government agency. Another event was probably noted by the government for its specificity in dealing with nuclear technology. The pressure was maintained.

* Weapons Component and Chemical Manufacturing Facilities

There were likely events occurring over plants that may have been involved in materials used in processing weapons fuel. More work is needed for this category.

* Weapons Dismantling Facilities (Pantex, Texas)

This should provide some recent activity if they are monitoring our progress.

* Power Outage Events- conflict related? Nuclear related? (Vietnam – many events)

Is it possible that the power outage events of the 1960's and 1970's were responses to political/military actions? The many articles and books indicate the immense depth of political turmoil brought on by the Vietnam War. The controversy over the courses of action and the lack of a clear plan based on sound intelligence and analysis brought the public in on the political fray. These sentiments were shared by the public of allied countries as well. From the controversial Tonkin Gulf Resolution (possible UFO involvement in this incident) on we were in over our heads. Documentation from several government sources reveal that discussions to utilize nuclear weapons came up on several occasions. Early in 1965, President Johnson had initiated a massive bombing campaign in Vietnam that continued throughout the year. What happened towards November of that year? If indeed the Northeastern US power outage of that year was initiated by UFO, what was the message? What prompted that action? Was Johnson initiating a nuclear option?

There were serious nuclear bomber training missions from an aircraft carrier in the Vietnam region the summer of that year. A clear picture has not yet emerged and further historical research is needed to look for the correlative relationship. The other outage events have to be evaluated as well.

* Hiroshima and Nagasaki

Japanese friends and associates have shed much light on these events. It doesn't take long for the importance and horrific nature to set in when you study them. While it is common knowledge among some of those who were there at the time of the bombing that UFO were present weeks and perhaps months before and after, there is little known evidence to support this. After the bombing there were efforts to study the affects by Americans from many different disciplines. Film and camera crews accompanied them documenting every aspect of these affects. Included in the photographic records are probably hundreds of pictures and film footage of the UFO present on a daily basis. While a few pictures are posted on the Internet that appear to include UFO, a more robust photographic record will be needed to set the record straight. Additionally, there are probably some written accounts of the UFO surveillance. There can be no doubt that there was much outward interest and concern displayed during this unique and horrific time in human history.

* Naval Nuclear Launch Submarines

Deployment of submarines is unique due to the ability to close in to specific locations. Many of these sightings involve UFO submerging in and exiting the oceans.

* Treaties and Their Role

Is it possible that related UFO activity had a small influence on treaties? It is hard to ignore the distinct possibility that UFO have pressured our governments indirectly.

Today researchers are in a unique position. A plethora of nuclear historical information is available from many sources. Thanks to the hard work of many individuals, large numbers of sightings at sensitive installations have been documented and put into databases for study. The time is right to put new efforts into understanding the historical significance of these military UFO sightings. If indeed, these events are as relational as it now seems, we may begin to understand their role. Imagine that!

本稿の執筆者ロバート・ダベル氏は、編者の旧知で米国シアトル在住の岡村堯氏の友人で、古くからのUFO研究者である。

2000年9月に、岡村氏はダベル氏と会談し、「U=Z事件」「ワシントンUFO事件と当時の原爆使用に関する政治的状況」「USSR原発事故現場上空のUFO」「原爆実験とその施設上空のUFO」「UFOが破壊したUSSRの軍事工場」の課題について話し合いが行われた。

この会談によって、米国のUFO界では「U=Z事件」が全く知られていないことが確認され、また1952年ワシントン事件と、その軍事的背景についての解説が岡村氏よりダベル氏に伝えられた。本稿においても、この件についての紹介がみられる。

彼は2000年10月の時点で、以下のように岡村氏に述べている。

「私のUFOに対する探求は、どのような理由で彼らは地球に来ていたのか、という基本的な問いかけから発しています。その回答を求めて、今までに多くの資料を見してきました。その中にはタカシ(堯)が示した事も含まれています。それらは古代の歴史を見ても分かるおと、彼らが遥か昔から我々と共にあったことは明らかです。古代史を知り学ぶ上で、タカシは多くの資料とその見方、考え方を私に示してくれました。

私は当初、近代になってからの戦争と、その間のUFO目撃事件を調べようとしたが、多量の軍事関係目撃資料の存在とその内容を知るに及び、多くのUFO事件は核開発との関係を表しており、初めに、この問題を独立させて調べるべきものと考えました。(以下略)」

UFOの出現には、核技術開発、核兵器運搬、使用準備などの重要局面が関係する

ロバート・ダベル

以下の文章は、原文をインターネットの翻訳サービスにかけた日本語文です。翻訳できずに原文が残る箇所、意味不明箇所、文脈の乱れなど、読みにくいですが、正式の翻訳文にする能力が编者にはありませんので、このまま読者に「資料」として提示します。インターネット上の米語翻訳文の要領で読み解いてください。

Do UFO、答える、に、私たちの、政治的、核兵器のアリーナであるだろう？私たちの得る核兵器能力と過去60程度年の多産のUFO活動の攻撃を比較することは避けられません。その比較をなす際に、歴史上の関係が存在するかもしれない可能性を悟り、少なくともその決定をなす研究を実行することが必要です。主要なゴールがそうであるこのpaperユス、歴史上の相関的な概念の導入、またそのような研究のasmallサンプルを表わします。この論文は、さらに歴史研究に容易に適用される流行にデータが集められることを可能にする組織的な構造をトピックに供給します。このアプローチの固定に多くに進歩しましたが、すべてのトピックはこの記述の時点で相関的な注目を集めるとは限りませんでした。なぜ軍事の観測するデータを選びますか。軍事の観測の重要性は観察およびドキュメンテーションの高品質に埋め込まれています、活動のタイプの一貫性、そして最も重要、命令系統によって払われた注意。状態の軍との交戦はトップまでずっとattentionハミを得る最も直接の方法です。今日の状態のリーダーとの直接の接触がまれか、恐らく架空であることは明白です。非常に重要なものとして、stateユス大文字で、あるいはaその大文字の近くに観測するどれでも、したがって扱われるべきです。ほとんどの正常なUFO活動が方法に生じます、ない、夜の外觀の中で、あるいは僻地の中でのように注意を引きつけることを意味した、程度、形に関する長さに簡潔、それ、観測からの何でも確認するのにほとんど不可能。発見された時、UFO、速く去ることにより通常どんな観察も終了します。十分な注意を得る意図を示す持続を持って、多くの場合タイプと位置がはっきりして、まだ武力衝突は直接です。特定の活動の反復、関係があった、軍事、非常によく明瞭な優勢、政策/決定に対する懸念および警告のより積極的な活動で運搬を関連づけるか実証する試みでありえました。それは別個の可能性として無視することができません。これは、核技術、武器類および関連する政治的な勇敢と直接関係するUFO活動の場合です。これは可能な歴史上の関係と何が関係しますか。証拠はこの関係を支援します。それが核政策およびミルの従来の矛盾か特定の様相でも、位置、およびこれらの観測の多くのタイミングは関連する領域内の歴史上の出来事で一致します。itarization。これはちょうど米国へ当てはまりません。多くを、従来の軍事衝突および核軍国化の両方にこの関係に関する整然とした研究を全体的に適用することにより学習しなければなりません。

一般大衆への説得力のあるやり方でこの歴史上のリレーショナル概念を導入することは、一貫した例のかなり広範囲なセットを要求するでしょう。過去60年の複雑な歴史を見る場合、タスクは威圧してなります。しかしながら、特定のカテゴリーをセットし適切な世界的な軍事行動の考察で各々のために例を構築することは、これを著しく単純化することを支援します。様々な矛盾中のメconventionalモおよびメnuclearモ戦略/決定の間の分離は、いつでも維持されるに違いありません。メconventionalモ軍事行動は、それらでメnuclearモに関連するUFO活動のそれと異なるアジェンダを恐らく運ぶUFO活動を関連づけました。各カテゴリーからの結果が統計的に断固たる態度を示さないかもしれない一方、振る舞いのそれらのパターンを備えた構成をともに適用した、もっと参考になるようになります。時間とともに、感覚は、核の関連する政策/決定/出来事のタイプ、およびこれらが誘発するUFO活動の種類/タイミングに得られます。ローレン・グロスは、歴史上のリレーショナルやり方(NCP-01: いくつかの初期のパターン)で1948のベルリン危機に関して書きました。引く多くのより核の歴史上の明示があります。私たちは最初に原子兵器を爆発させることに対する所有権を主張しますが、私たちが米国でここで研究している出来事は米国に特有ではありません—英国、フランス、旧ソ連(そして今、ロシア)、中国、イスラエル、パキスタンインドおよび恐らく南アフリカ、すべて、ありそう、同様のタイプの活動を持っていました。この研究の焦点は最初の5つを単に含んでいました。それらのうち、中国とフランスは情報をほとんどこれまで産出していません。予言可能な核技術およびその利用境界と上に関するUFOのアクション。次のリストは既知のカテゴリーを表わします、のために、UFO、出来事/核の歴史上の相関的な研究:

* 原子と熱核反応である武器開発および製造ミ-研究施設(ロスアラモス、Sandia実験室、ローレンス・リヴァーモア)および他の発展的な位置。このカテゴリーは、観測の時にこれらの設備で活動とこれらの位置での観測が関係のあるかもしれないという点で真直ぐに見えます。それは、設備の繰り返された存在による、ステータス・チェックあるいは実証する関係と同じくらいさらに単純になりえます。いずれかのhistoricalsignificanceがこれらの侵入に存在するかどうか決めるために、より多くの研究がこの

カテゴリーに必要です。* 燃料処理設備。(最初にオークリッジ・テネシー、その後私の裏庭一のハンフォード・ワシントン)ハンフォードはマンハッタン計画を支援するために建造された第2の設備でした。日本の中で使用される武器の燃料はこの設備から来ました。それは監視とデモンストレーションの明白な目標になるでしょう。出来事が、三位一体テストの日付に、あるいはその日付ごろのこの設備で生じました。ハンフォード、WA:その後、65,000のft高度でN-プラント上に浮遊し始めたレーダーは、速く動いている楕円形のオブジェクトを上へ3つの航空母艦のサイズを並んで拾い上げました。6つのF6Fがオブジェクトに掻き混ぜられたが、42,000 ft(F6Fの評価された天井の上の5,000 ft)の最大の高度に達しました。パイロットは、それらのエンジンが故障し始め、燃料が危く低くなったとともに、戻ることを強いられました。その後、オブジェクトは、それが来たのと同じくらい速く消えました。少なくとも20分は出来事中に経過しました。「伸びた卵のように非常に合理化されて、カラーで薄桃色である」ものと、オブジェクトは記述され、外部の端からの蒸気を放射していました。発生の日付はRolanパウエルによって記述されました、パイロットのうちの一人、として「日本人の前の6週、1945年9月2日の東京湾の戦艦ミズーリに乗って譲渡された。モ、これ、7月の中頃の観測を置く。ハ、端で生活することアメリカン戦争ヒーローの海軍戦闘機パイロット、民間のテスト・パイロット、および私的に公表されたパイロンド.VarnerによるCIA mercenaryとしての大胆さ功績。さらに著者および校長(ウォールトAndrusのわきのRolan D.パウエル)とのインタビュー。フランス・リッジ・ミニCAPウェブサイトへ感謝。そのような重要な日付に近いこれらの設備の、あるいはその設備の近くの長い持続観測はできる、デモンストレーションとして解釈されました。これらのデモンストレーションのタイミング、しばしば著しい原子の/核の関連する出来事に関して生じます。彼らは、私たちのリーダーがこれらの侵入およびそれらの重要を知覚することを望みますか。あたかも彼らが圧力を印加しているかのように、それはそうです。オークリッジ設備上の観測、9月18日、1944の、生じられた、そのハイドパーク合意、米国間の秘密合意および英国と同じ日[F. D.ルーズヴェルトおよびW.チャーチル]日本の原子の爆撃の決定。武器資料を製造する設備上に生じた多くの出来事および歴史的意味を学習する多くの機会があります。側面の注:ハンフォードへUFOを関連づける情報の検索では、ハンフォードで掃除努力に関係のあるドキュメントが、不用のダンプ・エリアについての情報で公式に出てきました、タイトルのあるメUFO着地エリア。それがあつても、予約の最も古いダンプ・エリアのうちの1つ、そして主要なセキュリティ設備に隣接しているそれは最近の空気の写真の別のpersons調査に基づいて、現われます、掃除はその位置で完全です。それは面白い発見でした。これらの様々な掃除エリアのタイトルは、ユーモアまたは風刺のテーマを示しません。予約の汚染物質の地下羽毛は、ゆっくりコロンビア川の方へその道を進んでいます。この時に、この進行を停止させるために私たちができる多くはありません。ハ

* 武器試験ミはテスト・デートおよび位置をします、スペース・テストEMPハ八月N-テスト?(米国、英国、フランスおよびロシア)テストの大多数で外観が作られたことはありそうです。テストの間に監視を適用するUFOのように疑い深く見えるDoDからのフィルム映画フィルムがあります。これらのテストの多くはビデオで利用可能です。ハこれらのテストのうちのいくつかは、旧USSRに圧力を印加するためにデモンストレーションそれら自身でし?。これらはUFOからのデモンストレーション活動に対する有望な候補になるでしょう。どちらかが元あつた項目あるいは試みられたwasnユト中の1つのテスト、月に生じる予定だつたデモンストレーション・テストでした。2つのアカウントがあります、ミ、人、空軍はそれは言う、プロジェクトを閉じる、を下って、また別のもの、それ、それは言う、UFOによって始められ、遮られ、破壊された。ハ・テスト、現実にスペースに起こつた、しかしながら、1958年に、再び、テスト猶予期間の後の1962年に、の上に。これらは放射線を備えたバン・アレン帯をイオン化する結果を実現するために実行されました。それがジョンストン島からのテストで生産するとともに、レーダー、ラジオ・コミュニケーションおよび力はすべてありました、大きなエリアで外に打ちました。このEMP(電磁パルス)影響する、外に打つ際に有用なツールであると知られている、仕返りするenemiesユ能力。EMPのenemyユs使用の可能性はミサイル防衛能力を持っている際に重要なドライバーになりました。ジョンストンの別の試みられたテストは、詰め物の上のロケットの破壊、および着手設備のまわりの大きなエリアの生じるプルトニウム汚染に帰着しました。死は事故に続く発見に起因しました。その、想像不可能、私たちはスペースへこれらの武器を送ることで逃げ続けていたでしょう。米国と

USSRの間で、少なくとも20のテストがありました。これらは、財産、宇宙飛行士および宇宙飛行士を一定間隔で配置するために持ち出された危険および人口により全体として(UFOに言及しないこと)遮断されました。宇宙条約は作成されました、に応じて、爆発のためのスペースからの核兵器あるいはスペースから目標とすることを維持します。Spaceモ(ピーターKuranミGoldhil Homeメディア・インターナショナル)、およびインターネットで利用可能な宇宙テストについてのより多くの情報の中のメ

Nukesと呼ばれるよいビデオがあります。これらのテスト用軍艦機による剥離性の物質の配達はUFO飛行-oversを持っていました。さらに、ヒロシマと長崎の爆撃にはエスコートがない剥離性の物質を伝えるUSSインディアナポリス、およびその不運なミッションが、UFOで訪問を行っていたことはありそうです。その生存者がいます、沈むこと、しかし、それは不条理に見えます、会見、そのそれらが生き抜いた地獄のそれらの個人のアカウントを聞いた後のそれらの航海の間の可能な観測に関するm。* ロケット/ミサイル開発(白い砂浜、オーストラリア、ロシア)。それは、核兵器用の将来の伝達手段として、および私たちの宇宙目的のためにモニター・ロケット開発へのUFOには一貫しているでしょう。アカウントはこの観察を支援するために存在します。一層の仕事は例を提供するために必要です。

* 核脅威あるいは離れている条件-様々な矛盾および行き詰まり中に核兵器の使用を追求する米国決定が軍事のコマンド推薦の日付。ハ世界の至る所でのワシントンのD.C.および他の大文字の上の侵入を含むだろうのはこのカテゴリーです。引く多くの例があります。これらの実例中のデモンストレーションはより多くでしょう、大胆で、リーダーシップに向けられ、持続に執拗。1952年のフラップは多くの秘密を保持します。その時、私たちは韓国の戦争の真中にいました、水素爆弾の開発を備えたスケジュール上にあった、それらの核兵器開発および中国を持ったソビエトに関して熟慮すべき多くの複雑な問題を行っていました。朝鮮戦争へのChinaユs関与は、原子兵器の使用を少なくともかつて勤めることに向けた私たちの軍事の命令を押ししました。この実例は1951年の最初の数か月に起こりました。1952年には、私たちが、インドシナ地域の状況に関する中国を含む新しい開発を?sっていました。中国はもう一度aidinginでした、結局フランスの植民地の政府を排除し、ベトナム戦争になるために固執する、成長している矛盾。1984年9月16日に著名な日本の新聞朝日で研究され印刷された記事は、1952年7月16日にFOIAによって検索されたドキュメントによれば、共同のチーフが原子兵器を利用する中国と対決する推薦をしたと述べます。English:ハメTheアメリカ国務省に翻訳されるような記事からの抜粋は、フランス人がインドシナ戦争中にその前線の戦いで徐々に負けて、その外交文書では、アメリカ軍隊が心配していると第14の[1984年9月]に発表しました。アメリカはベトナムの独立(ホーチミンの率いるベトナムの軍隊)にリーグへの資源を切つてやることを熟考していました、またそれらが南を下ることを防ぐために中国に対する核兵器を使用することそれは外交文書と区別ができません[1983]を昨年リリースした、それ、朝鮮戦争を入力するときにアメリカによってuseagainst中国のために熟慮した核兵器。しかし、これは第1のインドシナ戦争中の核兵器の使用に対する思いやりが、公になった最初の時です。それらのドキュメントによれば、中国に対する核攻撃が考慮された最初の時が1952年1月11日に、アメリカ、フランスおよび英国の軍の代表によって開催された会議にありました。統合参謀本部の議長ブラッドリー。彼はsを停止させるためにそれを示唆しました。インドシナ戦争中の中国のouthern進歩、それらは、それらのオプションのうちの1つであるとして核兵器の使用に関する中国を警告します。しかし、それらが報復的攻撃の中で使用するだろうと方法に伝えることは、愚かであると考えられました。また、提案が落とされました。ハIn、同じ年、7月16日に、国務省および統合参謀本部によって開催された戦略の軍事の会議で、議長ブラッドリーは、核兵器でそれらの交通網を麻痺させずに、中国の南の進歩を停止させることが困難だろうと述べました。トルーマン大統領の視界が何に関係があったかはこの時期に知られていません、このトピック。モそこで、議事堂あるいは他の重要な政府設備で、核兵器の使用およびUFOの外観の政治的/軍事的考察間に強い接続が存在するという支援すべき証拠があります。WWII以来の矛盾のうち、中国のものがホーチミンに武器を供給し始めた時、ベトナム戦争は1949年に始まる多くの核シナリオを提供しました。確かに、核脅威および行き詰まりはすべて、上に示された1952年のD.C.の相関性について評価を下す前に一貫したパターンを捜すと研究されなければなりません。

* 核爆撃機とミサイルの翼の配備-米国、そして海外へ、増加した活動、の結果。(使命(etcノ)の訓練についての爆撃機を悩ます警戒ステータス上の爆撃機および武器記憶装置上に)。(ほとんどの米国位置はWWIIから去られた基礎でした)米国のための配備歴史ドキュメント、また海外へ利用されています。このカテゴリーはまだドキュメント化されませんが、配備を備えた活動の相関性が確実であることを示唆するために、多くの例がその数年にわたって集められました。この努力が継続するとともに、これはデータで支持されるでしょう。このトピックをカバーする主要な目的は強い統計関係を示すことです。UFOが本当に中へ興味を持っていて、証拠支持物として私たちの核コンポーネントを心配している場合、これは本質的にこれらの基礎に関する異なる侵入の動機になるでしょう。モニタリング武器タイプ、移動および配備は確実に活動になるでしょう、それらはするでしょう、従事されました。このトピックが覆いを取る別の様相は、ourmilitary平面に一般に処理です。UFO、私たちの軍用機を直接くっきりと取る傾向がある。ハ* 核の誤りの警戒体制-、米国か、USSR(政治的な緊張を増加させる国による、特定の核の関連するアクションあるいは配備の考察を備えた)で、早期警戒レーダー装置あるい

は衛星を生じることによって示された爆撃機艦隊攻撃あるいはミサイル発射。これは1つの最新のトピックです。もちろん、自分の合意であった多くの誤りの警戒体制がありました、設備不調も、不適当な設備設計あるいは技術幼時その後、これらが生じた時が起っていたか注目するために、完全に私たちの手から恐らく落ちるいくらかおよび興味を感じさせることがあります。例として、中央の1970ユsでは、ヨーロッパNATOの諸国は国防政策を改めて明確に述べていました。USSRからの核脅威に直面して多くの地上部隊を持つことは意味をほとんどなしませんでした。実際に経済的に戦略的に両方意味をなしたことは中距離の劇場によって東ヨーロッパを防御することでした、核の傾けられたミサイル。ただ一つの問題は、ミサイルの位置がモスクワに6分レスポンス期間を単に与えたということでした。米国が明瞭なインバランスを残したものとそれを比較すること。パーシングIIミサイルの配備は80年代の初めの中で始まりました。この期間中の誤りの警戒体制に関する多くの記事が、1985による誤りの警戒体制の数が何千の中に確実にあることを示します。これは、確認することが困難です。確認することが等しく困難、これらの警戒体制の源です。同じことがあります、少数の説明r 何度もepeatedしました。これが少数を説明している一方、残りについてはどうですか?誤りの核警戒体制の問題の真実の深さは国民の信頼と恐らく関係する理由のために調査されないし露出されません。UFOが行なわれたシナリオを備えたバランスから私たちの防御装置を維持することにおける役割を持っていた場合、防御部の誰がいつかこれを認めるでしょうか。1950年の12月にさかのぼって、ロシアの後の約1年がその最初の原子爆弾を爆発させました。私たちは、私たちの北東の海岸の方へ率いられたロシアの爆撃機のように見えた警戒体制を持っていました。これは恐らく私たちの最初の警戒でした。どんな不利益な処置も講じられる前に、爆撃機はレーダー・スクリーン上で溶暗しました。その、第1の爆発が1年後に、十分にロシア人を提供していただろうということに注目するのに面白い、武器を組み立てて、かつ爆撃機をタスクの準備ができていようにする時間。これはよいデータを上に得る困難なトピックです。しかし、UFOがそのような方法に米国およびソビエトを取るだろうことは一貫しているでしょう。これを読む誰かが例に気づいている場合は、それらをとともに渡してください。

* ミサイル発射準備あるいはミサイル軌道変更一に対する、あるいはテストに対するミサイル翼干涉(非破壊で制限された範囲デモンストレーション/警告)は、削減するダミーの弾頭軌道を始めて、私たちが予想せず設計することができる非常に高度な能力をすべて実証します。(米国およびUSSRの両方。それらは、ほかに袖を上へ何を持ちますか。)あるポイントでは、私たちが、可能性、およびICBM武器を利用する可能性を?分離するラインを通過しました。これはそれが恐らくそれを明らかにするので従事する価値がある議論です、軍事、そして政治的、なんとかしてするだろう、変わられた、その、初期に様々なミサイル基地に熟達していた大胆なUFO活動を誘発する1960ユs。軍事関連するUFO行動について議論する様々な出版物を読んだのはほとんどの個人の秘訣ではありません、それはミサイルの制限のある数の能力を始める、少数の場合およびそれ上でオフラインに得られた、座標を始める、少なくとも以前変更された。ハ 1964年(慎重な詐欺: ミ・ポブ・ジェーコブスを薄膜で覆うビッグ・サーUFO)の9月に太平洋上にさらにダミーの弾頭を備えた地図ICBMのテスト発射が外にありました。このテストは薄膜で覆われました。また、フィルムの批評に際して、空軍中の職員は、ディスクが、弾頭を囲み、かつ、弾頭上の4つの別個の位置にビームのようなレーザーを放ち、構造を出て、構造を始めているのを見つけました。その後、ダミーの弾頭はその軌道から転がり出ました。他の多くの実例が、ロシアの個々のサイロを含んでいます、どこで、痛ましい15秒のオペレーターに示されたコントロール、発射シーケンスは始められました、また、ミサイルが開始するところだった。重いUFOはサイロ・コントロール設備の外部で浮遊しました。トップの職員はこの出来事に気づいていました。なぜこれらの種の活動が生じたか。1つの評価は、私たちが優秀な能力を示されていたということです。何のために、目的?ここに、いくつかの可能な理由があります:私たちの軍事の命令に私たちがそれらを利用するために適所になければならない財産に対する管理を行っていないことを示すこと。次のことを許可すること、私たちは、私たちの設備がよく機能しないことあるいはそれでも出所が外部のことを知ってはなりません。実際のシナリオ中のそれを許可して、私たちは、妨害wouldnユtが再び生じるという確実性を持たないでしょう。不確実性は、重要な役割を果たすように見えます。いつでも行く準備ができてい何千もの核兵器で、および結果不確実性の予測で、場所を持っていません。永久の損害はこれらの活動によって招かれませんでした。また、私たちの国家安全は最小にcompromでした。ised。トップの人々はこれらの出来事によく気づいていました。* 核の軍事演習(米国と継ぎ目)。これはある研究で埋まる価値がある別のカテゴリーです。もしデモンストレーションのためにこれらの他のエリアを使用して、圧力が印加されていれば、適当な核練習は同様にそれらを招待していたでしょう。* 核事故(研究、リアクター、武器テスト、失われた武器、沈められた船)。もちろん、小さな核の傾けられた巡航ミサイルがそれを恋しく思って、UFOに米国軍用機から発射されたカナダには1つのうわさされる出来事がありました。それは事

故と考えられないかもしれませんが、ミサイルが出来事の後回復されたかどうかは述べられません。爆弾が失われた時、多くの場合がありました。ミサイルが載せられた原子力潜水艦は沈みました。また、事故が核燃料加工工場および原子力発電所で起こりました。ペンシルバニアのスリーマイル島での活動の制限のある捜索は出てきました、乾燥している出来事の後にある関連する活動があったかもしれません。それはより多くの仕事をとるでしょう。チェルノブイリは異なる場合でした。UFO活動が、事故に先立って、およびその事故の後にそこに生じました。メTheのソ連のUFO Filesモの中のポール Stonehillによれば、そのエリアのレベルが2/3以上までに縮小されたことを事故が示した直後に、球体の前の、およびその球体の後の読書は設備上に下りました。

* 採鉱の生のウランウム・ミ、何、鉱山よりステートメントを行なう、よりよい場所。アフリカでウランウム鉱山に活動がドキュメント化されます。データは、ワイオミングで私のものに関連する観測を支援するでしょう。そしてhereユs、テキサスで生じた魅惑的な出来事:1971の夏、私は、Karnes都市、Txの西開いた穴ウランウム鉱山でConoco Oil社のための夜勤を動かしていました。私はキャタピラー657B土木労働者を操作する6人のうちの1人でした。この出来事が起こった時、私たちは約210フィートまで深く元気がありませんでした。それ、午後11:10ごろあった、ちょうど、変更変更の後に、私たち、得ていた、準備ができていて、私たちの機械をクランクで動かすために、いつ、85エーカーの穴、ついた、を上へ、あたかもそれが日光だったかのように。光は非常に明るかったので、私は斜視でなければなりません(それが私の目を傷つけたので、)。私は、最高値が雑音をしっと叱って投げられたのを聞いたことを覚えています。また、私の腕の上の髪の毛は直立して立っていました。私は地面への荒地で祈り始めました。私は、見上げようとしたことを覚えています。しかし、私はできなかった(光が非常に明るかったので、)。約2分の後に、光は、私がそれを最後に見上げることができるdimmerandを得始めました。私が見たものは私を驚かしました。オブジェクトは円形でした。また、明るい光はUFOの底の中心から来ました。技術の周囲のまわりで、スペクトルのすべての色の中で交替した何百ものペンライ?g・サイズ光ビームがありました。今、私は、それらがレーザー・ビームだったことを知っています。UFOはゆっくり初めは増しており、次に、約10秒で直接見えなくなりました。私は叫んでおり震動しており、したがって、他の人すべてでした。他の変更労働者は、何が起こったか彼らに伝えた時私たちが正気でないと考えました。しかし、私たちは最後の笑いを得ました。このようにして、私たちは、それが現実に起こることを証明しました。ほとんどジョージ西洋テキサスからTexarkanaテキサスへ走るウランウム鉱山の静脈があります。どこで鉱山を置くべきであるか決める場合、次のステップが遂行されます:(1) geigerカウンターを持った地質学者はそのエリア一帯に飛び、最も高放射能が読んでいるを見つけます。(2)トラックに穴を空けることは発送されます。また、穴は、ウランウム鉱石の最も高い集中を決定するために錐芯試料に空けられます。穴はグリッド・パターンの中でこれらの錐芯試料に空けられます。また、すべての錐芯試料はトラック番号を与えられ、ウランウム・プレゼントの集中および量を示してログインされます。(3)その後、開いた穴鉱山はこれらの錐芯試料によってレイアウトされます。このUFOの出来事が起こった時、私たちは、ウランウム鉱石の上に直接置いた「タップ岩」と呼ばれるハードロックの層から約2フィート離れていました。6~18まで深さで様々なウランウム鉱石はじりじり動き、劣等種の石炭とほぼ同じ褐色の色がありました。Two この出来事の数日後に、タップ岩はウランウム鉱石を露出するために削除されました。ウランウム鉱石が今いずれにしてもNO放射能を持っていた白墨の白い物質だったことを知って、私たちは驚きました!穴の中心にこの白墨の材料の250の足直径円がありました。円の外部で、ウランウム鉱石は出来事のようにまだ有力でした。錐芯試料は位置しません。この白墨の材料はこの出来事の前にウランウムでした。私が何が起こったかに関するベッド思考を中へ置いた、多くの夜。私は、UFOがある理由のためにウランウムを必要としたと思います。

NUFORC生じました:6/15/1971 23:10(次のように入力された 6/15/71 23:10)報告しました:5/27/1999 21:18は次のものを記入しました:6/23/1999位置:Karnes郡(TX形):開いた穴ウランウム鉱山に観測する円UFO。この出来事の解釈は、デモンストレーションがウランウムの使用に関して作られたということです。表示された高度な能力を確かに与えられて、UFOが生か処理されたウランウムを必要とした場合、ハ、それらは彼らが任意の出所から不足したのと同じ量をとることができました。もしそれが意図ならば、これらの鉱山のまわりのその種の活動にさらにもっとたくさん見るでしょう。また、恐らく、処理された資料が格納される場合、私たちは設備で損失に対処するでしょう。それは単に利用可能な観測データに支援されません。しかしながら、この場合、私たちが持っているものは既知の質、および抽出から数日先の原料の量です。労働者の正面に、このUFOは下へ来て、注意を得るために十分に大きなエリアにおいて無益なウランウムを与えます。後の日に他の出来事はありません。このちょうど1つ。これは、確実に任意のエンジニアリング人員の注意をプロジェクトに作用するとしました。AEC

あるいは別の政府系機関へ情報が転送されたことはありそうです。別の出来事は、核技術に対処する際にその特異性のための政府によって恐らく注意されました。その圧力が維持されました。* 武器コンポーネントおよび化学薬品を製造する設備適当な出来事が、fuel.More仕事が必要な武器を処理するのに使用される用品に関係していたかもしれないプラント上に生じていました、このカテゴリー。* 武器を分解する設備(Pantex、テキサス)それらが私たちの進行をモニターしている場合、これはある最近の活動を提供すべきです。* ミ矛盾が関連づけた停電イベント?核、関連づけられた?(ベトナム・ミ、多くの出来事)1960ユsおよび1970ユsの停電出来事が政治/軍事のアクションに対する反応だったことはありえますか。多くの記事および本が、政治的混乱の巨大な深さがベトナム戦争によって上にもたらされることを示します。行動方針、および音知能および分析に基づいた明瞭な計画の不足に関する論争は、政治的な騒ぎで公を引き入れました。これらの感傷は、社会of八同盟国によって同様に共有されました。論争的になっているトンキン湾解決(この出来事への可能なUFO関与)から、の上で、私たちは、頭に関して中にいました。いくつかの政府筋からのドキュメンテーション、核兵器を利用する議論がいくつかの場合に出合ったことを明らかにします。ジョンソン大統領は1965年の初めに、initiatを持っていました。ed、その年を通じて継続したベトナムの重い爆撃キャンペーン。何がその年の11月ごろ起こりましたか。確かに、その年の北東の米国停電がUFOによって始められた場合、メッセージは何でしたか。何がそのアクションを刺激しましたか。ジョンソンは核オプションを始めていましたか。ベトナムの地域には航空母艦からの重大な核爆撃機訓練使節団がありました、その年の夏。明瞭な絵はまだ出現していません。また、さらに歴史研究は相関的な関係を捜すために必要です。他の停電出来事を同様に評価しなければなりません。

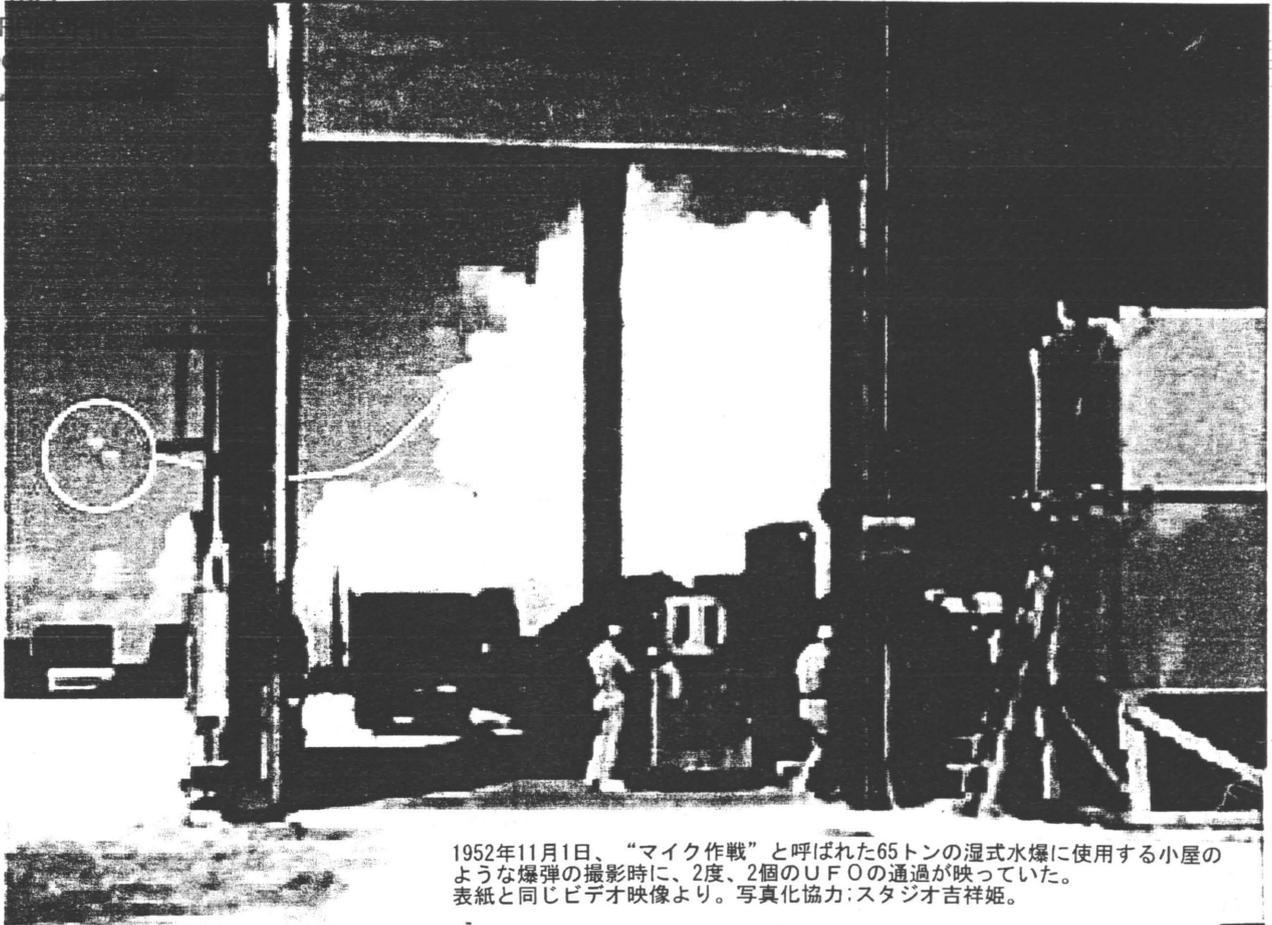
* ヒロシマおよびNagasakiハ日本の友達および仲間はこれらの出来事を多くに明確にしました。それ、doesnユtは重要性および恐ろしい自然が、あなたがいつそれらを研究するかに、セットするのに長くかかります。それが爆撃の時にそこにいた人々のうちの数人の間の周知の事実である間、そのUFO、以前に現在の週および恐らく数か月だった、そしての後に、これを?x援する証拠はほとんど知られていません。爆撃の後に、様々な訓練からのアメリカ人によってaffectsを研究する努力がありました。フィルムとカメラクルーはこれらのすべての面をドキュメント化して、それらに伴いました、影響します。写真の記録に含まれていた、恐らく一日単位で存在するUFOの何百もの写真およびフィルム映画フィルムです。少数の絵がインターネットにポストされている一方、それはUFOを含むように見える、より多くの強健な写真の記録が記録を正すために必要でしょう。さらに、UFO監視のいくつかの書面のアカウントが恐らくあります。人間の歴史のこのユニークで恐ろしい時の間表示された多くの外部の興味、および関係があったという疑問はありえません。* 海軍の核着Submarinesハ潜水艦の配備は、特定の位置へ閉じるべき能力により、中へユニークです。これらの観測の多くは、中へ沈み、海洋を出るUFOを含んでいます。* 条約およびそれらのRoleハ関連するUFO活動が条約に小さな影響があったことはありえますか。別個の可能性を無視することは困難です、そのUFO、私たちの政府に間接的に圧力を加えました。ハ今日、研究者はユニークな位置にいます。核の歴史上の情報の過多は多くの出所から利用可能です。多くの個人の困難な仕事のおかげで、敏感な装置の多くの観測はドキュメント化され、研究用データ・ベースの中に入れられました。時間はちょうど、これらの軍事のUFO観測の歴史的意味の理解に新しい努力を注ぐことです。確かに、これらの出来事が、それが今見えるのと同じくらい関係のある場合、私たちは彼らの役割を理解し始めるかもしれません。それを想像してください!

編集後記

本特集号は2000年頃から構想などがスタートしました。その最大のきっかけは、米国在住の岡村堯氏との連携でした。米国からは次々と核とUFOに関する情報が届きましたが、なかなか着手することが出来ず、「通信」の発行でみなさまとの繋がりを維持しました。本誌の通巻50号を、その特集で出さなくては、先に進まない、という危機感もありましたが、一冊の雑誌として、どのような形態にするか、そのことでまとまらず、2年以上の歳月が流れました。

2001年に岡村氏とダベル氏より「序文」を戴き、また「古代」「現代」と進む歴史の流れの先に現代の核時代のUFOを置く、という設定を戴きました。さらに「重要な古代の写真を大きく」「説明は簡潔に」という提案を受け、それに沿った「形」が出来つつありましたが、これらを生かすとなると、ページ数が膨大になってしまうため、躊躇しました。今年に入り、盛岡の厚海先生よりCBAの発行物全てを受継いだ事が次のきっかけで、「UFOの能力」という範囲における「CBA」の歩みを述べることで、「核接続論文」への橋渡しが可能ではないか、と思い立ちました。そう思ったとたん、急速に版下作業が進み、また学術研究出版センター様からの寄稿もあって、あっという間に60ページの版下となりました。翻訳文など不備な点はお詫びします。また100ある資料の割程度しか使用できず、使用しなかった分については、「第Ⅱ集」「第Ⅲ集」と少しづつ発表してゆきたいと思っています。特に岡村氏より提供された古代アメリカ・インディアンの素晴らしい岩絵など、いかにしてこれらを「美しいものを美しいままに」皆様にお届けできるか、それが最大の課題ではあります。

ご批評を戴ければ幸いです。2006年6月18日 天宮 清



1952年11月1日、“マイク作戦”と呼ばれた65トンの湿式水爆に使用する小屋のような爆弾の撮影時に、2度、2個のUFOの通過が映っていた。表紙と同じビデオ映像より。写真化協力:スタジオ吉祥姫。

